桜井市立埋蔵文化財センター
発掘調査報告書　24集

桜　井　市

# 平成14年度国庫補助による
# 発掘調査報告書

2003. 3. 31

桜井市教育委員会

# 序

私たちの桜井市は奈良盆地の東南部に位置し、市域の約７割を山地が占める自然の豊かなまちです。しかし近年は平野部を中心に開発が進み、市民生活の利便性が向上する一方で、かつての桜井市の姿が失われつつあります。市内には纒向遺跡、大福遺跡、上之宮遺跡や、箸墓古墳、茶臼山古墳、メスリ山古墳など全国的にも注目される貴重な文化遺産が数多く分布しており、この地域が古代におけるわが国の中心地であったことが知られていますが、こうした遺跡も開発にともなう破壊が危惧されています。

桜井市ではこれらの遺跡を保護し、啓発するための事業の一つとして市内遺跡の調査・保存に力を入れており、本書には平成14年度に桜井市が国・県の補助を受けて実施した発掘調査のうち纒向遺跡、吉備池遺跡、大藤原京関連遺跡、箸倉山遺跡、谷遺跡の調査成果をおさめております。

最後になりましたが、現地調査にあたりまして指導・助言を頂いた多くの関係機関の方々、地主及び地元協力者の方々、酷暑・厳寒のなか作業に従事して頂いた作業員の方々や学生諸君、遺物の整理・報告書の作成に協力して頂いた整理員の方々に深くご厚礼申し上げ、序のことばにかえさせて頂きます。

本書が文化財の普及・啓発の一助となり、また研究者の方々の資するところとなれば当教育委員会としても望外の喜びであります。

平成15年３月31日

桜井市教育委員会

教育長　石　井　和　典

# 例　　言

1．　本書は平成14年度国庫補助事業として奈良県桜井市教育委員会が実施した、市内遺跡の範囲確認調査の報告書である。本報告所収の調査は、吉備池遺跡第13次調査が重要遺跡範囲確認調査であった以外は、いずれも個人住宅建設に伴うものである。平成14年度は纒向遺跡第129・130・133・134次調査（中田繁夫氏・田中貞義氏・梅村峯子氏・中野吉庸氏）、吉備池遺跡第13次調査（上田正章氏）、大藤原京関連遺跡第39・41次調査（森本信介氏・木内勝博氏）、箕倉山遺跡第３次調査（峙博恭氏・峙せつ子氏）、谷遺跡第17次調査（大西洋三氏・田中秀憲氏・金山寿明氏・弓場祥光氏）と、圃場整備事業に伴う磐余遺跡群第５次調査（桜井市農林課）の計10箇所の発掘調査を行なっており、本書では磐余遺跡群第５次調査を除く９調査の成果を報告している。

2．調査主体：桜井市教育委員会事務局

教育長 石井和典、事務局長 細田勝、事務局次長 池田正輔、中川行央
文化財課長 萩原儀征、文化財課主幹 清水眞一、文化財係主査 堀尾えい
技師 橋本輝彦、松宮昌樹、技師補 福辻淳、臨時職員 木場佳子、清水哲

3．調査担当者：清水眞一、松宮昌樹、福辻淳、木場佳子、清水哲

4．調査補助員：安井隆浩（新潟大学大学院ＯＢ）、豊福恵子（奈良大学ＯＧ）、堂浦千景（仏教大学）、萩原良子（早稲田大学ＯＧ）、福西貴彦、西本和哉、早川千尋、小林透（奈良大学）

5．調査作業員：佐野圭造、鳴岡辰雄、井上久幹、上田猛、植西キヨ、辻カズ子、田中啓治
高奥久子、高奥恵子、中西智子、山本二照、栢本武志、岡田秀治、宮久保吉H
山口定男、川島利市郎、榊原伊市郎、澤田己喜雄、小南一也

6．整理作業及び報告書作成：枡田巳容子、鳴岡由美、河村廣子、中村真理、安井隆浩、豊福恵子、奥田佳代子、長野千秋、堂浦千景、萩原良子、後藤浩之（奈良大学大学院）、福西貴彦、西本和哉、早川千尋、小林透

7．執筆・編集者：本書の執筆は各調査担当者がおこない、文末に明記している。なお本書の編集は福辻がおこなった。

8．本書における方位・座標値はすべて日本測地系によるものを示し、第２章第５節及び７～９節については世界測地系による数値(括弧内に表記)も併記した。なおレベル高はすべて海抜高を表す。

9．出土遺物をはじめ調査記録一切は桜井市教育委員会において保管している。活用されたい。

表紙：纒向遺跡第134次調査出土 石製臼

# 目　　次

序
例言
目次
第１章　平成14年度の国庫補助による発掘調査…… 1
第２章　発掘調査の成果
第１節　纒向遺跡第129次発掘調査報告 …… 2
第２節　纒向遺跡第130次発掘調査報告 …… 16
第３節　吉備池遺跡第13次発掘調査報告 …… 26
第４節　大藤原京関連遺跡第39次発掘調査報告 …… 39
第５節　笠倉山遺跡第３次発掘調査報告 …… 41
第６節　大藤原京関連遺跡第41次発掘調査報告 …… 44
第７節　谷遺跡第17次発掘調査報告 …… 46
第８節　纒向遺跡第133次発掘調査報告 …… 52
第９節　纒向遺跡第134次発掘調査報告 …… 55
第３章　まとめ…… 66
図版
報告書抄録

# 表 ・ 挿 図 目 次


表１　平成14年度国庫補助事業による発掘調査一覧…… 1
表２　纒向遺跡第129次調査出土土器一覧表①…… 14
表３　纒向遺跡第129次調査出土土器一覧表②…… 15
表４　纒向遺跡第134次調査土坑３出土土器一覧表…… 65

図１　平成14年度国庫補助事業による発掘調査位置図（S＝1/50000）…… 1
図２　纒向遺跡第129次発掘調査位置と周辺の調査（S＝1/4000）…… 2
図３　トレンチ配置図（S＝1/600）…… 3
図４　第１トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）…… 5
図５　第１トレンチ植物腐食層２出土遺物実測図（S＝1/3）…… 5
図６　第１トレンチ洪水堆積層４出土遺物実測図（S＝1/3）…… 7
図７　第２トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）…… 9
図８　第２トレンチ洪水堆積層３出土遺物実測図（S＝1/3）…… 9
図９　第２トレンチ洪水堆積層４出土遺物実測図①（S=1/3）…… 10
図10　第２トレンチ洪水堆積層４出土遺物実測図②（S＝1/3）…… 11
図11　第２トレンチ洪水堆積層４出土遺物実測図③（S＝1/3）…… 12
図12　纒向遺跡第130次発掘調査位置図（S＝1/5000）…… 16
図13　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/100）…… 18
図14　土坑SK2002平面・断面実測図（S＝1/40）…… 19
図15　縄文土器実測図①（S＝1/4）…… 21
図16　縄文土器実測図②（S＝1/4）…… 22
図17　縄文土器実測図③（S＝1/4）…… 22
図18　石製品実測図①（S＝1/2）…… 23
図19　石製品実測図②（S＝1/2）…… 24
図20　石製品実測図③（S＝1/2）…… 25
図21　吉備池遺跡第13次発掘調査位置図（S＝1/2500）…… 26
図22　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/150）…… 28
図23　溝SD1002・井戸SE1001実測図（S＝1/40）…… 30
図24　掘立柱建物SB1001平面・断面実測図（S＝1/50）…… 31
図25　落ち込みSX1001・溝SD1002出土遺物実測図（S＝1/4）…… 33
図26　溝SD1001・柱穴SP1056・覆土出土遺物実測図（S＝1/4）…… 33

図27　井戸SE1001上層出土遺物実測図（S＝1/4）……34
図28　井戸SE1001下層出土遺物実測図（S＝1/4）……34
図29　土馬実測図（S＝1/4）……35
図30　瓦実測図①（S＝1/3）……36
図31　瓦実測図②（S＝1/3）……37
図32　大藤原京関連遺跡第39次発掘調査位置図（S＝1/2500）……39
図33　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/70）……40
図34　箕倉山遺跡第３次発掘調査位置図（S＝1/4000）……41
図35　第10・13層上面・断面実測図（S＝1/80）……42
図36　整地層内出土遺物実測図（S＝1/3）……43
図37　発掘調査位置図（S＝1/25000）……45
図38　トレンチ位置図（S＝1/5000）……45
図39　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）……45
図40　出土遺物実測図（S＝1/3）……45
図41　谷遺跡第17次発掘調査位置図（S＝1/2500）……46
図42　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/100）……47
図43　溝１・２・４・５出土遺物実測図（S＝1/3）……48
図44　整地層上～下層出土土器実測図（S＝1/3）……49
図45　整地層上～下層・排土内表採遺物実測図（S＝1/3）……50
図46　纒向遺跡第133次発掘調査位置図（S＝1/2500）……52
図47　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）……53
図48　溝１出土遺物実測図（S＝1/3）……54
図49　纒向遺跡第134次発掘調査位置図（S＝1/5000）……55
図50　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）……56
図51　土坑３平面・断面実測図（S＝1/20）……57
図52　土坑３出土土器実測図①（S＝1/3）……59
図53　土坑３出土土器実測図②（S＝1/3）……60
図54　土坑３出土土器実測図③（S＝1/3）……61
図55　土坑３出土土器実測図④（S＝1/3）……62
図56　土坑３出土石製品実測図（S＝1/3）……63

# 図　版　目　次


**纒向遺跡第129次調査**

図版１　纒向遺跡第129次調査（１）
　第１トレンチと箸墓古墳前方部（南東より）
　第１トレンチ全景（拡張前　南より）
図版２　纒向遺跡第129次調査（２）
　第１トレンチ西壁断面（東より）
　第２トレンチ東壁断面（北西より）
図版３　纒向遺跡第129次調査（３）
　第２トレンチ全景①（北より）
　第２トレンチ全景②（南より）
　出土土器①
図版４　纒向遺跡第129次調査（４）
　出土土器②
　出土土器③
図版５　纒向遺跡第129次調査（５）
　出土土器④
　出土土器⑤
図版６　纒向遺跡第129次調査（６）
　出土土器⑥
　出土土器⑦
図版７　纒向遺跡第129次調査（７）
　出土土器⑧
　出土土器⑨

**纒向遺跡第130次調査**

図版８　纒向遺跡第130次調査（１）
　トレンチ全景（北より）
　西側中央拡張区（東より）
図版９　纒向遺跡第130次調査（２）
　西壁土層堆積状況（東南より）
　縄文土器①
図版10　纒向遺跡第130次調査（３）
　縄文土器②
　縄文土器③（注口土器）
　石鏃
　磨石
　サヌカイト剥片

**吉備池遺跡第13次調査**

図版11　吉備池遺跡第13次調査（１）
　トレンチ全景①（東南より）
　トレンチ全景②（西より）
図版12　吉備池遺跡第13次調査（２）
　溝ＳＤ1002　河原石出土状況（南より）
　溝ＳＤ1002　完掘状況（南より）
図版13　吉備池遺跡第13次調査（３）
　井戸ＳＥ1001（北より）
　井戸ＳＥ1001土層断面（南より）
図版14　吉備池遺跡第13次調査（４）
　落ち込みＳＸ1001（西北より）
　南東拡張区（北より）
図版15　吉備池遺跡第13次調査（５）
　瓦器
　落ち込みＳＸ1001・溝ＳＤ1002　断割部分出土瓦器
図版16　吉備池遺跡第13次調査（６）
　落ち込みSX1001・溝SD1002　断割部分出土遺物
　井戸ＳＥ1001出土遺物
　溝ＳＤ1001出土瓦器椀
　覆土出土瓦器椀
図版17　吉備池遺跡第13次調査（７）
　土馬
　軒丸瓦
　羽釜
　羽釜補修痕

羽釜
図版18　吉備池遺跡第13次調査（８）
瓦器小皿
土師器小皿
図版19　吉備池遺跡第13次調査（９）
丸瓦
平瓦

**大藤原京関連遺跡第39次調査**

図版20　大藤原京関連遺跡第39次調査
第７層下面平面（南より）
トレンチ東壁断面（西より）

**箕倉山遺跡第３次調査**

図版21　箕倉山遺跡第３次調査（１）
第10層上面（北より）
第12層上面（北より）
図版22　箕倉山遺跡第３次調査（２）
トレンチ東壁断面（西より）
整地土層内出土遺物

**大藤原京関連遺跡第41次調査**

図版23　大藤原京関連遺跡第41次調査
１．トレンチ全景（西より）
２．トレンチ全景（東より）
３．出土土器①（表）
４．同（裏）
５．出土土器②（表）
６．同（裏）

**谷遺跡第17次調査**

図版24　谷遺跡第17次調査（１）
トレンチ全景（南より）
整地土層上面（北より）
図版25　谷遺跡第17次調査（２）
整地土層下層上面（南より）
ピット17断面（西より）
図版26　谷遺跡第17次調査（３）
溝１・２・４・５出土遺物
整地土層下層出土遺物
図版27　谷遺跡第17次調査（４）
整地土層上～下層出土遺物
整地土層上・中及び表採遺物

**纒向遺跡第133次調査**

図版28　纒向遺跡第133次調査（１）
トレンチ全景（東より）
溝２完掘状況（北より）
図版29　纒向遺跡第133次調査（２）
溝１完掘状況（南東より）
溝１出土遺物

**纒向遺跡第134次調査**

図版30　纒向遺跡第134次調査（１）
トレンチ全景（北より）
土坑３土器検出状況（西より）
図版31　纒向遺跡第134次調査（２）
土坑３礫検出状況（西より）
土坑３完掘状況（西より）
図版32　纒向遺跡第134次調査（３）
土坑３出土遺物①
土坑３出土遺物②
図版33　纒向遺跡第134次調査（４）
土坑３出土遺物③
土坑３出土遺物④
図版34　纒向遺跡第134次調査（５）
土坑３出土遺物⑤

# 第１章　平成14年度の国庫補助による発掘調査

## 1．はじめに

平成14年度に実施した国庫補助による発掘調査は10件である（表１）。このうち吉備池遺跡第13次調査は重要遺跡範囲確認調査であり、磐余遺跡群第５次調査は圃場整備に伴う確認調査であった以外は、いずれも個人住宅建設に伴う発掘調査であった。本書では磐余遺跡群第５次調査を除いた９件の発掘調査の成果について報告している。

| 地図No. | 調　査　名　称 | 所　在　地 | 期　　間 | 面　積 | 主な遺構・遺物 | 担当者 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 雄向遺跡第129次 | 箸中1008－2 | 5月22日～6月7日 | 57㎡ | （箸墓古墳周辺） | 福辻 |
| 2 | 雄向遺跡第130次 | 豊前86－1、86－5 | 5月23日～6月5日 | 55㎡ | 縄文後期、土坑・柱穴 | 木場 |
| 3 | 吉備池遺跡第13次 | 吉備47 | 7月22日～8月30日 | 72㎡ | 中世、井戸・掘立柱建物 | 木場 |
| 4 | 大藤原京関連遺跡第39次 | 橋本66－4、66－7 | 8月2日～5日 | 12㎡ | | 松宮 |
| 5 | 箕倉山遺跡第３次 | 茅原305－1、307－1 | 11月26日～12月6日 | 225㎡ | 中世、柱穴 | 松宮 |
| 6 | 大藤原京関連遺跡第41次 | 西之宮128－1、128－5 | 11月27日～29日 | 20㎡ | | 清水(眞) |
| 7 | 谷遺跡第17次 | 安倍木村団地1丁目14－5 | 12月25日～1月24日 | 64㎡ | 古墳後期.溝　鉄滓･フイゴ羽口 | 松宮 |
| 8 | 雄向遺跡第133次 | 巻野内101 | 1月22日～30日 | 21㎡ | 古墳前期、溝 | 清水(哲) |
| 9 | 磐余遺跡群第５次 | 池之内773－1～788 | 1月28日～3月31日 | 622.5㎡ | 掘立柱建物・溝 | 松宮 |
| 10 | 雄向遺跡第134次 | 太田168－1 | 2月6日～3月10日 | 40㎡ | 古墳前期、土坑 | 福辻 |

表１　平成14年度国庫補助事業による発掘調査一覧

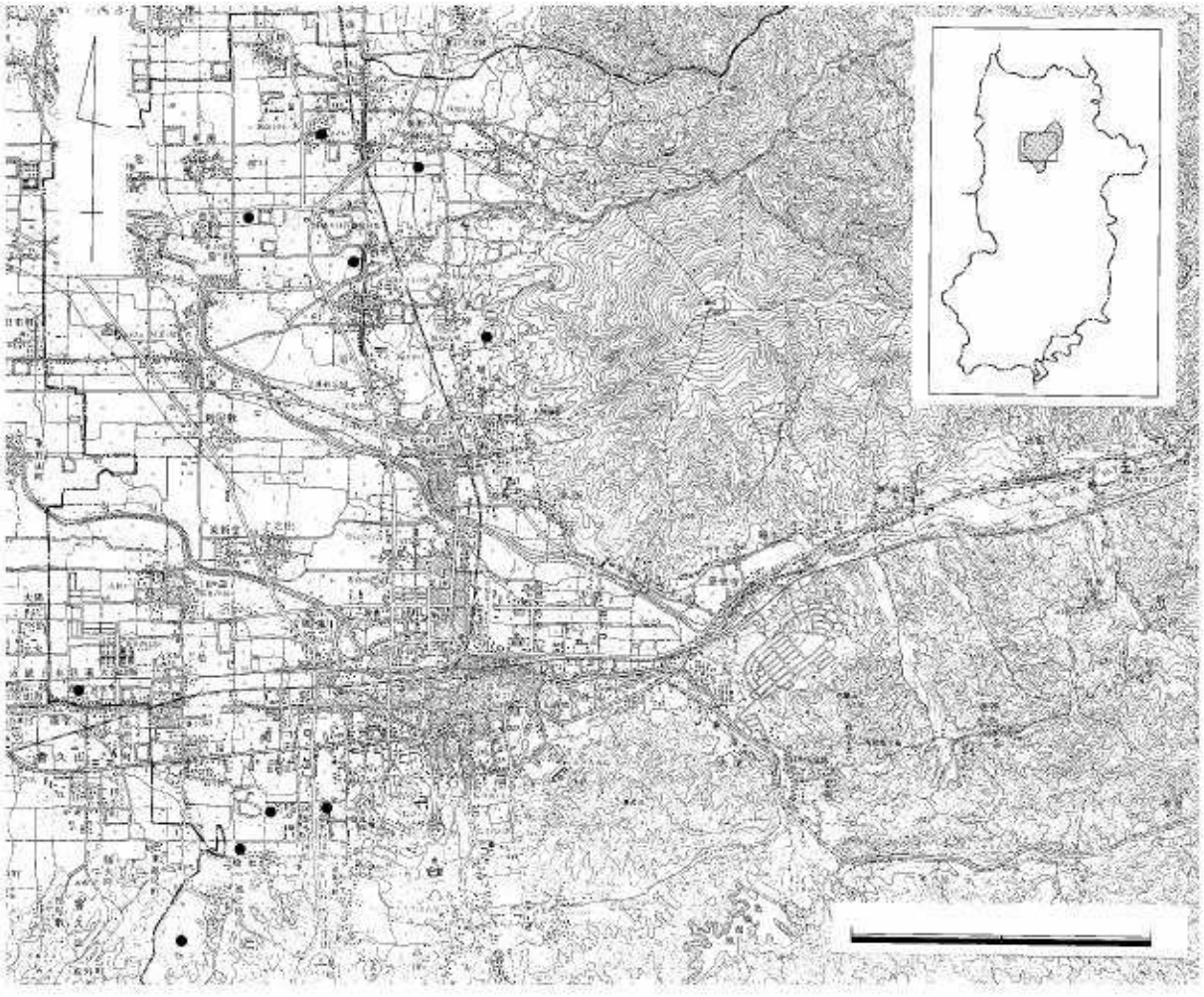


図１　平成14年度国庫補助事業による発掘調査位置図（S＝1/50000）

# 第２章　発掘調査の成果

## 第１節　纒向遺跡第129次（箸墓古墳周辺第13次）発掘調査報告

### 1．はじめに

纒向遺跡第129次調査は桜井市大字箸中1008番地２において、個人住宅の建設に先立って行われた。調査地は箸墓古墳と纒向川のほぼ中間に位置し、付近の小字名は塚ノマエである。一帯は纒向川が形成する扇状地上にあたり、周辺には東から西へと緩やかに傾斜する水田地帯が広がっている。

調査地の北側約100mに位置する箸墓古墳は、全長290m前後の墳丘規模が推定される[1]最古の大型前方後円墳として注目されている。この箸墓古墳は現在倭迹迹日百襲姫の陵墓として宮内庁により管理されており、内部施設および墳丘の大部分の状況については一切知ることができない。一方で箸墓古墳の周辺ではこれまでに12次にわたる調査が行われており、墳丘を囲繞する周濠に関して多くの知見が得られている。1994年に実施された纒向遺跡第81次調査（箸墓古墳周辺第７次調査）では、前方部北側の墳裾に伴う葺石と、盛土による周堤状遺構が確認され、両者の間に周濠状の遺構が存在するこ

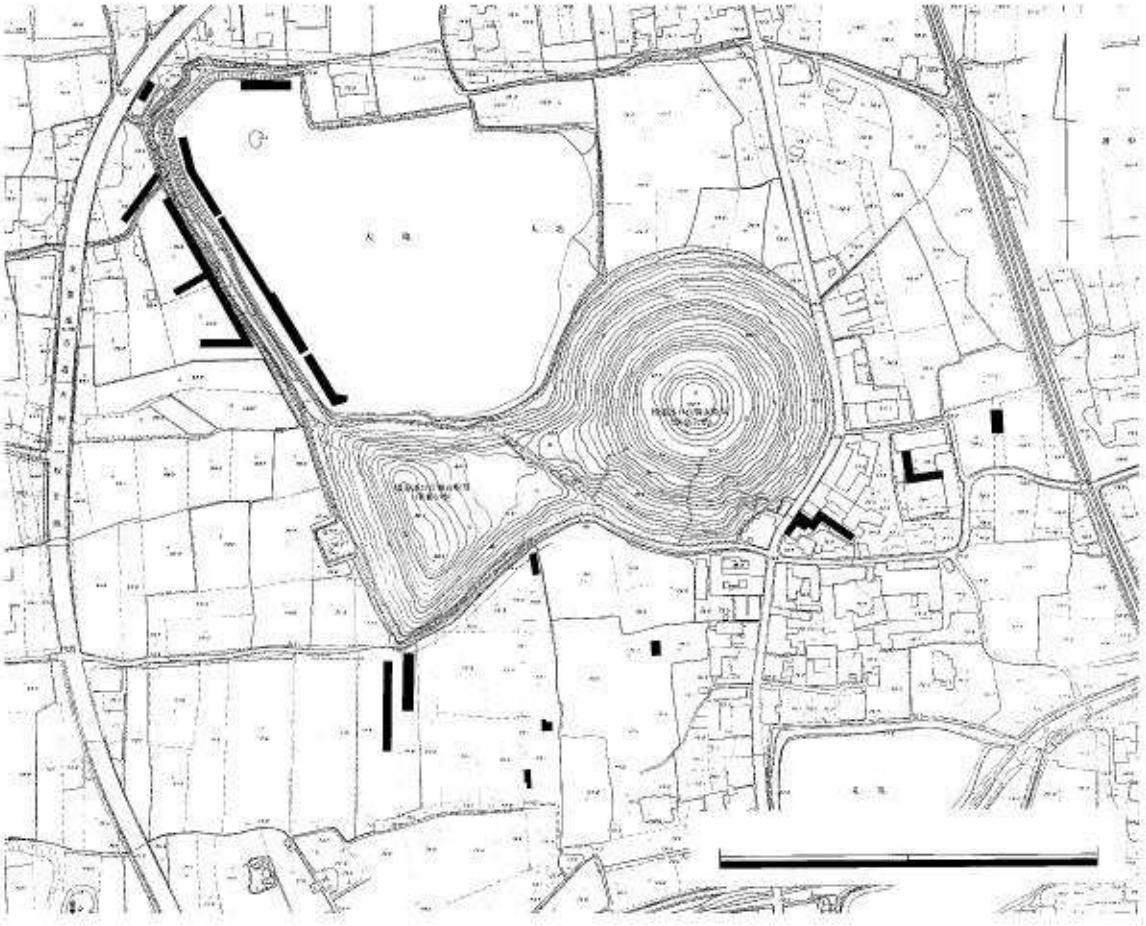


図２　纒向遺跡第129次発掘調査位置と周辺の調査（S＝1/4000）

とが明らかにされた[2]。後円部東側で行われた纒向遺跡第109次（箸墓11次）調査では同様の周濠・周堤とともに、葺石を伴う渡り堤が検出されている[3]。また前方部南側で実施された纒向遺跡第118次（箸墓12次）調査においても周濠・周堤状遺構が確認された[4]。これらの成果を踏まえた検討の結果、クビレ部南側の纒向遺跡第68次（箸墓6次）調査で検出された遺構[5]も周濠に関連するものである可能性が高くなっている。こうした調査の積み重ねにより、箸墓古墳墳丘に沿って全周する、幅10～12mを測る周濠の姿が明らかにされている。

この周濠とは別に、さらに外側を巡る幅の広い「外濠」の存在が近年想定されるに至っている。纒向遺跡第81次（箸墓7次）調査では、上述の周堤状遺構の外側で幅約55mに及ぶ落ち込みが確認された。この落ち込みは、西側の隣接地で行われた纒向遺跡第85次（箸墓9次）調査においてその続きが確認され[6]、纒向遺跡第118次（箸墓12次）調査では、前方部南側でも周堤状遺構の外側に落ち込みが存在することが明らかにされている。これらの調査結果と周辺の水田畦畔の状況などから推定されている「外濠」の平面形態は、幅50m前後で馬蹄形を呈するものである[7]。

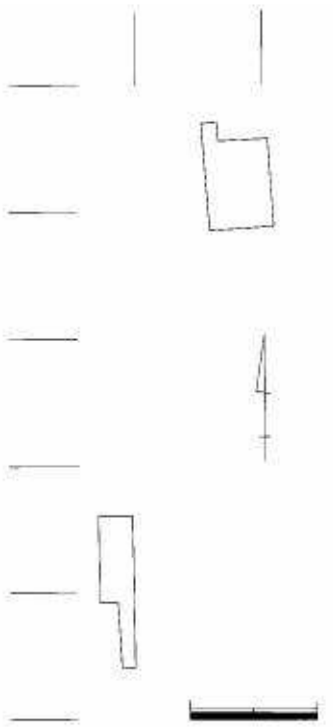


図3　トレンチ配置図
（S＝1/600）

今回の調査地はこの「外濠」の外肩が想定されている付近に位置している。このことから、「外濠」の存在及びその規模を示すような遺構が検出される可能性が想定された。なお調査は平成14年5月22日から6月7日にかけて実施し、調査面積は57㎡である。

## 2．基本層序・遺構

調査区は申請地内の北端（第1トレンチ）と南西隅（第2トレンチ）の2ヶ所に設定した。両調査区間は約20mの距離があるが、以下に記したように概ね対応する層序がみとめられた。

| | | |
|---|---|---|
| 第Ⅰ層 | 現代耕作土層 | 黒褐色シルト～極細粒砂 |
| 第Ⅱ層 | 洪水堆積層1 | 灰色中粒砂　（小礫を含む） |
| 第Ⅲ層 | 旧耕作土層 | 青灰色～暗緑灰色シルト　（粗砂を含む） |
| 第Ⅳ層 | 洪水堆積層2 | 灰色中粒砂 |
| 第Ⅴ層 | 腐植土層1 | オリーブ黒色粘土～シルト　（植物細片を含む） |
| 第Ⅵ層 | 洪水堆積層3 | 灰色粗粒砂 |
| 第Ⅶ層 | 腐植土層2 | 黒褐色粘土～シルト　（植物細片含む） |
| 第Ⅷ層 | 洪水堆積層4 | 暗オリーブ灰色礫（～拳大）（植物細片を含む） |
| 第Ⅸ層 | ベース | 灰色礫（～径1㎝程度） |

調査地の約100m南側を纒向川が西流していることから周辺は氾濫原であったと考えられ、数度にわたる洪水堆積がみとめられた。そのうち洪水堆積３(図４－９層、図７－７～10層)及び洪水堆積４(図４－11層、図７－12層)から多くの土師器片が検出されている。ベース層(図４－12層、図７－13層)からは遺物が全く検出されなかったことから、周辺の基盤をなす古い扇状地堆積物と考えられる。第Ⅴ層(図４－７層、図７－６層)及び第Ⅶ層(図４－10層、図７－11層)は植物遺体を多く含む黒褐色の粘質土で構成される腐植土層であり、このうち第Ⅶ層については後述するように布留式期古相段階の堆積が想定される。これと同時期の腐植土層が箸墓古墳前方部北側(81次、箸墓７次)や後円部南東側(109次、箸墓11次)、前方部南側(68次、箸墓６次)などの周濠内堆積にみとめられる点は注意が必要である。

なお今回の調査においては、当初想定された箸墓古墳周濠に関連すると考えられるものを含め、明確な遺構は確認されなかった。

## ３．出土遺物

### （１）第１トレンチ出土遺物

**遺物出土層位**　第１トレンチでは近世以降の遺物が含まれる耕作土層を除くと、腐植土層２(図４－10層)と洪水堆積層４(図４－11層)から遺物が出土している。第２トレンチにおいては腐植土層にはさまれた洪水堆積層３(図７－７～10層)からも土師器片が出土するが、第１トレンチでは南端部を除いて、二つの腐植土層の間に洪水堆積層３に相当する砂礫層が顕著にみとめられない。これとは別に第２トレンチではみとめられなかった植物遺体層が形成されている。この植物遺体層及びその上層の腐植土層１(図４－７層)からは１点の出土遺物も確認されなかった。

**出土土器の概要**　旧耕作土中の陶器類を除いて、第１トレンチから出土した遺物はすべて土師器であった。検出された土師器はいずれも小片であり、完形かそれに近い状態に復元できた個体は１点もみとめられなかった。出土した土器の総量はコンテナケースでおよそ１箱分におよび、確認された器種は甕、壺、小形丸底壺、小形器台、小形丸底鉢、高坏などで、外来系と考えられる個体も含まれていた。このうち反転復元が可能なのは29個体で、これに加えて時期差・地域差が反映されやすいと考えられる甕の口縁部小片の図化を試みた。これにより第１トレンチでは計56個体の土器を図示することができた(図５・６)。なお各個体の法量・色調等については表２において示している[8]。

**腐植土層２出土土器**（図５）　腐植土層から出土した土器のうち図示することができたのは以下の14点である。図５の(１)は小形器台の脚部と思われる。(２)～(４)は小形丸底壺であり、内外面ともにミガキ調整がおこなわれていた。このうち(２)の外面には少量の漆の付着がみとめられた。

(５)～(９)は甕口縁部の小片であり、ヨコナデ調整により仕上げられていた。(５)は短い二重口縁を持つ個体で、吉備系の甕であると考えられる。(６)～(９)は内湾する口縁部で、(６)・(７)の端部は内側に肥厚する。(８)・(９)の端部には端面が形成され、外側にもわずかに肥厚している。(10)は内湾する口縁の端部を内側に肥厚させる甕であり、肩部外面にハケメが施されている。(11)はわずかに内

湾する口縁を持ち、外傾する端面に弱い凹線を巡らせる甕である。肩部の外面はタテハケ調整がおこなわれ、内面はケズリにより仕上げられていた。(14)は長く内湾する口縁部を有する甕で、端部は内側に肥厚させる。体部内面にはケズリが施される。(12)は壷の底部と考えられる。わずかに突出する平底を呈し、内外面にはハケメがみとめられた。(13)はS字状口縁台付甕の破片である。外面にはタテ方向のハケメが施され、内面には板状工具によると思われる圧痕がみとめられた。

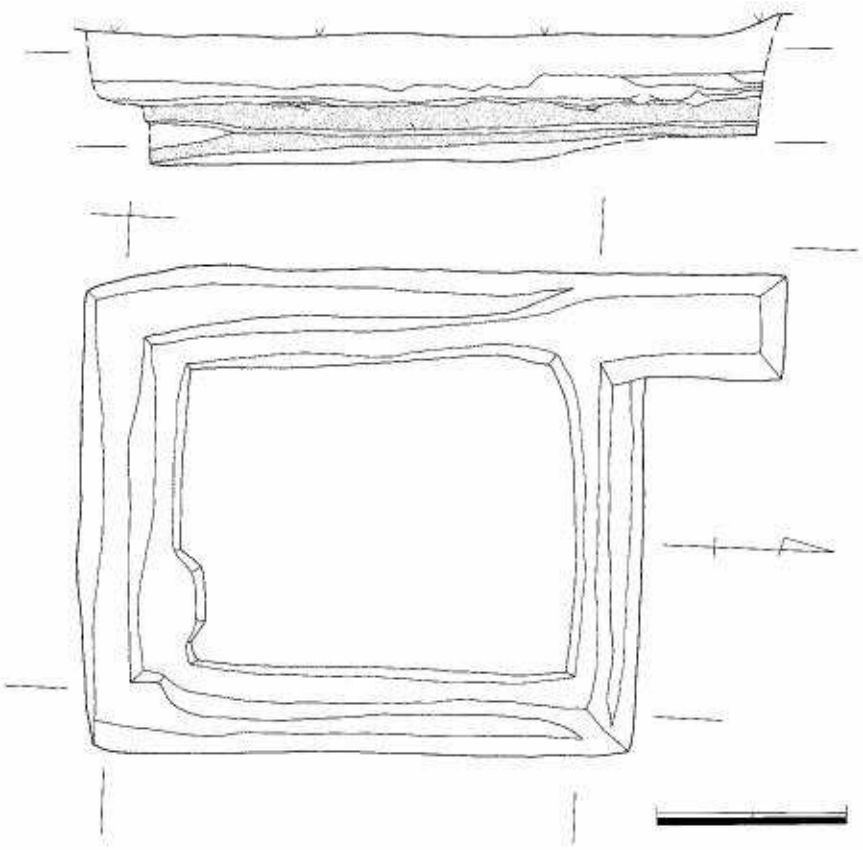


図4　第1トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）

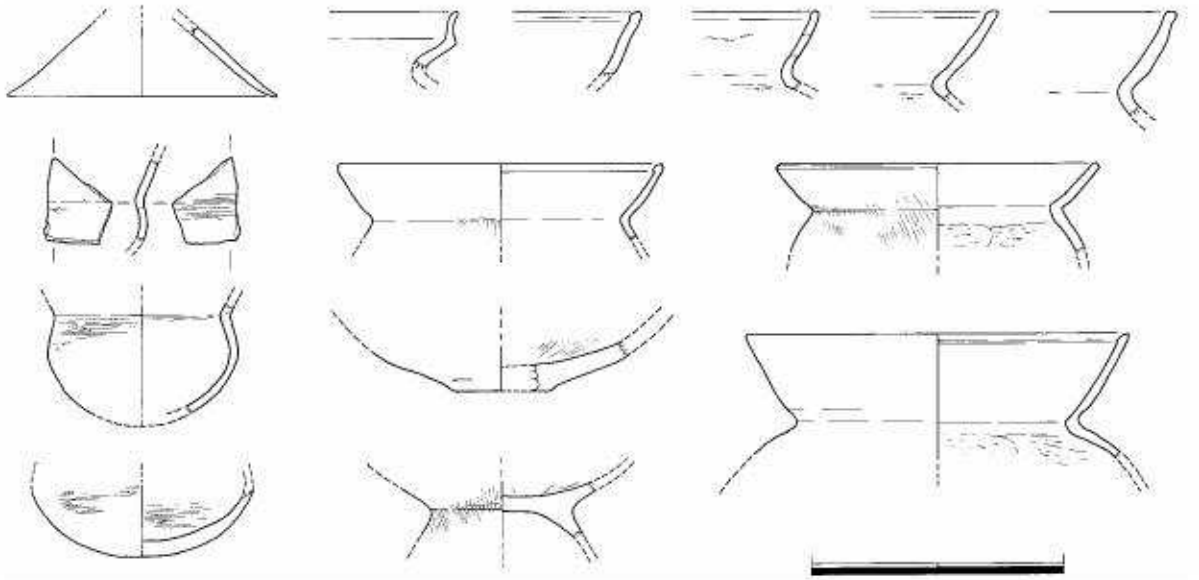


図5　第1トレンチ腐植層2出土遺物実測図（S＝1/3）

**洪水堆積層４出土土器**（図６）　多くの土師器小片が出土したが、このうち図化することができたのは42点である。

図６の(15)～(34)は甕の口縁部で、いずれも小片であった。(15)は外反する口縁で、端部の外側に端面を持つ。(16)～(24)は直線的に立ち上がる口縁を有しており、このうち(17)～(20)の端部には外傾する端面が形成され、内側に肥厚する。(21)～(23)の口縁端部は内側と外側に肥厚し、上方に端面を有する。(26)～(32)は内湾する口縁部で、いずれも内側に肥厚させる口縁端部形態であった。(33)は東海系のＳ字状口縁台付甕の口縁部である。(34)は吉備系の甕の口縁部で、上方に立ち上がる短い二重口縁部の外面には櫛描沈線がみとめられた。

(35)は有段口縁を持つ小形丸底鉢で、外面はミガキにより仕上げられる。(36)は小形丸底壷で、やや外側に広がる口縁部を有する個体である。(37)は小形丸底壷と考えられる個体である。内外面ともにミガキが施されていた。(38)は高坏の脚部で、直線的に広がる脚部とそこから屈折して広がる裾部を持つ。

(39)は短頸壷で、やや厚手の口縁部を持つ個体である。口縁端部は丸くおさめられる。(40)は短頸壷の口縁部と考えられる。端部を丸くおさめる口縁部を有し、内外面ともにハケメがみとめられた。(41)は広口壷で、頸部のくびれ部分に列点文を施す突帯を巡らす。(42)は外来系の個体と考えられる個体で、甕の口縁部から肩部にかけての破片と思われる。外面には明瞭なハケメが施され、内面はナデにより仕上げられる。(43)は、口縁部から肩部への屈曲が不明瞭な甕である。口縁端部には端面を有し、外面肩部にはタタキが施され、内面はナデにより仕上げられる。(44)～(46)は直線的に広がる口縁部と、上方につまみ上げられる口縁端部を有する甕である。(45)の肩部外面にはタタキがみとめられ、(46)の体部内面はケズリにより仕上げられていた。(47)は短い二重口縁を持つ吉備系の甕である。口縁部外面には櫛描沈線が巡らされていた。(48)～(50)は端部を丸くおさめる口縁を有する甕である。このうち(49)・(50)は口縁を外反させており、肩部にはタタキメがみとめられる。(51)・(52)はわずかに内湾する口縁の端部を内面に肥厚させる甕である。(53)は突出して中央をくぼめる甕の底部で、(54)はわずかに突出する平底を呈する壷の底部である。(55)は東海系のＳ字状口縁台付甕の脚台部で、外面には明瞭なハケメが施される。(56)は甕の肩部付近で、内面にはケズリが施されていた。

（２）　第２トレンチ出土土器

**遺物出土の層位**　耕作土層からは近世以降の遺物が出土し、それ以外では腐植土層２（図７－11層）をはさむ洪水堆積層３・４（図７－７～10・12層）において土器が検出されている。第１トレンチと同様に腐植土層１（図７－６層）からは１点の遺物も出土しておらず、腐植土層２からもほとんど検出されていない。なおここでは第１トレンチで見られたような植物遺体層は形成されていなかった。

**出土遺物の概要**　第２トレンチからは耕作土層の陶器類を除くと、コンテナケースで1.5箱分の土師器と、用途不明の木器片が２点出土している。出土した土師器のうち反転復元が可能な個体と甕口縁部の小片は計84個体で、図８～11に示している。確認された器種は小形丸底鉢、小形丸底壷、小形器台、高坏、短頸壷、広口壷、甕などで、第１トレンチと同様に外来系の土器が若干量含まれてい

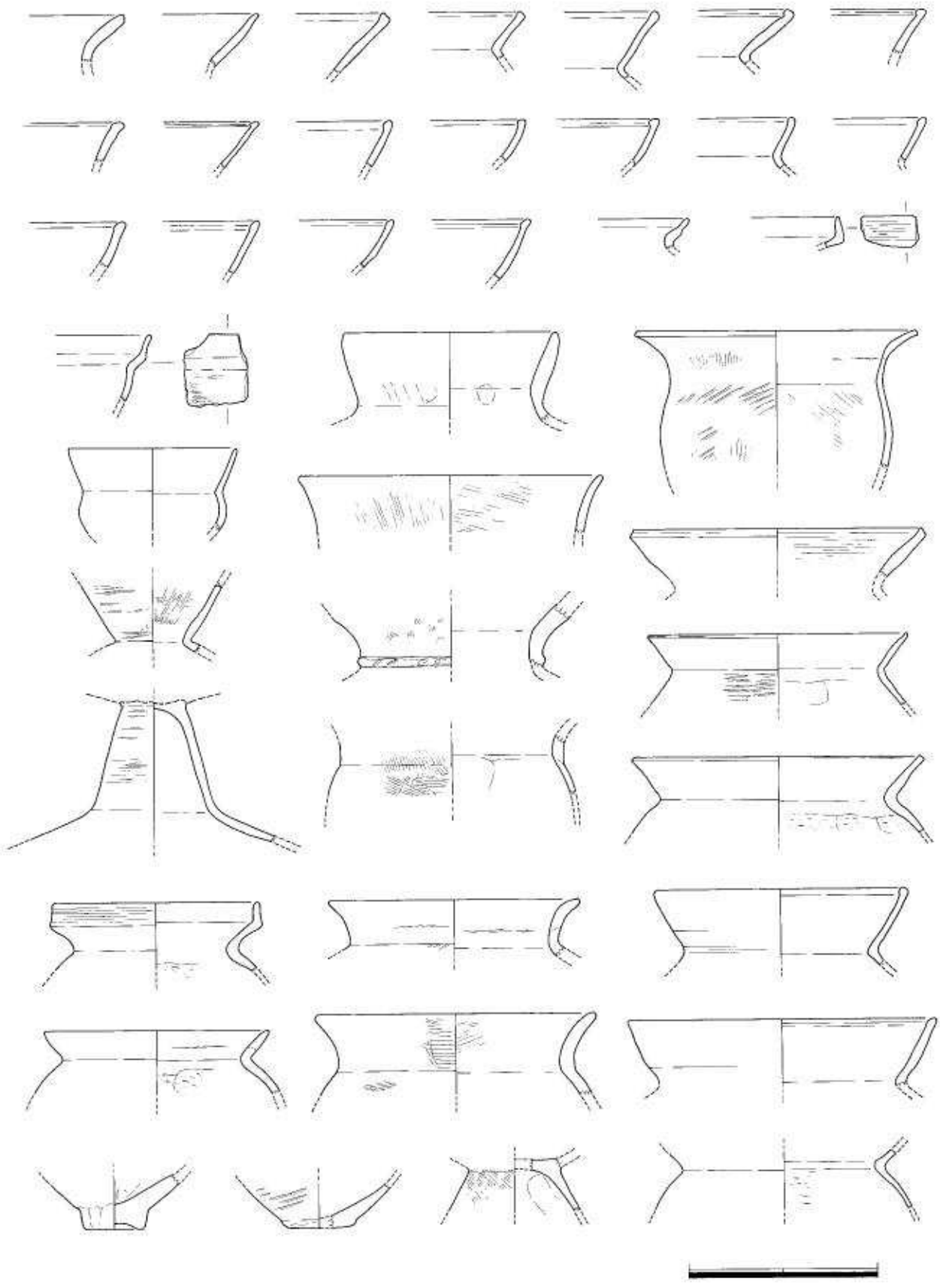


図6　第1トレンチ洪水堆積層4出土遺物実測図（S＝1/3）

た。土師器はいずれも小片であり、完形に近い姿に復元できる個体は存在しなかった。なおこれらの個体の法量・色調等は表２・３において示している。

**洪水堆積層３出土土器**（図８）　洪水堆積層４に比して出土量は少なかったものの、計14点の土器を図示することができた。以下で各個体の形態的特徴と調整について記すことにする。

図８の(57)は小形丸底鉢で、有段口縁を持つ個体である。内外面ともにミガキで仕上げられていた。(58)は高坏の口縁部と考えられ、内面にはハケメ、外面にはミガキがみとめられた。(59)～(63)は甕の口縁部である。(59)は内湾する口縁の端部を内側に肥厚させる。(60)・(61)は直線的な口縁部を持ち、その端部は(60)では丸くおさめ、(61)は内面を肥厚させている。(62)・(63)は外反する口縁で、端部外側に面を有していた。(64)・(65)は、ともに直線的に広がる口縁の端部を上方につまみ上げる甕である。(64)の口縁内面はハケメが見られ、体部内面はケズリで仕上げられる。(65)は口縁部が短く、体部内面にはケズリが施されていた。(66)・(67)は甕の肩部付近の破片で、(66)の内外面には不明瞭なハケメがのこり、(67)の肩部外面にはタタキがみとめられた。(68)は直線的な口縁を有する甕で、その端部は内面に肥厚させている。口縁部内面にはヨコハケ、肩部外面にはタテハケが施され、体部内面はケズリにより仕上げられていた。(69)は壷の底部で、突出する平底を呈する。内面はケズリ、外面には弱いハケメがみとめられた。(70)はＳ字状口縁台付甕の脚台部である。直線的に広がる脚端部を内側に折り返しておさめている。

**洪水堆積層４出土土器**（図９～11）　拳大以下の礫を含むこの層からは、比較的大きな破片も含めて多くの土器片が検出された。そのうち図化できたのは70個体である。

(71)～(73)は小形丸底壷の口縁部で、内外面ともにミガキ調整をおこなう。(74)・(75)は、口縁端部を上方につまみ上げる形態を持つ小形器台である。受部内面は放射状にミガキを施し、外面にはハケメを施す。(76)は小形器台の脚部である。外反してのびる脚部には３方向に円形透孔が開けられ、脚部下半には内外面ともにハケメが見られる。脚部上半には明瞭な凹線が数条巡らされ、脚部中ほどには列点文を施している。(77)はＸ字形を呈する小形器台の脚部であり、外面はミガキ、内面には弱いハケメがみとめられた。(78)は椀形の坏部を持つ高坏と考えられる個体で、内面にはミガキ調整がみとめられた。(79)は椀形の坏部を有する高坏であると思われる。内外面ともにミガキが施されていた。

(80)は外反する口縁を持つ広口壷と考えられる個体で、外面にはハケメが施される。(81)は広口壷で、四国地域に特有の形状を示す個体である。ほぼ垂直に立ち上がる頸部と、そこから大きく外反して広がる口縁部を有し、口縁端部は上方につまみ上げられている。(82)は二重口縁壷の口縁部で、口縁部の下方を垂下させる形態であると考えられる。内外面ともに波状文が施されていた。(83)も二重口縁壷の口縁部で、内面はヨコハケ調整がなされていた。(84)～(86)は、やや外反する口縁部を持つ短頸壷である。(84)の外面にはハケメがみとめられるが、(85)・(86)は内外面ともにミガキ調整がおこなわれている。

(87)～(110)は甕の口縁部である。(87)・(88)は体部と口縁部の間の屈曲が不明瞭な個体で、口縁端部は丸くおさめられる。(88)の口縁部内外面にはヨコハケが施される。(89)・(90)は比較的直線的に

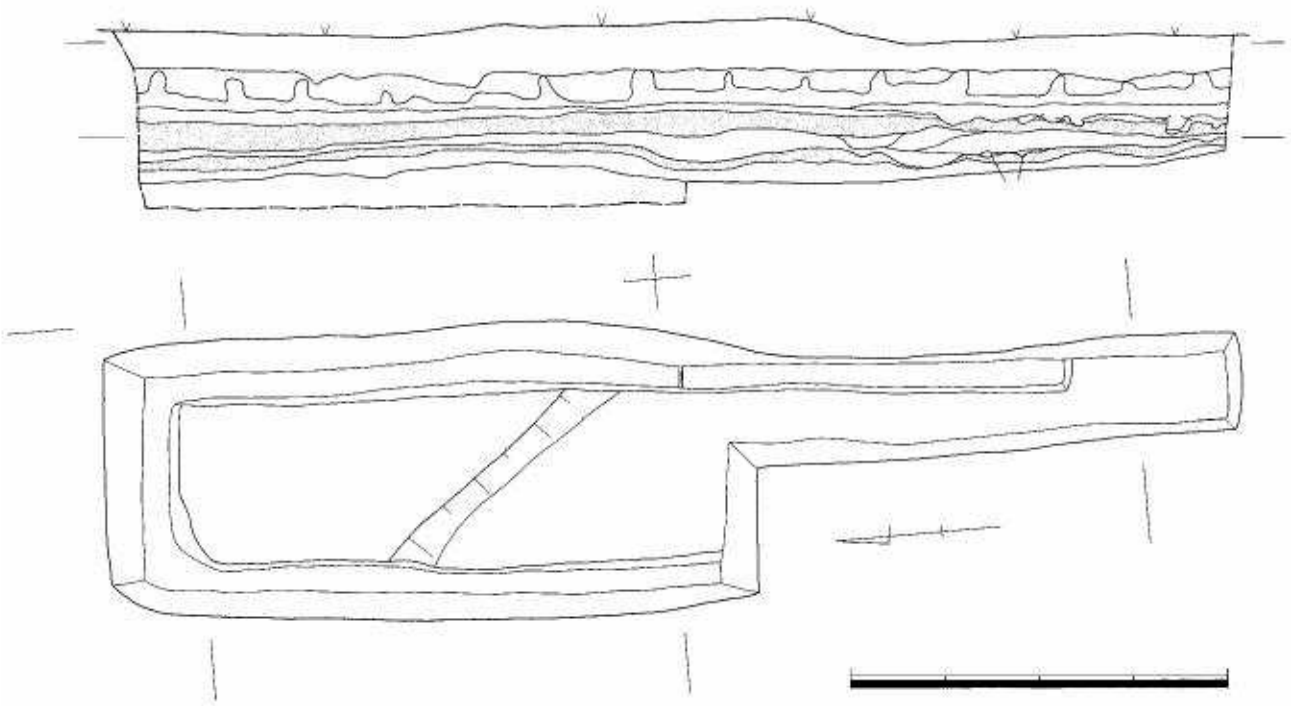


図7　第2トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）

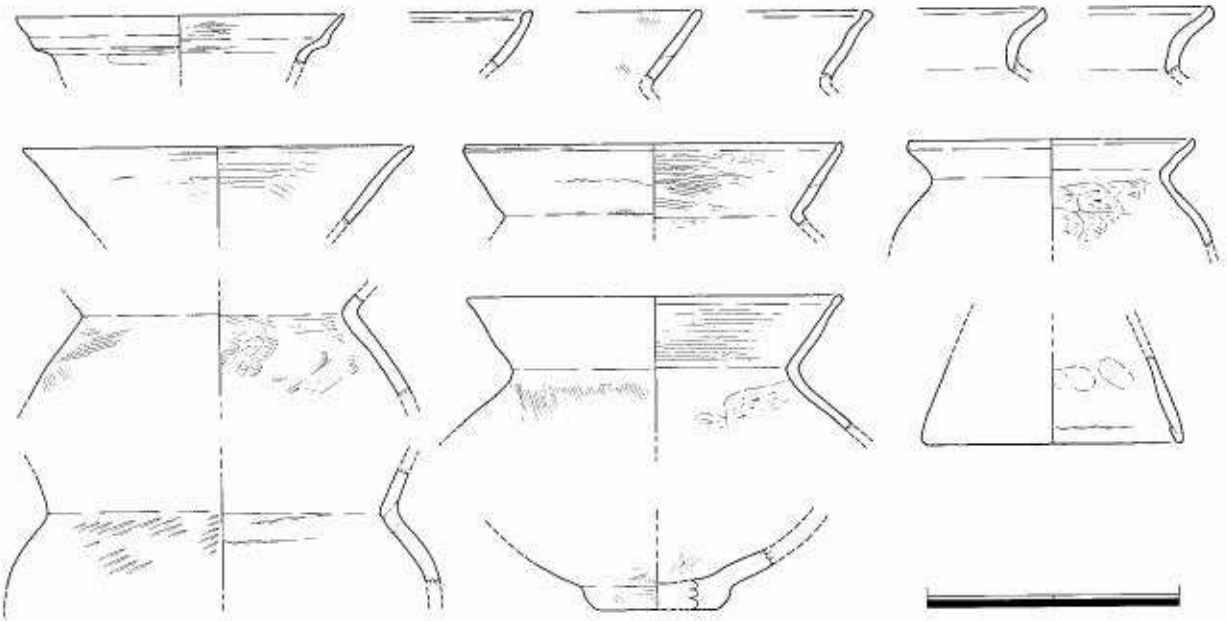


図8　第2トレンチ洪水堆積層3出土遺物実測図（S＝1/3）

立ち上がる口縁を有し、端部は丸くおさめている。体部内面はともにケズリ調整がおこなわれるが、外面は(89)ではタタキ、(90)ではタテハケがみとめられる。(91)・(92)もともに丸くおさめられる口縁端部を有する個体である。(93)～(95)は外反する口縁部を持ち、その端部に端面が形成されていた。(96)～(98)は直線的な口縁部で、端部は上方につまみ上げられる。(97)の外面にはタタキメがみとめられる。(99) はわずかに内湾する口縁部で、端部は丸くおさめられる。(100)～(107)は直線的あるいはわずかに内湾する口縁部を有し、端部は内側に肥厚させている。(108)・(109)・(111)はS字状口縁

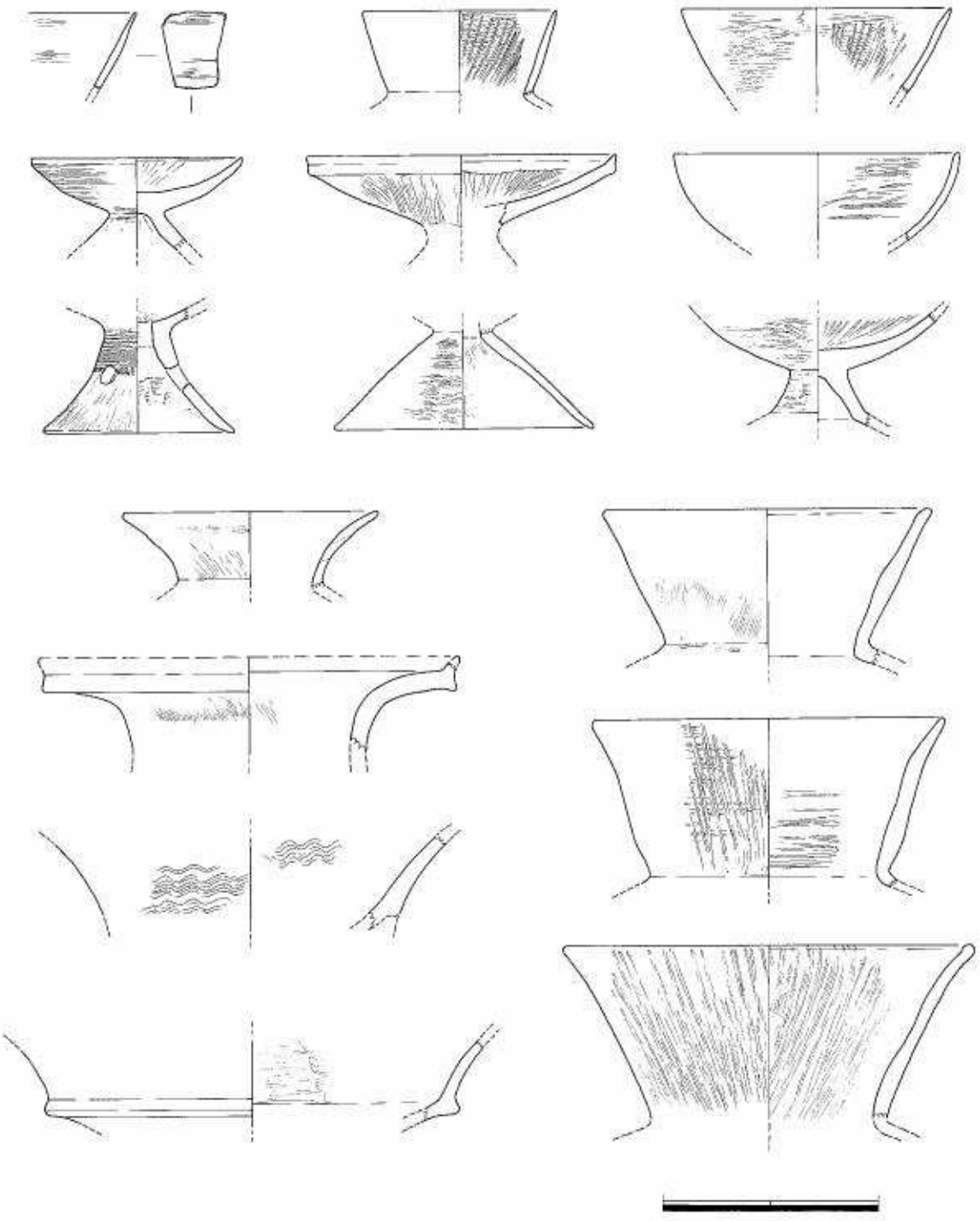


図9　第2トレンチ洪水堆積層4出土遺物実測図①（S=1/3）

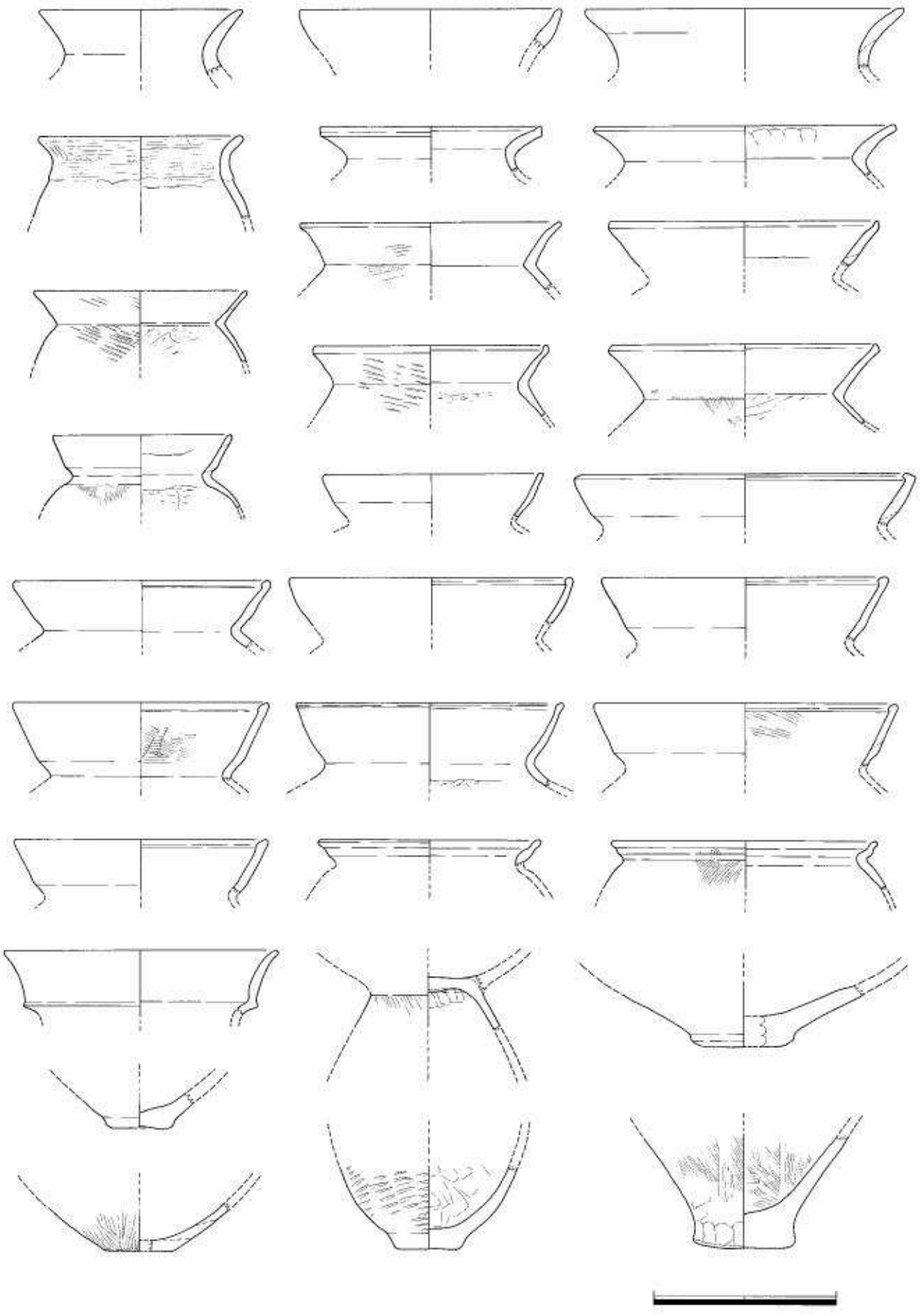


図10　第２トレンチ洪水堆積層４出土遺物実測図②（S＝1/3）

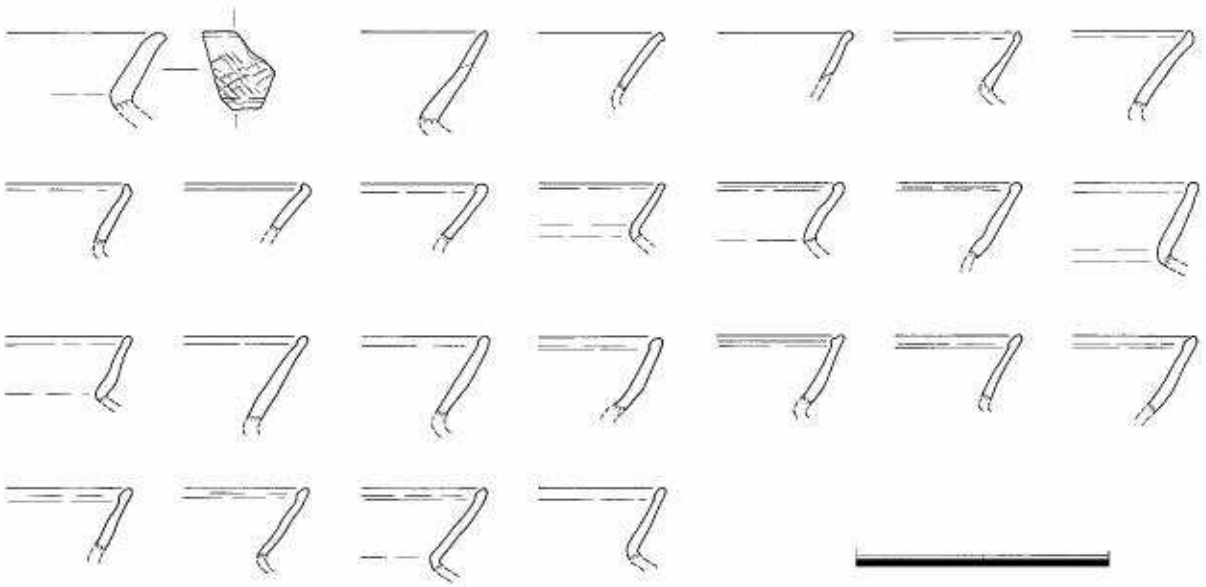


図11　第２トレンチ洪水堆積層４出土遺物実測図③（S＝1/3）

台付甕で、(109)・(111)の外面にはハケメがみとめられた。(110)は山陰系の複合口縁を有する甕の口縁部である。(112)は壷の底部で、突出する平底を有する。(113)はわずかに突出し中央をくぼませる壷の底部である。(114)は突出しない平底で、外面には粗いハケが施されていた。S字状の口縁部を持つ甕の底部であろうか。(115)は甕で突出する平底を有し、外面はタタキ調整、内面はナデにより仕上げられる。(116)も明瞭に突出する平底を持ち、内外面ともにハケメがみとめられる。広口壷の底部と考えられる。

(117)～(140)は甕の口縁部である。(117)・(118)は直線的な口縁で端部は丸くおさめられる。(117)の外面にはタタキがみとめられた。(119)～(123)は直線的な口縁で、端部は(119)・(120)では外側にやや肥厚させ、(121)～(123)では上方につまみ上げている。(124)～(140)は直線的あるいはやや内湾する口縁部を持ち端部は内面に肥厚させている。

## 4. まとめ

今回の調査では、想定されたような箸墓古墳の「外濠」に関連する明確な遺構を確認することはできなかった。一方で箸墓古墳が築造された時期に近い土器が、洪水堆積層や腐植土層から検出された。

今回出土した土器の大半は洪水堆積層に含まれるものであるため、土器はそれらを含む層の形成時期を厳密に示しているとは言えないが、これまで見てきたように土器は一定量出土しており、おおよその堆積時期を示すものと考えて差し支えないであろう。２つの腐植土層にはさまれた洪水堆積層３、および洪水堆積層４から出土した土器は、甕の口縁部形態のバリエーションなどを参考にすると、概ね布留０式の新しい段階から布留１式の古い段階に属するものと考えられる。腐植土層２についても同様の時期を考えることができるだろう。

先に述べたように、今回の調査で確認された腐植土層と同様のものが、箸墓古墳前方部北側と後円

部南東側の調査においても確認されており、布留１式期頃に箸墓古墳周濠内に堆積したと考えられている。今回確認された腐植土層２の形成時期がこれとほぼ一致する点は興味深い。仮に腐植土層２を「外濠」の堆積物として評価すると、少なくとも第２トレンチの南端までは「外濠」の内側に含まれることになり、想定されていた「外濠」の範囲はさらに南側に広がることになる[9]。

今回の調査成果からは、「外濠」の存在について肯定することも否定することもできない。箸墓古墳は定型化した最古の大型前方後円墳とされており、その周濠の全体像を明らかにすることは、今後の古墳研究に大きな影響を与えることになると考えられる。それゆえに箸墓古墳の「外濠」の存在に関しては、将来行われるであろう周辺の調査を待った上で、慎重に検討していく必要がある。

（福辻）

【註】

1）寺沢薫編　2002「箸墓古墳周辺第７次の調査」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県文化財調査報告書第89集　奈良県立橿原考古学研究所

2）1）に同じ

3）橋本輝彦　1999「第５節　纒向遺跡第109次調査概要報告（箸墓古墳隣接地）」『桜井市平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書20集　桜井市教育委員会

4）橋本輝彦　2001「第３章　纒向遺跡第118次調査概要報告（箸墓古墳第12次）」『桜井市平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書22集　桜井市教育委員会

5）清水眞一　1993「第１章　箸墓古墳南隣接地の調査」『箸墓古墳南　上之宮遺跡第７次発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書13集　桜井市教育委員会

6）佐々木好直　2002「箸墓古墳周辺第９・10次調査」『箸墓古墳周辺の調査』奈良県文化財調査報告書第89集　奈良県立橿原考古学研究所

7）1）に同じ

8）表中に示した口縁部形式は、以下の文献を参考とした。
寺沢 薫編　1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所

9）1）、3）文献参照。1）文中で寺沢氏が指摘するように、調査地の南西側にある東西に長い高まりが「外濠」の外肩に相当する可能性がある。

| 図番号 | 写真図版 | 出土層位 | 器種 | 口縁部形式 | 復元口径[cm] | 残存高[cm] | 底径(復元)[cm] | 色調(外面) | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 図5－1 | 図版3－1 | 1tr 掘立2 | 小形器台 | | | 2.8 | 脚径(10.8) | にぶい黄橙色 (10YR7/2) | 脚台部 1/6 | |
| 図5－2 | 図版3－2 | 1tr 掘立2 | 小形丸底壺 | | | 3.3 | | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 口縁～体部上半 1/12 | 漆付着 |
| 図5－3 | 図版3－3 | 1tr 掘立2 | 小形丸底壺 | | | 4.4 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 体部 1/4 | |
| 図5－4 | 図版3－4 | 1tr 掘立2 | 小形丸底壺 | | | 2.8 | | にぶい黄色 (2.5Y6/3) | 底部付近 1/4 | |
| 図5－5 | 図版3－5 | 1tr 掘立2 | 甕 | － | | 2.8 | | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 口縁部 1/12 | 吉備系 |
| 図5－6 | 図版3－6 | 1tr 掘立2 | 甕 | g 2 | | 2.6 | | 明赤褐色 (2.5YR5/6) | 口縁部 1/12 | |
| 図5－7 | 図版3－7 | 1tr 掘立2 | 甕 | g 2 | | 2.1 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/12 | |
| 図5－8 | 図版3－8 | 1tr 掘立2 | 甕 | g 1 | | 3.5 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/12 | |
| 図5－9 | 図版3－9 | 1tr 掘立2 | 甕 | f | | 4.2 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/12 | |
| 図5－10 | 図版3－10 | 1tr 掘立2 | 甕 | g 2 | 12.6 | 3.0 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/10 | 煤付着 |
| 図5－11 | 図版3－11 | 1tr 掘立2 | 甕 | b | 12.4 | 3.5 | | にぶい赤橙色 (10R6/3) | 口縁部 1/5 | |
| 図5－12 | 図版3－12 | 1tr 掘立2 | 壺 | | | 2.0 | (4.0) | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 底部 1/3 | |
| 図5－13 | 図版3－13 | 1tr 掘立2 | 台付甕 | | | 2.2 | | 灰白色 (2.5Y8/2) | 脚台上半 1/2 | 東海系 |
| 図5－14 | 図版3－14 | 1tr 掘立2 | 甕 | g 3 | 15.0 | 4.9 | | 灰黄褐色 (10YR6/2) | 口縁部 1/4 | 煤付着 |
| 図6－15 | 図版4－15 | 1tr 洪水4 | 甕 | (b) | | 2.5 | | 暗灰黄色 (2.5Y4/2) | 口縁部 1/10 | |
| 図6－16 | 図版4－16 | 1tr 洪水4 | 甕 | a | | 2.9 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/12以下 | |
| 図6－17 | 図版4－17 | 1tr 洪水4 | 甕 | e 2 | | 3.1 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/12以下 | 煤付着 |
| 図6－18 | 図版4－18 | 1tr 洪水4 | 甕 | e 2 | | 2.5 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/12以下 | 煤付着 |
| 図6－19 | 図版4－19 | 1tr 洪水4 | 甕 | e 2 | | 3.6 | | にぶい橙色 (5YR6/4) | 口縁部 1/20以下 | |
| 図6－20 | 図版4－20 | 1tr 洪水4 | 甕 | e 1 | | 2.9 | | にぶい黄橙色 (10YR6/4) | 口縁部 1/12 | 煤付着 |
| 図6－21 | 図版4－21 | 1tr 洪水4 | 甕 | f | | 2.4 | | 暗灰黄色 (2.5Y5/2) | 口縁部 1/20以下 | |
| 図6－22 | 図版4－22 | 1tr 洪水4 | 甕 | f | | 2.1 | | 灰黄色 (2.5Y7/2) | 口縁部 1/12 | |
| 図6－23 | 図版4－23 | 1tr 洪水4 | 甕 | f | | 2.5 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/20 | |
| 図6－24 | 図版4－24 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 2 | | 2.5 | | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 口縁部 1/20以下 | |
| 図6－25 | 図版4－25 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 2 | | 2.3 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/12 | |
| 図6－26 | 図版4－26 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 2 | | 2.5 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/20 | 煤付着 |
| 図6－27 | 図版4－27 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 1 | | 2.7 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/12以下 | |
| 図6－28 | 図版4－28 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 2 | | 2.4 | | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 口縁部 1/12以下 | |
| 図6－29 | 図版4－29 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 1 | | 2.4 | | にぶい黄橙色 (10YR7/2) | 口縁部 1/20 | |
| 図6－30 | 図版4－30 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 2 | | 2.8 | | にぶい黄橙色 (10YR7/3) | 口縁部 1/20 | 煤付着 |
| 図6－31 | 図版4－31 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 2 | | 2.6 | | にぶい褐色 (7.5YR5/3) | 口縁部 1/12 | |
| 図6－32 | 図版4－32 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 1 | | 3.3 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/12 | |
| 図6－33 | 図版4－33 | 1tr 洪水4 | 台付甕 | － | | 1.7 | | 浅黄色 (2.5Y7/3) | 口縁部 1/20 | 東海系 |
| 図6－34 | 図版4－34 | 1tr 洪水4 | 甕 | － | | 1.7 | | 橙色 (5YR7/6) | 口縁部 1/12 | 吉備系 |
| 図6－35 | 図版4－35 | 1tr 洪水4 | 小形丸底鉢 | a | | 3.7 | | 橙色 (5YR6/6) | 口縁部 1/10 | |
| 図6－36 | 図版4－36 | 1tr 洪水4 | 小形丸底壺 | a | 8.8 | 4.5 | | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 口縁～体部 1/8 | |
| 図6－37 | 図版4－37 | 1tr 洪水4 | 小形丸底壺 | | | 3.7 | | にぶい橙色 (7.5YR6/4) | 頸部付近 1/4 | |
| 図6－38 | 図版7－38 | 1tr 洪水4 | 高坏 | | | 7.5 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 脚柱部 | |
| 図6－39 | 図版4－39 | 1tr 洪水4 | 短頸壺 | a | 11.0 | 4.7 | | にぶい橙色 (7.5Y6/4) | 口縁部 1/10 | |
| 図6－40 | 図版4－40 | 1tr 洪水4 | 短頸壺？ | a | 15.8 | 3.1 | | にぶい黄褐色 (10YR5/4) | 口縁部 1/10 | |
| 図6－41 | 図版4－41 | 1tr 洪水4 | 広口壺 | | | 3.2 | | にぶい橙色 (7.5YR6/4) | 頸部 1/5 | |
| 図6－42 | 図版4－42 | 1tr 洪水4 | 台付甕？ | | | 3.0 | | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 口縁～肩部 1/10 | 関東系？ |
| 図6－43 | 図版4－43 | 1tr 洪水4 | 甕 | b | 14.7 | 7.2 | | にぶい黄橙色 (10YR7/3) | 口縁～体部上半 1/5 | |
| 図6－44 | 図版4－44 | 1tr 洪水4 | 甕 | e 2 | 15.0 | 2.6 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/8 | |
| 図6－45 | 図版4－45 | 1tr 洪水4 | 甕 | e 2 | 13.5 | 3.8 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/8 | 煤付着 |
| 図6－46 | 図版4－46 | 1tr 洪水4 | 甕 | e 2 | 14.8 | 4.1 | | にぶい褐色 (7.5y5/3) | 口縁部 1/6 | 煤付着 |
| 図6－47 | 図版4－47 | 1tr 洪水4 | 甕 | － | 10.7 | 3.6 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/8 | 吉備系 |
| 図6－48 | 図版4－48 | 1tr 洪水4 | 甕 | a | 11.6 | 3.4 | | にぶい黄色 (2.5Y6/3) | 口縁部 1/8 | 煤付着 |
| 図6－49 | 図版4－49 | 1tr 洪水4 | 甕 | a | 12.9 | 3.0 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/10 | 煤付着 |
| 図6－50 | 図版4－50 | 1tr 洪水4 | 甕 | a | 14.4 | 4.4 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁～肩部 1/8 | 煤付着 |
| 図6－51 | 図版4－51 | 1tr 洪水4 | 甕 | e 1 | 12.8 | 4.0 | | にぶい黄橙色 (10YR7/3) | 口縁部 1/8 | |
| 図6－52 | 図版4－52 | 1tr 洪水4 | 甕 | g 1 | 16.0 | 3.6 | | 灰黄褐色 (10YR6/2) | 口縁部 1/10 | |
| 図6－53 | 図版4－53 | 1tr 洪水4 | 甕 | | | 2.9 | (3.0) | 灰黄褐色 (10YR4/2) | 底部 1/2 | |
| 図6－54 | 図版4－54 | 1tr 洪水4 | 甕 | | | 2.3 | (3.6) | にぶい褐色 (7.5YR5/3) | 底部 1/5 | |
| 図6－55 | 図版4－55 | 1tr 洪水4 | 台付甕 | | | 2.8 | | 暗灰黄色 (2.5Y5/2) | 脚台上半 1/3 | 東海系 |
| 図6－56 | 図版4－56 | 1tr 洪水4 | 甕 | | | 3.2 | | にぶい黄橙色 (10YR7/2) | 肩部周辺 1/10 | |
| 図8－57 | 図版5－57 | 2tr 洪水3 | 小形丸底鉢 | a | 12.9 | 2.1 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/10 | |
| 図8－58 | 図版5－58 | 2tr 洪水3 | 高坏 | a | 15.4 | 3.2 | | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 口縁部 1/10 | |
| 図8－59 | 図版5－59 | 2tr 洪水3 | 甕 | g 2 | | 2.3 | | オリーブ黒色 (5Y3/1) | 口縁部 1/12 | |
| 図8－60 | 図版5－60 | 2tr 洪水3 | 甕 | g 2 | | 3.0 | | 暗灰黄色 (2.5Y5/2) | 口縁部 1/12 | |
| 図8－61 | 図版5－61 | 2tr 洪水3 | 甕 | e 2 | | 2.8 | | にぶい黄褐色 (10YR5/3) | 口縁部 1/10 | |
| 図8－62 | 図版5－62 | 2tr 洪水3 | 甕 | (d) | | 2.6 | | 黒褐色 (10YR3/2) | 口縁部 1/10 | |
| 図8－63 | 図版5－63 | 2tr 洪水3 | 甕 | (d) | | 2.7 | | 黒褐色 (2.5Y3/2) | 口縁部 1/10 | |
| 図8－64 | 図版5－64 | 2tr 洪水3 | 甕 | d | 14.8 | 3.3 | | 灰黄褐色 (10YR4/2) | 口縁部 1/8 | |
| 図8－65 | 図版5－65 | 2tr 洪水3 | 甕 | d | 11.2 | 4.3 | | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 口縁部 1/5 | |
| 図8－66 | 図版5－66 | 2tr 洪水3 | 甕 | | | 4.1 | | にぶい黄橙色 (10YR7/2) | 肩部周辺 1/8 | |
| 図8－67 | 図版5－67 | 2tr 洪水3 | 甕 | | | 4.7 | | にぶい褐色 (7.5YR5/4) | 口縁～肩部 1/8 | |
| 図8－68 | 図版5－68 | 2tr 洪水3 | 甕 | g 1 | 14.6 | 5.4 | | にぶい黄橙色 (10YR6/3) | 口縁部 1/5 | |
| 図8－69 | 図版5－69 | 2tr 洪水3 | 壺 | | | 2.3 | (4.9) | 灰黄褐色 (10YR6/2) | 底部 1/3 | |
| 図8－70 | 図版5－70 | 2tr 洪水3 | 台付甕 | － | | 3.5 | 脚径(9.9) | 灰黄褐色 (10YR5/2) | 脚台部 1/10 | |
| 図9－71 | 図版5－71 | 2tr 洪水4 | 小形丸底壺 | a | | 3.5 | | にぶい橙色 (5YR6/3) | 口縁部 1/10 | |
| 図9－72 | 図版5－72 | 2tr 洪水4 | 小形丸底壺 | a | 8.7 | 3.9 | | 灰黄色 (2.5Y6/2) | 口縁部 1/4 | |
| 図9－73 | 図版5－73 | 2tr 洪水4 | 小形丸底壺 | a | 12.4 | 4.0 | | 暗灰黄色 (2.5Y5/2) | 口縁部 1/8 | |
| 図9－74 | 図版7－74 | 2tr 洪水4 | 小形器台 | (d) | 9.6 | 3.9 | | にぶい褐色 (7.5YR6/3) | 受部～脚部 1/3 | |
| 図9－75 | 図版5－75 | 2tr 洪水4 | 小形器台 | d | 14.1 | 3.3 | | 灰オリーブ色 (5Y6/2) | 受部 1/8 | |
| 図9－76 | 図版7－76 | 2tr 洪水4 | 小形器台 | | | 5.5 | 脚径(8.7) | 灰褐色 (7.5YR5/2) | 脚台部 1/3 | |
| 図9－77 | 図版5－77 | 2tr 洪水4 | 小形器台 | | | 4.4 | 脚径(11.8) | にぶい橙色 (5YR6/3) | 脚台部 1/10 | |

表2　纒向遺跡第129次調査出土土器一覧表①

| 図番号 | 写真図版 | 出土層位 | 器種 | 口縁部形式 | 復元口径[cm] | 残存高[cm] | 底径(復元)[cm] | 色調(外面) | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 図９－78 | 図版５－78 | 2 tr 洪水４ | 高坏 | a | 13.2 | 4.1 | | 黄灰色（2.5Y5/1） | 口縁部　1/10 | |
| 図９－79 | 図版７－79 | 2 tr 洪水４ | 高坏 | | | 5.1 | | 褐灰色（10YR4/1） | 坏部～脚部 | |
| 図９－80 | 図版５－80 | 2 tr 洪水４ | 広口壺 | a | 11.5 | 3.3 | | 黄灰色（2.5Y5/1） | 口縁部　1/4 | |
| 図９－81 | 図版７－81 | 2 tr 洪水４ | 広口壺 | － | 19.1 | 4.4 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁～頸部　1/4 | 四国系 |
| 図９－82 | 図版５－82 | 2 tr 洪水４ | 二重口縁壺 | | | 4.3 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁部　1/8 | |
| 図９－83 | 図版５－83 | 2 tr 洪水４ | 二重口縁壺 | | | 3.8 | | にぶい黄橙色（10YR6/3） | 口縁付近　1/8 | |
| 図９－84 | 図版５－84 | 2 tr 洪水４ | 短頸壺 | | 14.8 | 7.3 | | 橙色（5YR6/6） | 口縁部　1/8 | |
| 図９－85 | 図版５－85 | 2 tr 洪水４ | 短頸壺 | a | 16.3 | 7.6 | | 灰褐色（7.5YR6/2） | 口縁部　1/10 | |
| 図９－86 | 図版５－86 | 2 tr 洪水４ | 短頸壺 | a | 18.6 | 8.0 | | にぶい黄橙色（10YR6/3） | 口縁部　1/6 | |
| 図10－87 | 図版６－87 | 2 tr 洪水４ | 甕 | a | 11.0 | 3.6 | | にぶい橙色（5YR6/4） | 口縁部　1/8 | |
| 図10－88 | 図版６－88 | 2 tr 洪水４ | 甕 | a | 11.0 | 4.5 | | 黄灰色（2.5Y5/1） | 口縁～肩部　1/4 | 煤付着 |
| 図10－89 | 図版６－89 | 2 tr 洪水４ | 甕 | a | 11.4 | 4.0 | | にぶい黄橙色（10YR7/3） | 口縁～肩部　1/6 | |
| 図10－90 | 図版６－90 | 2 tr 洪水４ | 甕 | a | 9.5 | 3.9 | | にぶい黄色（2.5Y6/3） | 口縁～肩部　1/6 | 煤付着 |
| 図10－91 | 図版６－91 | 2 tr 洪水４ | 甕(壺) | a | 14.1 | 2.2 | | にぶい褐色（7.5YR6/3） | 口縁部　1/6 | |
| 図10－92 | 図版６－92 | 2 tr 洪水４ | 甕 | a | 17.3 | 3.2 | | にぶい褐色（7.5YR6/3） | 口縁部　1/10 | |
| 図10－93 | 図版６－93 | 2 tr 洪水４ | 甕 | d | 12.0 | 2.3 | | 灰黄褐色（10YR5/2） | 口縁部　1/4 | |
| 図10－94 | 図版６－94 | 2 tr 洪水４ | 甕 | b | 16.2 | 2.9 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁部　1/6 | |
| 図10－95 | 図版６－95 | 2 tr 洪水４ | 甕 | d | 14.0 | 3.5 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁部　1/4 | 煤付着 |
| 図10－96 | 図版６－96 | 2 tr 洪水４ | 甕 | d | 14.6 | 2.5 | | 灰黄褐色（10YR5/2） | 口縁部　1/8 | |
| 図10－97 | 図版６－97 | 2 tr 洪水４ | 甕 | d | 12.8 | 3.7 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁～肩部　1/8 | |
| 図10－98 | 図版６－98 | 2 tr 洪水４ | 甕 | e 2 | 14.5 | 4.3 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁～肩部　1/5 | 煤付着 |
| 図10－99 | 図版６－99 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | 12.1 | 2.4 | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁部　1/8 | |
| 図10－100 | 図版６－100 | 2 tr 洪水４ | 甕 | e 2 | 17.6 | 2.8 | | 褐灰色（10YR5/1） | 口縁部　1/10 | 煤付着 |
| 図10－101 | 図版６－101 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | 13.7 | 3.7 | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁部　1/8 | |
| 図10－102 | 図版６－102 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | 15.5 | 2.5 | | 褐灰色（10YR5/1） | 口縁部　1/10 | 煤付着 |
| 図10－103 | 図版６－103 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | 15.4 | 3.4 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁部　1/8 | |
| 図10－104 | 図版６－104 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | 13.7 | 4.2 | | にぶい褐色（7.5YR6/3） | 口縁部　1/10 | |
| 図10－105 | 図版６－105 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 1 | 14.6 | 4.6 | | にぶい黄橙色（10YR7/3） | 口縁～肩部　1/8 | |
| 図10－106 | 図版６－106 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 1 | 16.3 | 3.4 | | 灰黄褐色（10YR5/2） | 口縁部　1/10 | 煤付着 |
| 図10－107 | 図版６－107 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | 13.9 | 3.0 | | 灰褐色（7.5YR5/2） | 口縁部　1/8 | 煤付着 |
| 図10－108 | 図版６－108 | 2 tr 洪水４ | 台付甕 | － | 12.0 | 1.3 | | 灰黄褐色（10YR4/2） | 口縁部　1/8 | 東海系　煤付着 |
| 図10－109 | 図版６－109 | 2 tr 洪水４ | 台付甕 | － | 14.2 | 2.5 | | 灰黄色（2.5Y7/2） | 口縁部　1/12 | 東海系 |
| 図10－110 | 図版６－110 | 2 tr 洪水４ | 甕 | － | 14.9 | 3.5 | | にぶい黄橙色（10YR7/2） | 口縁部　1/10 | 山陰系 |
| 図10－111 | 図版６－111 | 2 tr 洪水４ | 台付甕 | － | | 3.0 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 甕底部付近 | 東海系　煤付着 |
| 図10－112 | 図版６－112 | 2 tr 洪水４ | 壺 | | | 2.9 | (5.0) | 灰褐色（7.5YR6/2） | 底部　2/5 | |
| 図10－113 | 図版６－113 | 2 tr 洪水４ | 壺 | | | 1.9 | (3.6) | 灰黄褐色（10YR6/2） | 底部　1/3 | |
| 図10－114 | 図版６－114 | 2 tr 洪水４ | 甕 | | | 2.8 | (3.8) | 褐灰色（10YR4/1） | 底部　1/6 | 東海系　煤付着 |
| 図10－115 | 図版６－115 | 2 tr 洪水４ | 甕 | | | 3.4 | (3.5) | 灰黄色（2.5Y6/2） | 底部周辺　1/4 | |
| 図10－116 | 図版７－116 | 2 tr 洪水４ | 壺 | | | 6.3 | 5.6 | 褐灰色（7.5YR4/1） | 底部周辺 | |
| 図11－117 | 図版７－117 | 2 tr 洪水４ | 甕 | a | | 2.8 | | 褐灰色（7.5YR5/1） | 口縁部　1/20以下 | 煤付着 |
| 図11－118 | 図版７－118 | 2 tr 洪水４ | 甕 | a | | 3.6 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁部　1/20 | |
| 図11－119 | 図版７－119 | 2 tr 洪水４ | 甕 | b | | 2.3 | | 褐灰色（7.5YR5/1） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図11－120 | 図版７－120 | 2 tr 洪水４ | 甕 | (b) | | 2.0 | | にぶい褐色（7.5YR6/3） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図11－121 | 図版７－121 | 2 tr 洪水４ | 甕 | d | | 2.4 | | にぶい橙色（7.5YR7/3） | 口縁部　1/12 | |
| 図11－122 | 図版７－122 | 2 tr 洪水４ | 甕 | (d) | | 3.0 | | 灰褐色（7.5YR6/2） | 口縁部　1/12 | |
| 図11－123 | 図版７－123 | 2 tr 洪水４ | 甕 | d | | 2.3 | | 褐灰色（10YR5/1） | 口縁部　1/20 | 煤付着 |
| 図11－124 | 図版７－124 | 2 tr 洪水４ | 甕 | e 1 | | 1.9 | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁部　1/12 | 煤付着 |
| 図11－125 | 図版７－125 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 2.8 | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図11－126 | 図版７－126 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 1 | | 2.4 | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁部　1/20 | 煤付着 |
| 図11－127 | 図版７－127 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 2.3 | | にぶい黄橙色（10YR6/3） | 口縁部　1/12 | 煤付着 |
| 図11－128 | 図版７－128 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 3 | | 3.0 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図11－129 | 図版７－129 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 1 | | 3.3 | | 灰黄褐色（10YR5/2） | 口縁部　1/12以下 | 煤付着 |
| 図11－130 | 図版７－130 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 2.5 | | 灰褐色（5YR5/2） | 口縁部　1/20以下 | |
| 図11－131 | 図版７－131 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 3.4 | | 灰黄褐色（10YR5/2） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図11－132 | 図版７－132 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 3.3 | | 灰黄色（2.5Y7/2） | 口縁部　1/12 | |
| 図11－133 | 図版７－133 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 2.8 | | 灰褐色（7.5YR6/2） | 口縁部　1/12 | |
| 図11－134 | 図版７－134 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 1 | | 2.7 | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁部　1/20 | |
| 図11－135 | 図版７－135 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 2.6 | | 灰黄褐色（7.5Y6/2） | 口縁部　1/20以下 | |
| 図11－136 | 図版７－136 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 3.2 | | 灰黄褐色（7.5Y6/2） | 口縁部　1/20以下 | |
| 図11－137 | 図版７－137 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 2.5 | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁部　1/20 | 煤付着 |
| 図11－138 | 図版７－138 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 2.8 | | にぶい橙色（5YR7/4） | 口縁部　1/20 | 煤付着 |
| 図11－139 | 図版７－139 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 3.3 | | 灰黄色（2.5Y6/2） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図11－140 | 図版７－140 | 2 tr 洪水４ | 甕 | g 2 | | 2.8 | | にぶい橙色（7.5YR7/3） | 口縁部　1/20 | |

表３　縄向遺跡第129次調査出土土器一覧表②

# 第２節　纒向遺跡第130次発掘調査報告

## 1．はじめに

今回の調査は、個人住宅の建築工事に先立って行なわれた埋蔵文化財発掘調査である。調査地はJR巻向駅の南西約１km、豊前池の西岸に位置する。周辺は纒向遺跡の南西にあたるが、発掘調査実施件数が少ないため、明瞭な遺構が未だ確認されていない地域である。よって今回は周辺地域で初めての面的な調査となった。なお調査期間は平成14年５月23日～６月７日、調査面積は55㎡である。

## 2．調査の方法と層序

調査では、当該地の南東に長さ25m、幅２mの調査区を設定し、バックホーにより覆土の除去を行ない、その後人力によって調査を進めた。結果、地表下約80cmの地山面で縄文時代の包含層及び遺構が確認された。また、調査区外に広がる遺構の配列等を確認するため、幅１mで計５ヶ所調査区の拡張を行なった。

調査地での基本層序は、概ね上から1．淡灰色土（耕作土）、2．淡灰褐色土（床土）、3．淡褐色土（旧耕作土）、4．暗茶褐色粘質土（縄文時代遺物包含層）、5．暗灰色砂質土～暗褐色弱粘質土（地山）の順で堆積していた。また、当地は調査直前まで水田として利用されていたため撹乱などはなかった。

## 3．検出遺構（図13・14）

**土坑ＳＫ2002**（図14）　調査区北半で検出された掘形長方形を呈する土坑である。規模は長辺2.7m、幅1.2m、深さ40cmで、幅については南小口の方が北に比べ若干広い。また土坑の主軸は、北に対して東に30°振れている。埋土は３層で、上から淡灰褐色砂質土（礫を含む）、暗灰茶色粘質土（マンガ

図12　纒向遺跡第130次発掘調査位置図（S＝1/5000）

ン・細砂を含む)、暗灰黄色粘質土（細砂を含む）の順で堆積している。埋土からは縄文時代後期の深鉢とみられる口縁部の破片が出土しており、この時期の遺構であると考えられる。掘形の形状、及び規模などから土壙墓の可能性が想起されるが、遺物など決め手となる判断材料が少なかったため性格を特定するには至らなかった。

**溝ＳＤ2051**　調査区南端で検出された東西方向の溝で、溝の方向角は西に対して北にやや振れている。今回は北肩が検出されたに過ぎないため溝幅を特定するには至らなかった。深さは60cmで、埋土は暗灰褐色粘質土、暗褐灰色粘質土、暗褐灰色砂質土の順で堆積している。この埋土より遺物は出土していないが、遺構の切り込み面が縄文時代の他の遺構と同じで、尚且つこの面で異なる時期の遺構が検出されていないこと、また埋土も他と似ていることから、縄文時代後期の遺構になるものと推定される。

**柱穴**　総数44基の柱穴が検出された。この掘形は円形を呈するものがほとんどで、直径30cm前後のものが多い。また深さは概ね30cmで、柱痕跡が認められるものもあった。柱穴埋土は黒褐色～暗茶灰色の粘質土で共通しており、このことから全て同じ時期に機能していたものと考えられる。また、柱穴のいくつかには縄文時代後期の土器が包含されており、遺構の時期を特定する要素となった。

柱穴の中には、円形に列をなして配置されたとみられる纏まりがいくつかあり、これらで住居を形成していた可能性が推察される。

## 4．出土遺物

今回の調査では、コンテナケースに換算して６箱分の遺物が出土した。出土場所の内訳としては第12～14層の暗茶褐色粘質土からが最も多く、次に柱穴などの遺構で、第12～14層より新しい堆積層からの遺物は非常に少なかった。時期別に見ると、縄文時代後期の遺物が全体の約９割を占め、古墳時代後期の須恵器片や、瓦器片が少量認められた。この中で図化できたものは縄文土器と石製品であり、以下遺構別に内容を説明したい。

### (1) 縄文土器

**遺物包含層出土遺物**（図15・16－1～34）　深鉢(１)～(８)、浅鉢(９)～(13)、注口土器(14) 口縁部破片(15)～(29)、体部破片(30)～(34)などが出土した。まず(１)は朝顔形に開くタイプの深鉢口縁部で、口径26.0cm、残存高13.0cmを測る。粗製無文深鉢に分類されるもので、口縁端部は丸く仕上げられている。(２)は口径34.4cmに復元される有文深鉢の口縁部である。口縁端部に刻目突帯が巡らされ、「８」字形突板も認められる。また体部には渦巻き状の沈線内に縄文を充填した文様が施される。(３)は大きく外反する深鉢口縁部で、口径24.4cm、残存高6.0cmを測る。端部内面が肥厚し面を成しており、そこに袈裟襷の沈線文が描かれている。外面は摩滅が著しい。(４)は口径26.0cmを測るもので、端部外面が肥厚しておりその部分に縄文が施されている。体部及び内面は無文である。(５)も同じく端部外面を肥厚させるタイプの深鉢口縁部で、口径26.8cmに復元される。(４)と異なり端部に縄文は施されないが、頸部に巻貝によるとみられる横位の条痕が認められる。(６)は口径25.0cm、残存高14.9cmの

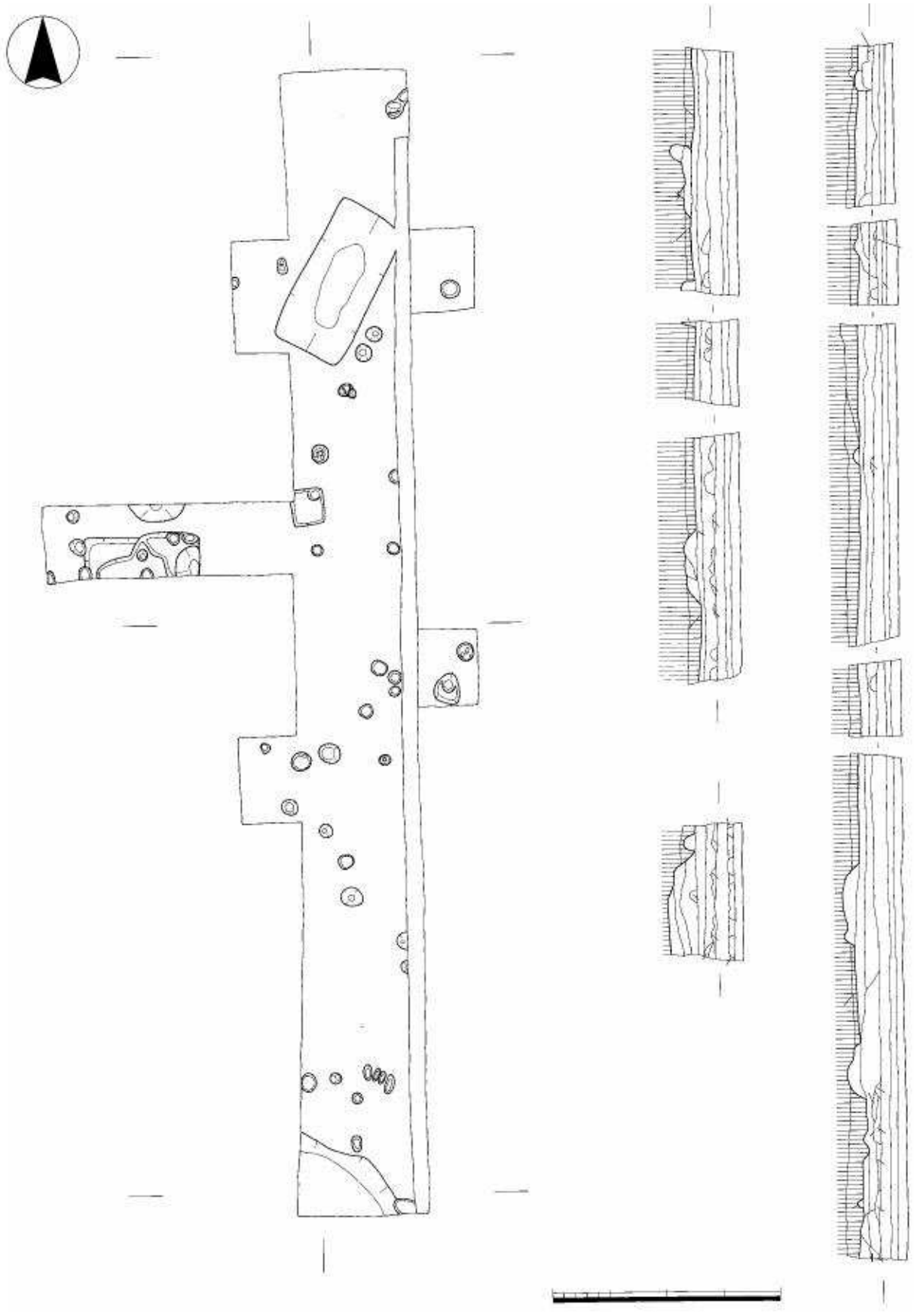


図13　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/100）

深鉢である。器形的にはやや丸みを帯びた体部から口縁部が直線的に外反する特徴が見られ、端部は丸く収められている。また、内外面に文様は認められない。(7)は口径22.0cmを測るもので、緩く「く」の字状に屈曲する頸部を有し、口縁端部は上方につまみ上げられている。内面は無文であるが、外面の口縁端部に横位、頸部に縦位の条痕文が認められる。(8)は平底の底部片で、底径8.6cm。(9)は口径21.0cmの浅鉢片で、球形を呈する体部に内湾する口縁端部を有する。内外面無文。(10)はやや丸みを帯びた体部と直線的に開く口縁部からなる浅鉢片で、口径24.2cm、残存高10.6cm。内外面に文様は認められない。(11)は皿状に扁平な体部と上方へ著しく立ち上がる口縁部を特徴とする浅鉢で、口径28.0cm、残存高6.1cmを測る。内外面ともに縄文は認められないが、無数の指頭圧痕が明瞭に残っている。(12)は口縁部が強く内湾するタイプの浅鉢で、口径32.0cm、残存高10.0cm。

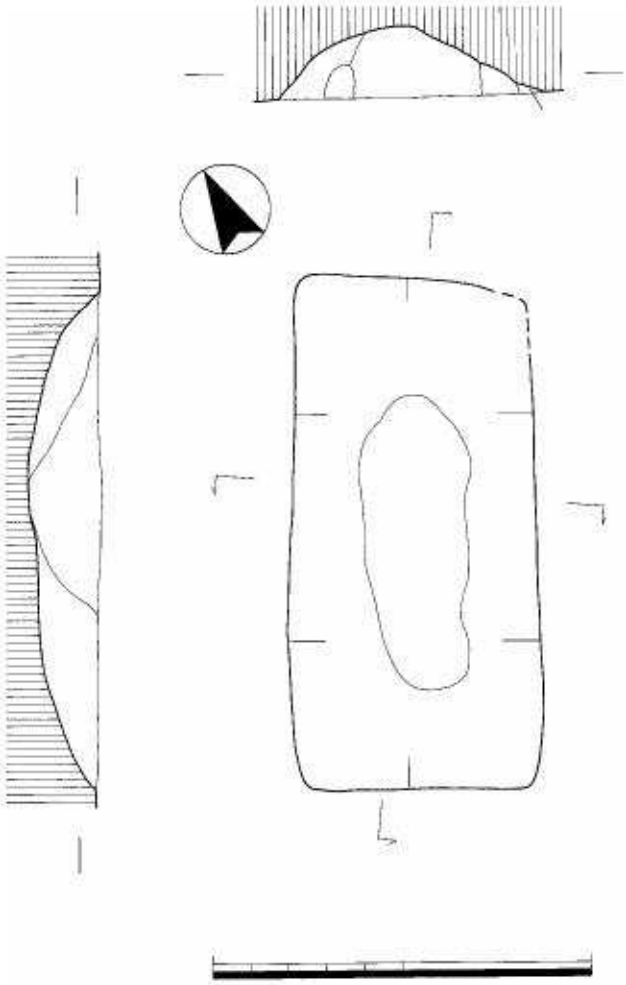


図14　土坑SK2002平面・断面実測図（S＝1/40）

端部外面3条の平行沈線が刻まれ、右上がりの縄文が施されている。(13)は口径32.0cm、残存高14.6cmを測る。端部外面が肥厚して面を形成しており、そこに右上がりの縄文がなされている。また頸部から体部にかけては横位の条痕文が認められる。(14)は注口土器の体部で、体部最大径21.8cm。内外面に文様などの痕跡は見られないが、体部下半に孔が1ヶ所穿たれている。修理孔か？ (15)は外面に山形のくぼみが付けられた口縁部片で、端部は丸く収められている。(16)は外方へつまみ出された端部を持つもので、外面には縦方向の条痕文が認められる。(17)は口縁の外面が肥厚し、端部がつまみ上げられる特徴を持つ破片で、口縁の肥厚した部分に右上がりの縄文が施文されている。(18)は内外面無文の口縁部片で、端部は面をもたせて仕上げられている。(19)・(20)は端部をつまみ上げるタイプの口縁部片で、(20)については外面が肥厚ぎみである。端部の外面にはいずれも右上がりの縄文が施されている。(21)は大きく外反する口縁部片で、内外面に文様などは認められない。(22)は端部にやや面をもつ口縁部片で、内外面は無文である。(23)は端部を内向きにつまみ出すタイプの破片で、外面には全体的に右上がりの縄文が施されている。(24)は直線的に開く口縁部片である。頸部の屈曲点までが残っており、その特徴からやや張った胴部が取り付いていたものと推定される。また外面には右上がりの縄文が認められる。(25)は口縁部が逆「く」の字状に屈曲し、端部外面にはクランク状や

弧状の沈線文様が描かれている。(26)はおそらく波状口縁になると考えられるもので、外面には直線、曲線などの太い沈線文が施されている。(27)は波状口縁の波頂部にあたる破片で、外面には端部に縄文、その下に鍵針形の沈線が刻まれている。(28)は浅鉢の口縁部とみられる破片で、丸みを帯びた体部と内湾する口縁部をもつ。また外面には逆三角形の区画文に縄文が充填されている。(29)は丸みを帯びた胴部の破片で、斜め方向の平行線が現状で10条程度刻まれている。

(30)は口縁端部から若干下がった位置に刻目突帯を巡らすもので、口縁端部は内側にややつまみ出されている。(31)は破片の中央に楕円形の突起が付いている。現状から把手の付根と思われる。(32)は屈曲のない平らかな体部片で、外面には平行な直線2条と緩やかな曲線2条がどちらも平行に引かれている。また各々の線で画された部分には縄文が充填されている。(33)・(34)はいずれも体部の小片で、どちらにも外面に太めの沈線文が描かれている。

**ＳＰ2014出土土器**（図17－35）　直線的に外側へ開く深鉢の口縁部片で、口径25.4cm、残存高8.2cmを測る。内外面ともに摩滅が進んでいるが、外面には微かながら縄文の痕跡が残っている。

**ＳＫ2002出土土器**（図17－36）　丸く収められた口縁端部と端部からやや下がった部分に刻目突帯を巡らせたものである。細片のため法量はわからない。

**ＳＰ2027出土土器**（図17－37）　緩やかに内湾する口縁部の破片で、端部はつまみ上げられている。器表面に縄文などは認められず、全体的にナデで仕上げられる。

**ＳＰ2037出土土器**（図17－38）　深鉢のものとみられる平底の底部片で、底径7.2cm、残存高2.1cmを測る。全体的に摩滅が進んでいるが、外面には縄文とおぼしき条痕が微かに認められる。

(2) 石製品

**遺物包含層出土遺物**（図18－39～44）　サヌカイト製の石鏃(39)、剥片(40)～(44)がある。(39)は凹基無茎式の石鏃で、裏面は調整剥離がなされていない。長さ2.5cm、幅は最長部で1.7cm、厚さ0.3cm。(42)は長さ2.7cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmのサヌカイト剥片である。先端が尖り気味であることから、石鏃の未製品かもしれない。

**柱穴ＳＰ2003出土遺物**（図18－45・46）　サヌカイト製の石鏃(45)と削器(46)が出土した。まず(45)は尖基式の石鏃で長さ3.6cm、幅は1.0cm、厚さ0.4cmを測る。(46)は縦長剥片を利用した削器で、片辺両面調整で刃部をつくりだしている。長さ6.6cm、幅3.3cm、厚さ1.8cm。

**柱穴ＳＰ2036出土遺物**（図18－47）　サヌカイトの原石で、表面に剥離痕などは認められず全体的に自然風化面が残っている。長さ6.0cm、幅5.6cm、厚さ2.2cm。

**覆土出土遺物**（図19・20－48～58）　石鏃(48)、削器(49)・(51)・(53)・(54)・(57)、石核(55)、剥片(50)・(52)・(56)が出土しており、石材は全てサヌカイトである。(48)は凹基無茎式の石鏃で、両面ともに丁寧な調整剥離が施されている。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm。(49)は片面については両端縁に細かな調整剥離がなされているが、裏は石核からの剥離面をそのまま残している。長さ4.0cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm。(51)は長さ4.0cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm。片辺に片面調整で刃が作られているが一部欠損している。(53)は削器の破片で、約半分が欠失している。片辺の両面に調整剥離がなされてお

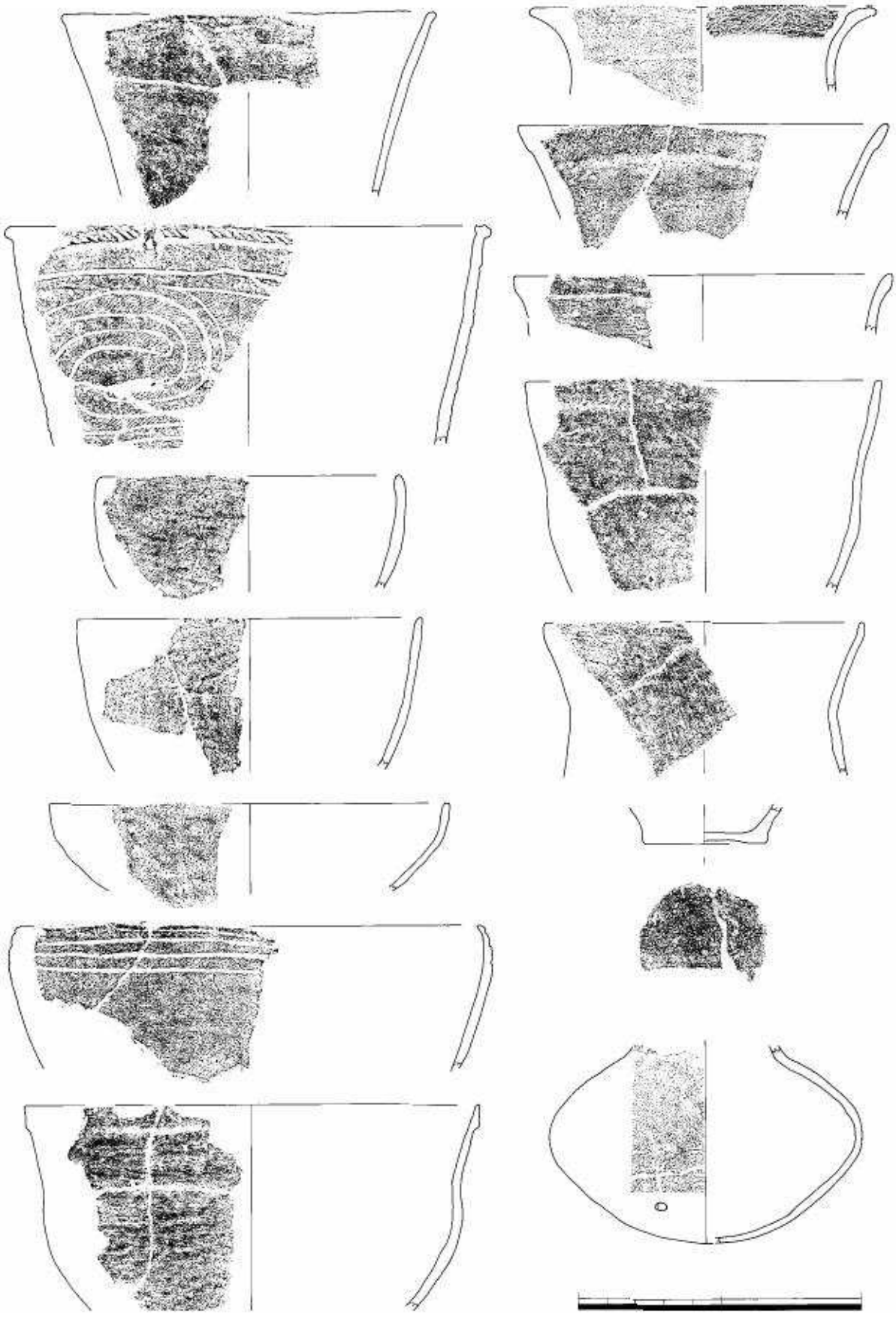


図15　縄文土器実測図①（S＝1/4）

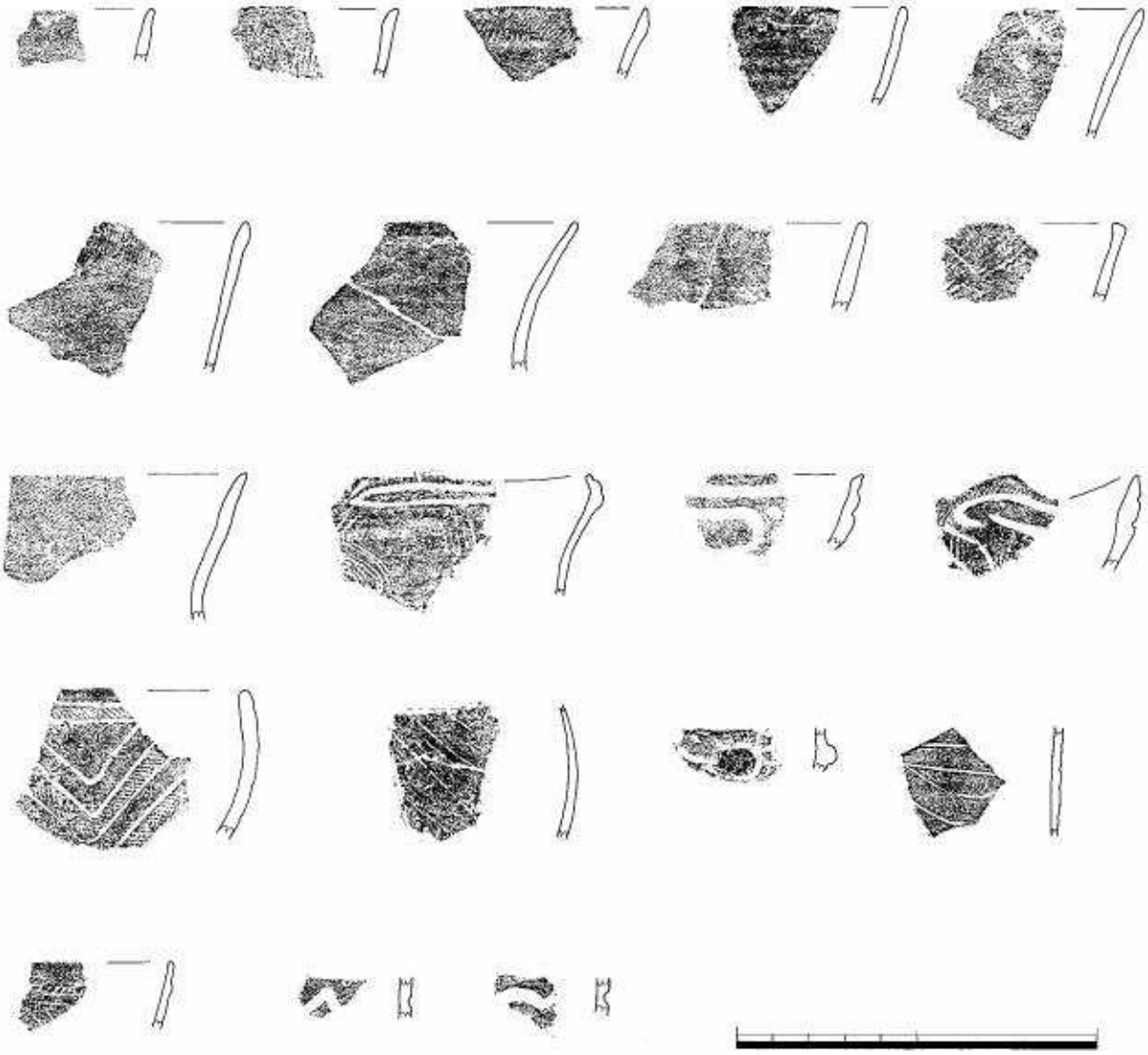


図16　縄文土器実測図②（S＝1/4）

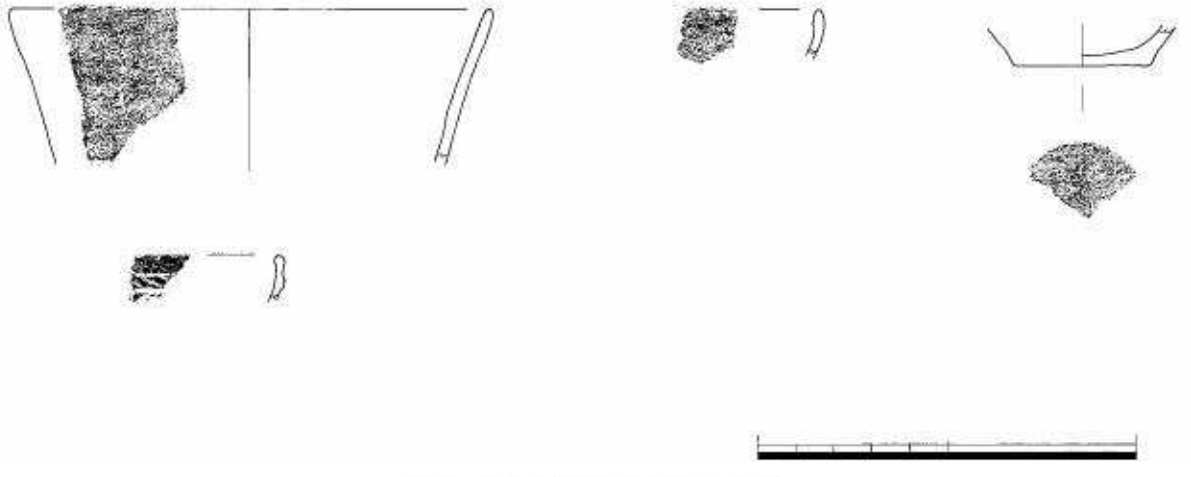


図17　縄文土器実測図③（S＝1/4）

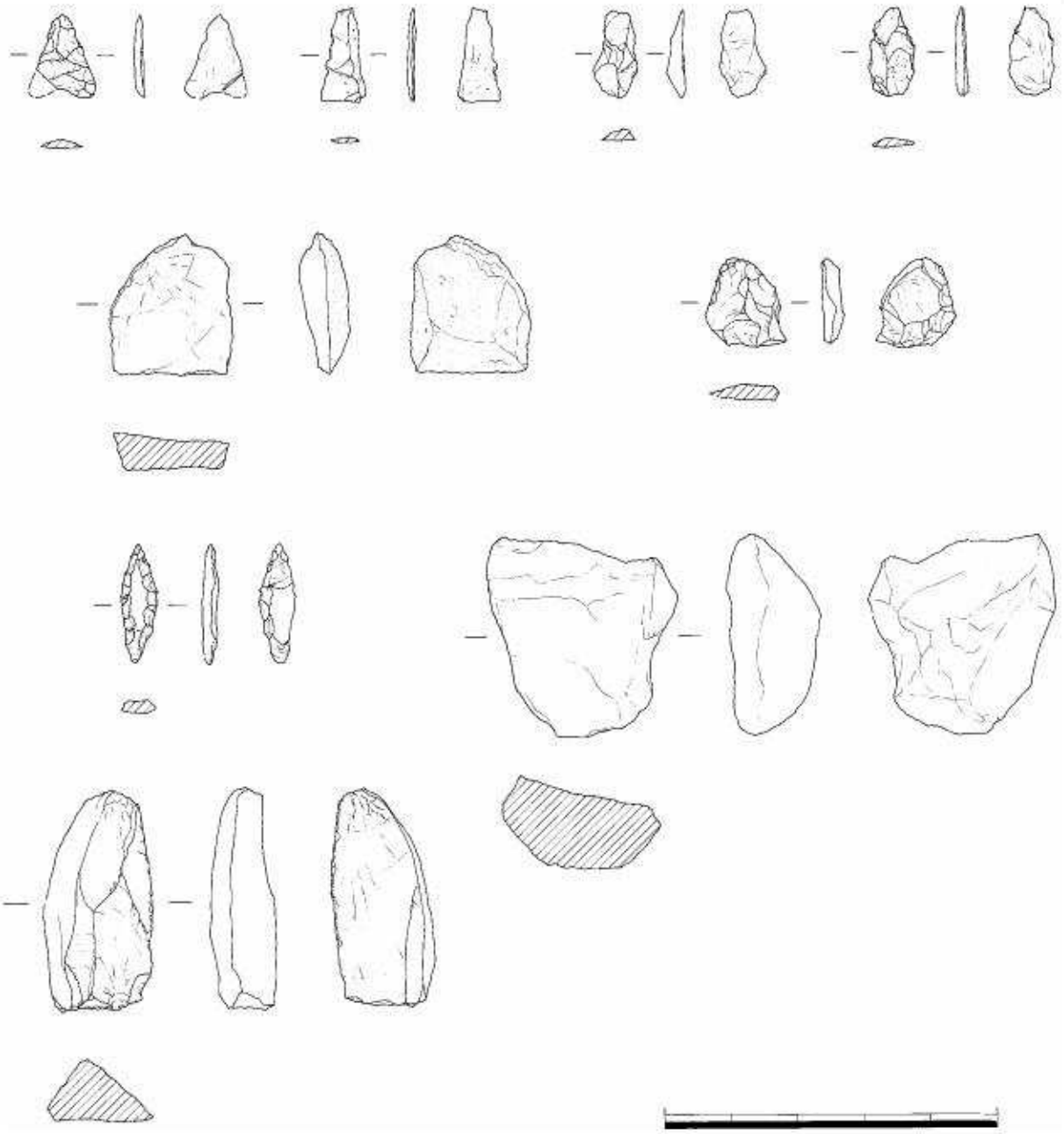


図18　石製品実測図①（S＝1/2）

り刃部が形成されている。長さ3.4cm、幅2.1cm、厚さ0.9cmを測る。(54) は四辺形を呈するもので、片辺に両面調整がなされており、長さ5.2cm、幅3.1cm、厚さ1.0cmを測る。(57)はサヌカイト原石の片面を打ち欠いて鋭利な刃部をつくりだしている。表裏の大部分には自然面を残す。長さ6.0cm、幅4.5cm、厚さ2.2cm。(55)は表面全体に自然面を残す石材で、原石とみられるものである。長さ6.0cm、幅5.6cm、厚さ2.2cm。(58)は砂岩製の磨石で長さ8.7cm、幅6.9cm、厚さ4.0cm。側面には赤色顔料が付着しているが、赤色の鮮明さから顔料は水銀朱とみられる。

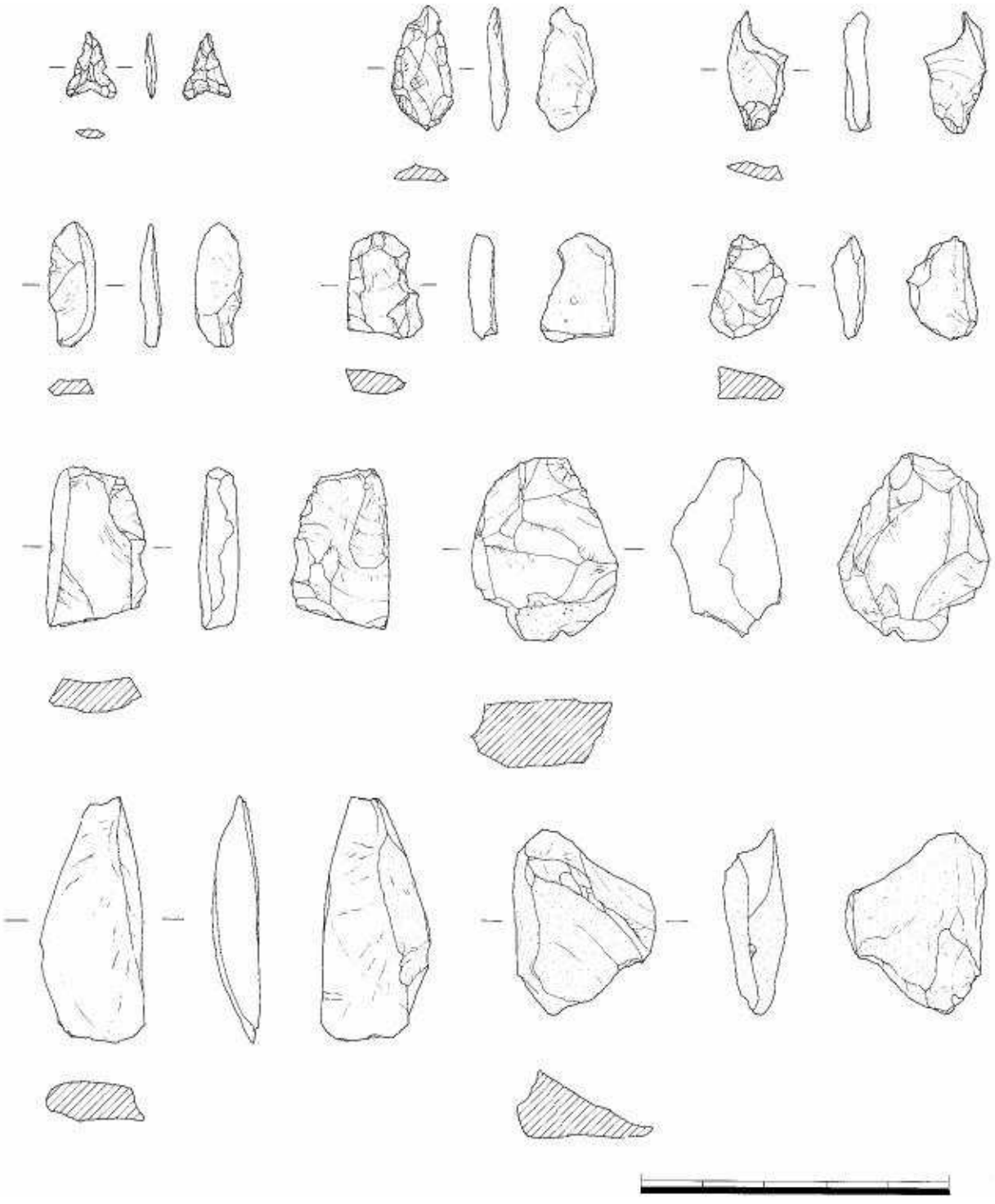


図19　石製品実測図②（S＝1/2）

## 5．まとめ

今回の調査は、纒向遺跡南西における遺構の範囲確認を主な目的として調査を進めてきたわけであるが、纒向遺跡の中心時期にあたる古墳時代前期の遺構は検出されなかった。この時期の遺構面については縄文時代の遺物包含層上面が該当するものと考えられるが、この面で当該期の遺構は確認されなかったし、すぐ上の堆積層からも中世遺物が出土するのみで古墳時代の遺物は認められなかった。

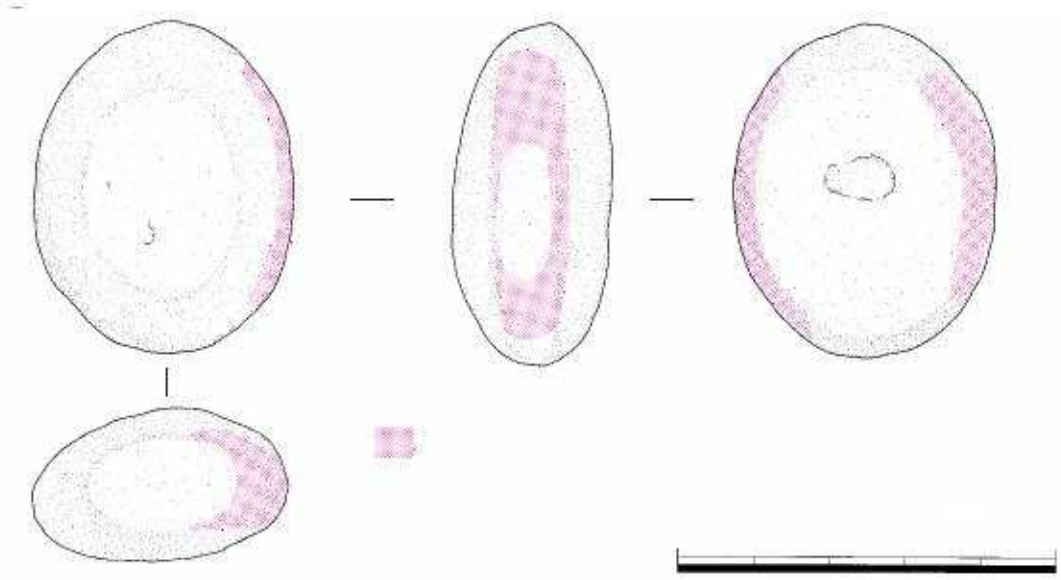


図20　石製品実測図③（S＝1/2）

これらの状況から古墳時代において当地は遺構密度の低い地域であったことが推定され、明瞭な遺構は確認されなかったものの纒向遺跡の範囲を検討する上では有益な成果であったと考えられる。

また縄文時代後期の遺物包含層と柱穴群を新たに確認したことは大きな成果であった。纒向遺跡内でこれまでに確認された遺構・遺物については、太田北微高地を貫流する奈良時代の旧河道より縄文時代後・晩期と考えられる土偶頭部が１点出土している[1]。また隣接する調査においても元住吉１式の深鉢、鉢、注口土器と、晩期船橋式の深鉢が出土するなど、後期中葉まで遡ることが明らかにされている[2]。今回確認された土器群は北白川上層式に相当するものと考えられ、これまでの成果をより補強する資料である。また計44基検出された柱穴のうち、列をなして並ぶと思われるものが３ヶ所でみられる。直線的に並ぶものと緩い弧を描くものがあるが、狭小な調査区のため全容が捉えられず判然としない点が多い。今回は柱穴のみで竪穴状の落ち込み、壁溝、炉などは確認されなかったが、住居ではないにしても覆屋のような何らかの建物があった可能性は高いと言えるだろう。　（木場）

【註】

1）石野博信・関川尚功　1976『纒向』桜井市教育委員会

2）関川尚功　1984「纒向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1983年度（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所
　松田真一　1997『奈良県の縄文時代遺跡研究』（編）奈良県立橿原考古学研究所　由良大和古代文化研究協会

# 第３節　吉備池遺跡第13次発掘調査報告

## 1．はじめに

今回の調査は桜井市大字吉備47番地小字カウベにおいて、吉備池廃寺の範囲確認を主たる目的として平成14年７月22日から８月30日まで実施した埋蔵文化財発掘調査である。調査地は近鉄大阪線大福駅の南東約１km、吉備池の東側にあたり、現状で畑地として利用されていたところである。

吉備池廃寺の調査は、1997年に行なわれた桜井市と奈良国立文化財研究所の共同調査で掘り込み地業を施した金堂跡とみられる巨大な基壇が検出されたことに始まる[1]。その後、塔跡と考えられる基壇、東・西・南面回廊、中門、南門、僧坊などの主要遺構が相次いで確認されている。この寺院は、金堂や塔跡が極めて大きな規模であることや、出土遺物の年代、周辺に残る地名の考証などから舒明天皇

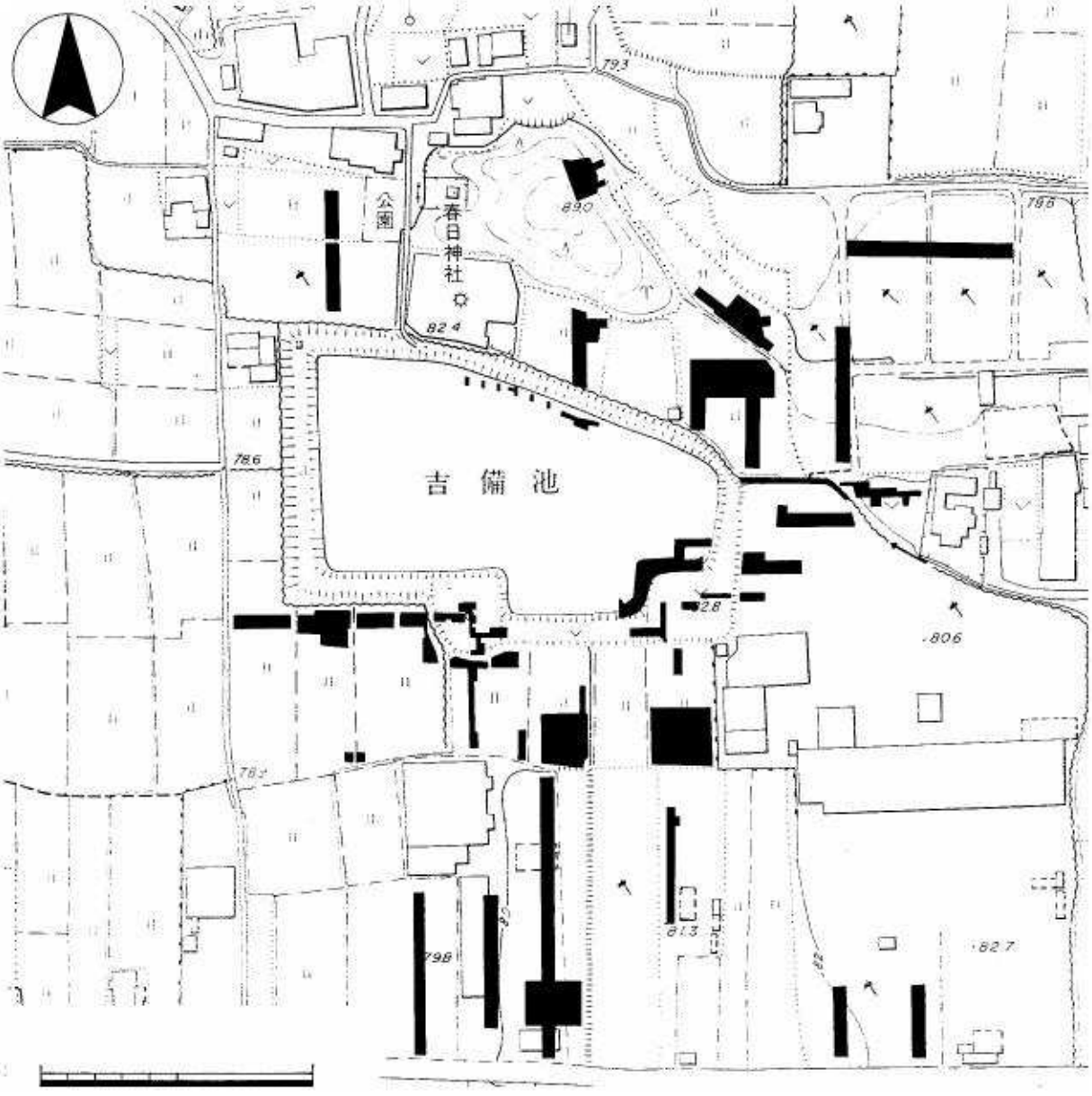



図21　吉備池遺跡第13次発掘調査位置図（S＝1/2500）

が639年に発願して建立された百済大寺の可能性が高いと考えられている。また当地は、吉備池遺跡第12次調査概要報告で提示された寺域復元案による東面大垣の推定ライン上にあたっており、同じライン上にある吉備池遺跡第６次調査の第１トレンチでは谷を埋めた大がかりな整地土やバラス敷き、柱穴などが確認されている[2]。このため調査では敷地全体の遺構配置状況を確認するために、２×13mの東西に細長い調査区を設定し手掘りにて掘削を開始した。この結果、柱穴、溝などの遺構が確認されたため、密度の高かった南・西側などについては調査区の拡張を行なった。最終的な調査面積は72㎡となった。

## 2. 基本層序

当調査地での基本層序は、1.明黄茶色土（図22　第２層）、2.明灰茶色土（第３層）、3.明黄褐色粘質土（地山）の３層に大別される。１は地表面から約30cm厚で堆積する現代の畑土層である。２は調査区西半でのみ確認された厚さ30cmの堆積土である。地形的に西半が低いことから耕地確保のために施された現代の整地層であると考えられる。３の地山は西半では地表下60cm、東半で地表下20cmで検出された。この上面では、植樹によるとみられる直径１m程のドーナツ形の撹乱が数基確認されたが、それ以外に目立った撹乱などはなかった。この地山面を精査したところ、柱穴、溝などの遺構が検出された。なお遺構検出面である地山の標高は調査区東半で83.4m、西半で82.6mである。

## 3. 検出遺構

溝、掘立柱建物、塀、井戸、柱穴など鎌倉時代の遺構が確認された。以下遺構ごとに概要を説明したい。

**溝ＳＤ1001**（図22）

調査区の中央で検出された南北方向の溝で、調査では６m分が確認された。この溝は幅1.6m、深さ20cmで、底は平坦に掘削している。また溝の南半部については整地を行なった上で構築していることがわかった。溝の埋土は２層で、上から明茶褐色粘質土（地山ブロック・炭を含む）、灰黄色粘質土（地山ブロックを含む）の順で堆積していた。これらを掘り下げると溝底で30基以上を数える柱穴の輪郭が明瞭に検出された。柱穴は深さ40cmのものが多く、掘形は円形が主で隅円方形のものも数基確認された。溝の中軸線上で集中して柱穴が検出されることや、埋土の堆積状況などから塀を構造する溝と柱列になると思われる。また遺構の時期は出土遺物から13世紀後半と考えられる。

**溝ＳＤ1002**（図22・23）

溝ＳＤ1001の西２mの地点で検出された南北方向の溝である。溝の規模は幅1.5m、深さ1.2mで、溝の南端は落ち込みＳＸ1001によって削平されている。埋土は基本的に1.黄褐色シルト、2.茶褐色シルト（炭を含む）、3.明褐色シルト（地山ブロックを含む）、4.明褐色シルト（12より暗く、地山ブロックを含む）、5.灰褐色粘質土、6.灰褐色粘質土（16より粘性強い）、7.灰黄褐色粘質土（地山ブロック、鉄分を含む）の７層で構成されている。また溝内中位～底面にかけて、拳～子供の頭程度の大きさの

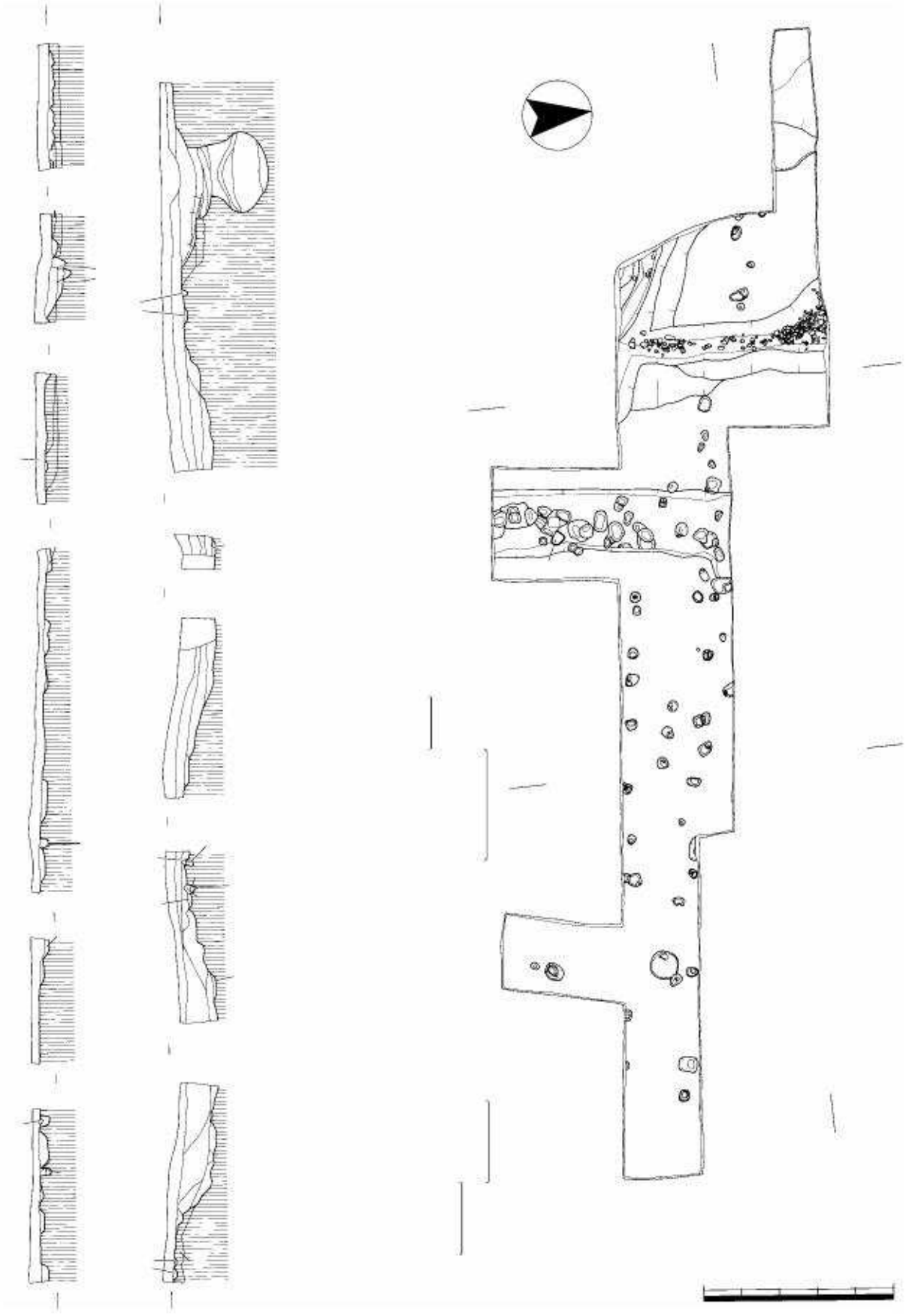


図22　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/150）

河原石、瓦器、土師器に加え、軒丸瓦、平瓦、丸瓦など古い時期の遺物も多数出土した。これらは溝の廃絶に際し廃棄されたものと推定される。

**井戸ＳＥ1001**（図23）

溝ＳＤ1002を掘り下げた結果、その北端で隅丸方形の井戸掘形が検出された。敷地の都合により、井戸の全容を明らかにすることは出来なかったが、掘形は南辺の長さから1.2m四方の方形を呈するものと推察される。深さは検出面からで1.5m、ＳＤ1002の肩からでは2.4mを測る。井戸の断面形は元々は筒形であったとみられるが開口時の壁面崩落の結果、下半が外方へ膨らんで達磨の基部のような形状を呈している。埋土は６層で、1.灰褐色土（地山ブロックを含む）、2.明赤褐色土（地山ブロック多）、3. 緑灰色粘質土（２の崩壊土を含む）、4.暗緑灰色粘質土、5.暗緑灰色粘質土（４に比べて粘性弱く、植物質を多く含む）、6.緑黒色粘質土の順で堆積する。調査では、１・２層を上層、３～６層を下層として遺物を分けて取り上げた。土層堆積の中で、中心部に堆積のピークがあり、そこから山形に土砂が流出しつつ埋積する３・４層の状況は、井戸埋め立て過程を考える上で興味深い。井戸内では井戸枠などの構造物は確認されなかったが、中層～底にかけて土師器羽釜、瓦器椀などの土器類が多く出土した。時期についてはＳＤ1002と同様13世紀後半に位置付けられるものと考えられる。また埋土の一部を層ごとに洗浄した結果、桃核などの種子も多数確認された。

**掘立柱建物ＳＢ1001**（図22・24）

溝ＳＤ1001の東側で検出された東西５間×南北１間以上の建物遺構で、柱間寸法は東西では西から４間分が1.6m等間、東端の１間が１m、南北が1.8mである。柱穴掘形の形態は円形と隅丸方形が同じ割合で混在しており、その規模は直径ないし一辺30cmである。深さは20～30cmが主流でＰ２のように60cmを測るものもある。なおＳＢ1001は、東端1間分の柱間寸法が他より狭くなることから、東西４間の建物の東側に廂が付く構造をとるものと考えられる。また東西の柱列２条についても総柱で列をなしているため、一方が廂になるのかもしれない。調査区の範囲では建物の全容を捉えることが出来なかったが、当地の南に谷が走る地形的要因から建物は北に更に広がっていくものと推察される。

**落ち込みＳＸ1001・1005**（図22）

調査区西南～西端で検出した、西で北に斜行する落ち込みである。調査区の都合直接的な接点を見出せなかったため遺構番号を分けているが、方向や埋土などから明らかに同一遺構であることがうかがわれる。ＳＸ1001については切合関係から、溝ＳＤ1002より後に構築されたことがわかった。1001・1005ともに片側の肩が検出されたに過ぎないが、最も幅の広い部分で肩から1.8m分が調査できた。断面の形は現状では緩やかに落ちる逆台形を呈し、深さについては西側へ向かって落ち込む傾向がみられる。また底には幅70cmを測る同一方向の溝が掘られており、平坦面までの深さが70cm、溝底での深さは80cmである。埋土からはＳＤ1002と同様13世紀後半の遺物が出土しており、同じ時期にはその機能を失っていたことがうかがわれる。性格については、まず落ち込みは、これを境に東西の敷地の標高が変化し、東に約2.5m高くなることから、段丘崖の一部であると考えられる。また落ち込み底に掘られた溝は、現在敷地の南西を通る水路と方向角が等しいことなどから、同様の水路として機能して

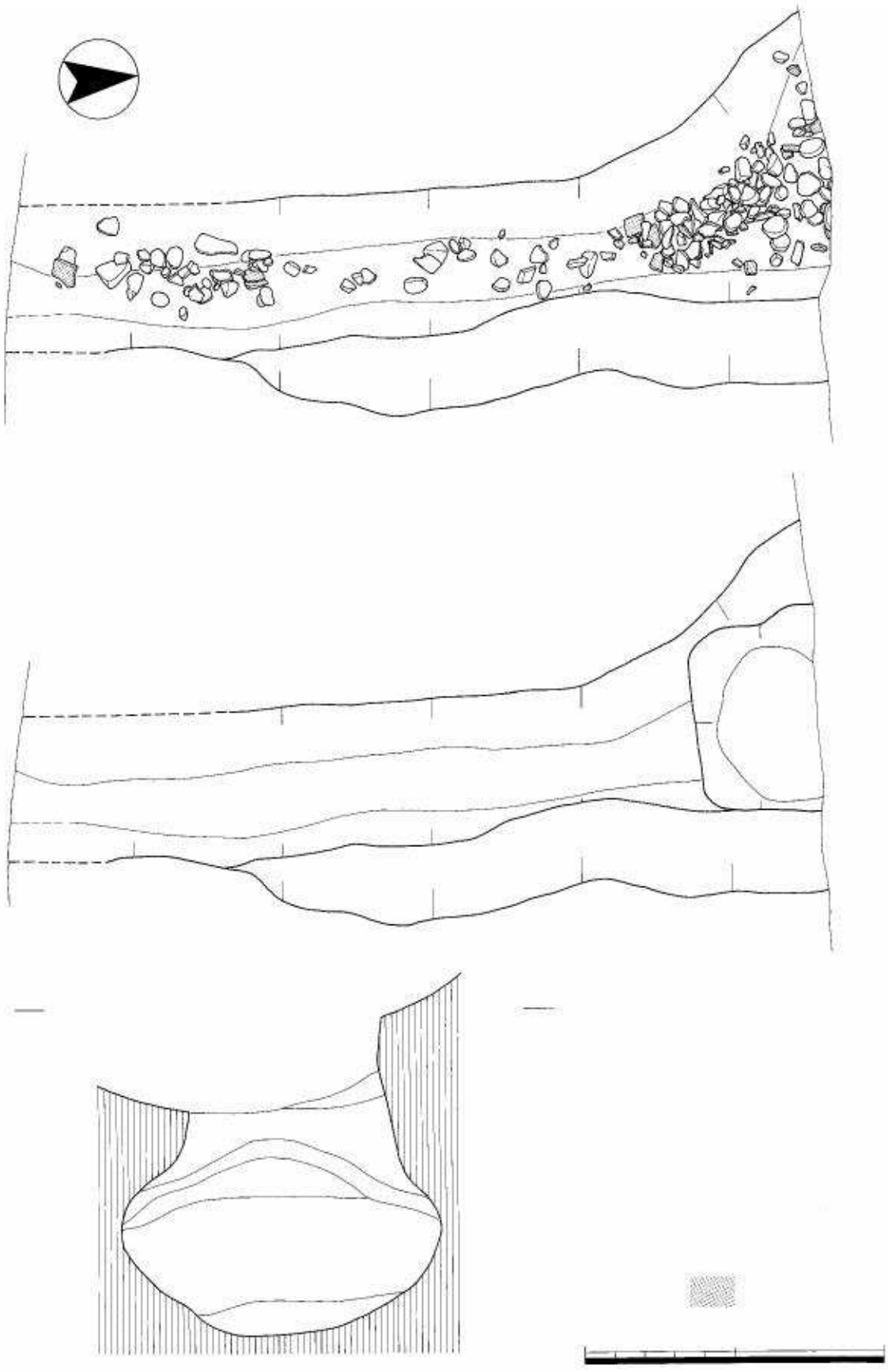


図23　溝SD1002・井戸SE1001実測図（S＝1/40）

いたとみられる。

## 4. 出土遺物

今回の調査では、遺物整理箱に換算して7箱分の遺物を得ることができた。出土地点では、ＳＤ1002からが最も多く、次いで井戸ＳＥ1001となっている。時期については、中世のものがその大半を占め、瓦、須恵器など古い時期の遺物も含まれている。細片が多かったため実測出来たものは一部であるが、以下主に出土遺構別で各遺物の概要を説明したい。

**落ち込みＳＸ1001出土遺物**（図25－1）

瓦器皿で、口縁部の1/8が残る破片である。口径10.1cm、器高1.4cm。手づくね成形した後、口縁～内面についてはナデで仕上げられている。また内面にはジグザグ状の暗文が描かれている。

**溝ＳＤ1002出土遺物**（図25－2～4）

須恵器の壷（２）、瓦器椀（３）、土師器羽釜（４）などが出土した。まず、（２）は頸部から体部の破片で、口縁・底部は欠失している。頸部径５cmと考えられ、頸部と体部中央にカキメが施されている。

（３）は口径15.2cm、器高4.2cm。椀に丸みが無く扁平化が進んできており、脚は断面が三角形に退化したものが貼り付けられている。底径は5.2cm

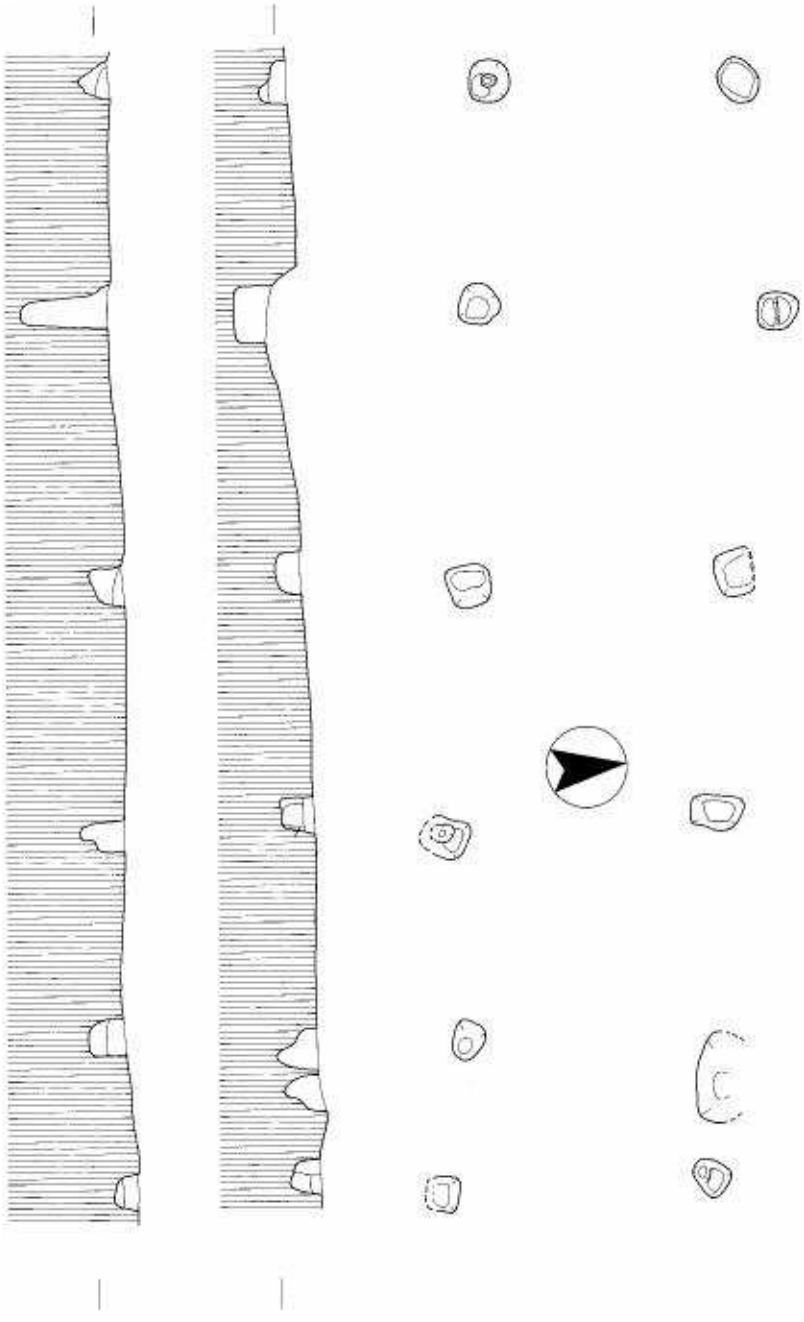


図24　掘立柱建物SB1001平面・断面実測図（S＝1/50）

である。

（４）は口径25.2cm、残存高6.3cm、鍔径27.2cmを測る。頸部から逆Ｌ字形に曲がる口縁部、垂直に立ち上がる口縁端部を有し、鍔は体部の上位に貼り付けられている。

**ＳＸ1001・ＳＤ1002間断割出土遺物**（図25－5～16）

両遺構間の前後関係を確認するために掘った断割部分で、土師器羽釜（５）、瓦器椀（６）～(15)、土師器小皿(16)などが出土した。

（５）は「く」の字形に曲がる頸部とつまみ上げで立ち上げた口縁端部を特徴としている。鍔は欠失し接合痕のみを残すが、体部上位に貼り付けられていたことがうかがえる。

瓦器椀のうち、（６）～（８）・(11)は椀が丸みを持ちながら立ち上がるタイプのもので、口径は12.2～15.1cm、器高は高台が残るもので4.1～4.8cm、内面には横位のミガキが密に施され、外面は未調整のもの（６）・(11)、上位を中心にミガキを施すもの（７）・（８）がある。脚には断面三角形の高台が付いている。

（９）・(10)は椀底部と口縁部への立ち上がりの間に屈曲点があり、立ち上がりが直線的なタイプのもので口径12.4～13.0cmを測る。椀の扁平化は顕著ではなく、器高は前述の一群と大差ない。調整の面では外面は未調整で、成形時の指頭圧痕が残る。内面には横方向のミガキが疎らに施されている。底部には屈曲点より内側に断面三角形の高台が貼り付けられている。

(12)～(15)は底部から屈曲点なく直線的に立ち上がる椀で、口縁部のみ緩く屈曲している。口径は13.0～14.2cmを測る。椀の扁平化が進んでおり、器高は3.5～4.2cm。内面と口縁部外面に横位のミガキがなされ、(15)には内面底にらせん状暗文の一部が認められる。

(16)は土師器の小皿で、口径8.6cm、器高1.7cm。端部が外方につまみ出されている。

**溝ＳＤ1001出土遺物**（図26－17～19）

瓦器椀(17)・(18)、土師器羽釜(19)などが出土した。

(17)・(18)は丸みを帯びた椀部を持つもので、口径12.2cm～14.8cm、器高4.0cm～5.1cmを測る。手法的には、外面中位に数条のミガキがなされ、内面には横方向のミガキが施されている。ミガキは(18)の方が密。また内面の底には一重半程度の円形の暗文が描かれている。

(19)は口径26.0cm、残存高7.4cmを測る羽釜の口縁から鍔までの破片で、鍔径は29.4cmを測る。「く」の字形に曲がる頸部と逆「く」の字形に立ち上がる口縁部を有する。

**柱穴ＳＰ1056出土遺物**（図26－20）

溝ＳＤ1001内で検出された柱穴より瓦器椀が出土した。口径13.6cm、器高3.9cmを測る。外面の口縁部と内面に横方向のミガキ、内面底にはらせん状暗文が施されている。

**その他の出土遺物**（図26－21～26）

須恵器の蓋(21)は、溝ＳＤ1001の東壁際で出土した。円盤形のつまみが付くもので、法量は口径16.6cm、器高3.8cm、つまみ径3.4cmを測る。口縁部が約半分欠失している。

(22)～(26)は中世耕土以上の覆土より出土したものである。まず(22)は口縁が内傾するタイプのも

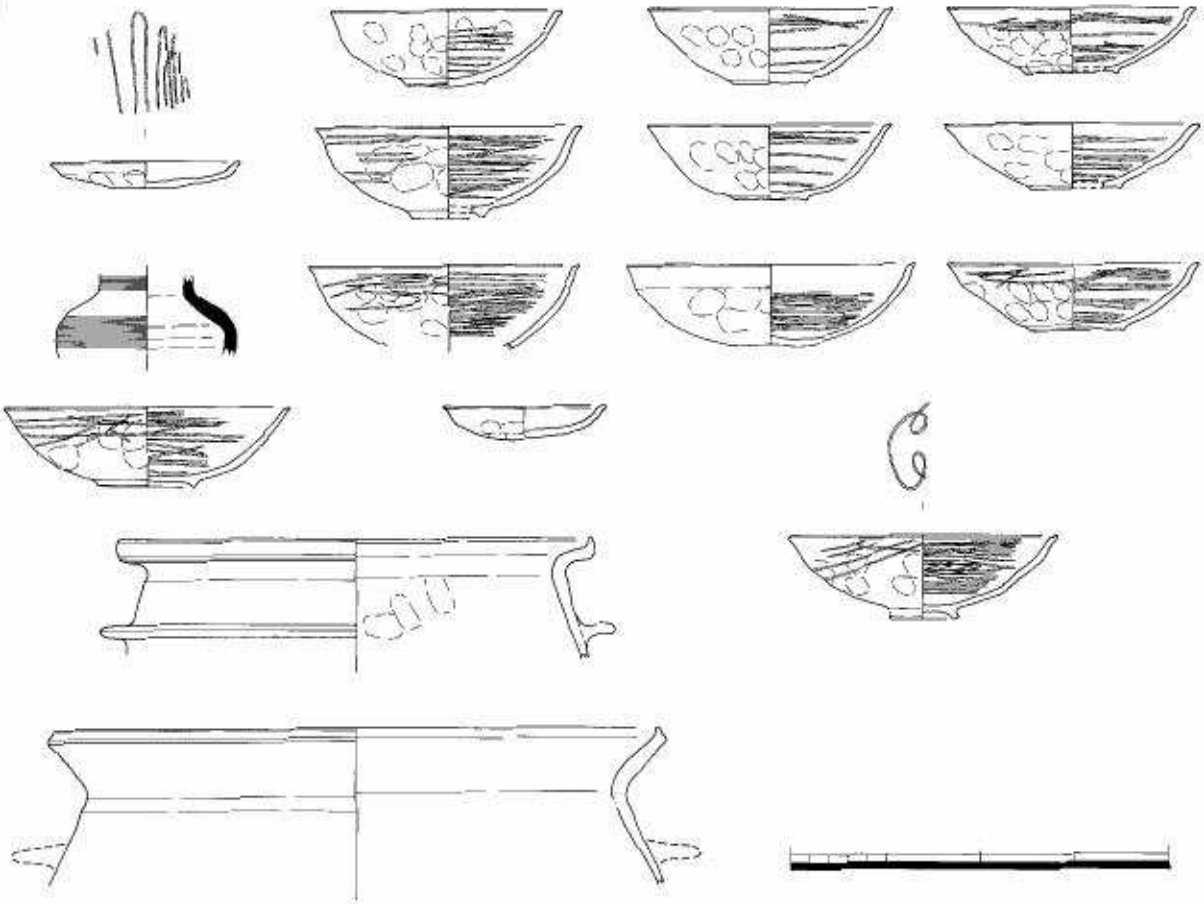


図25　落ち込みSX1001・溝SD1002出土遺物実測図（S＝1/4）

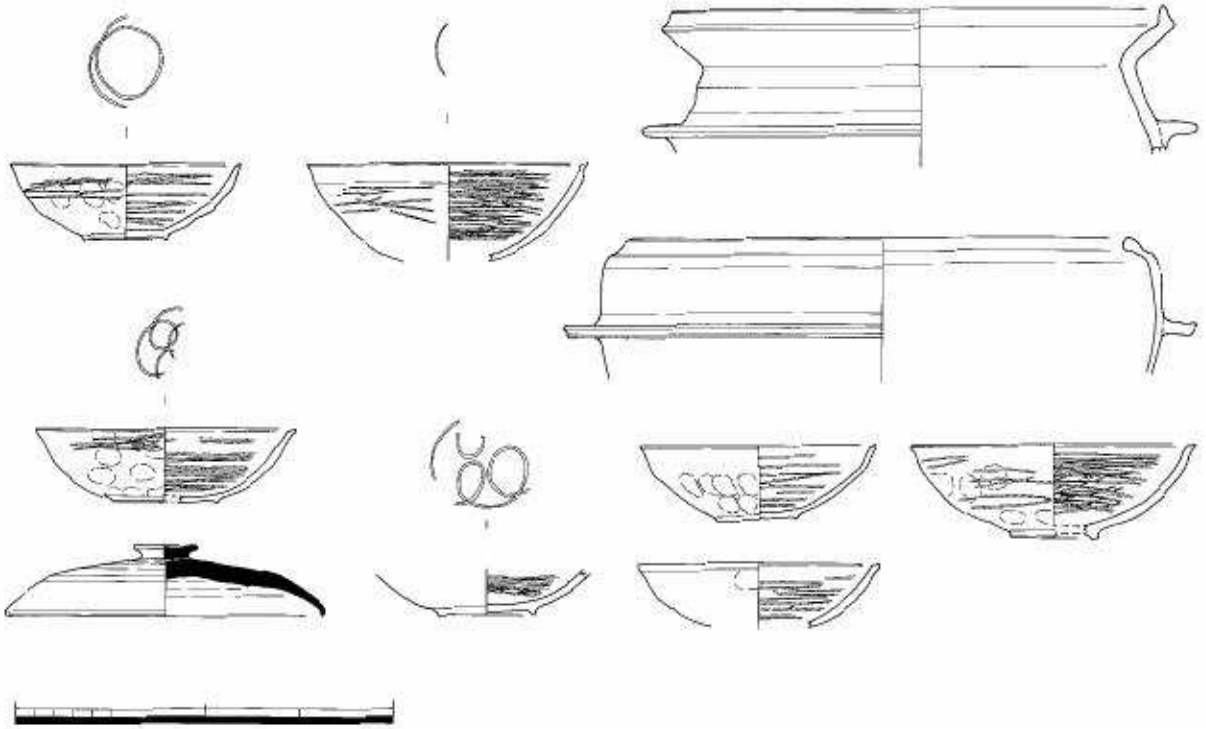


図26　溝SD1001・柱穴SP1056・覆土出土遺物実測図（S＝1/4）

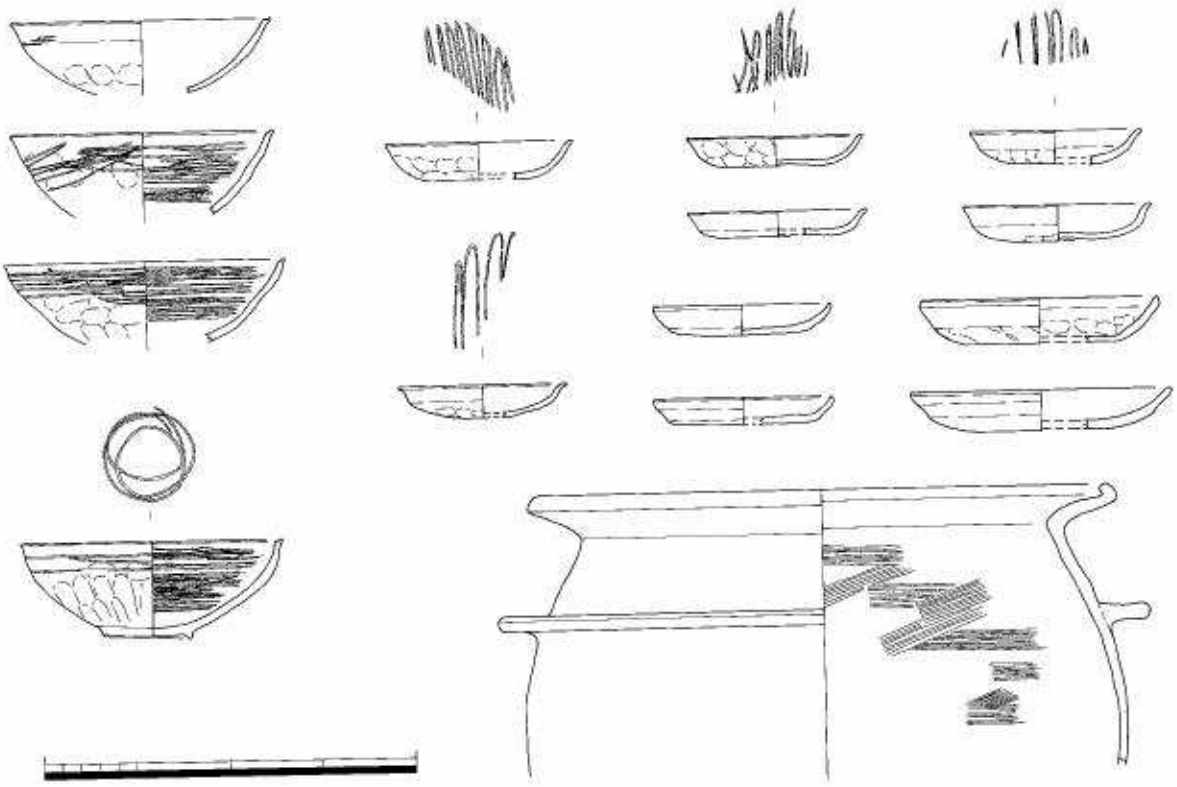


図27　井戸SE1001上層出土遺物実測図（S＝1/4）

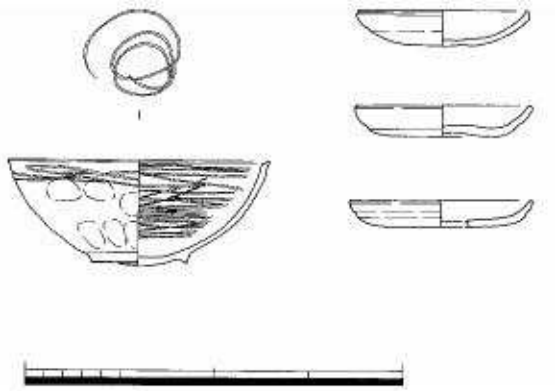


図28　井戸SE1001下層出土遺物実測図（S＝1/4）

ので、口縁の1/8程度を残す破片である。鍔は体部の上位に貼り付けられており、鍔径は33.6cmを測る。

(23)～(26)はいずれも瓦器椀の破片で、(23)は口縁部を、(25)は底部を欠失している。口径12.4cm～15.0cm、器高3.9～4.9cmを測る。(26)は内外面にミガキが施され高台も断面逆台形を呈することから、他のものより古い様相を示している。(24)・(25)は内面のみ粗いミガキが施されている。外面には整形時の指頭圧痕が残っている。(23)にはらせん状の暗文が描かれている。

**井戸ＳＥ1001上層出土遺物**（図27－27～41）

瓦器椀(27)～(30)、瓦器皿(31)～(36)、土師器皿(37)～(40)、羽釜(41)などの遺物が出土した。

瓦器椀は、前述のものに比べ全体的に椀部の扁平化が進んでおらず、器高が高い傾向にある。法量は口径13.8cm～15.0cm、器高は底部まで残るもので5.2cm。底部の残る(30)にはらせん状の暗文が残る。

瓦器皿は口径9.0～10.0cm、器高2.0cmを測る。口縁部と内面はナデ調整で仕上げられ、外面下半は未調整で成形段階の指頭圧痕が認められる。(31)～(34)の内面にはジグザグ状の暗文が施されている。羽

釜(41)は球形に張る体部と「く」の字に外傾する頸部を有する。また口縁端部は逆「く」の字に屈曲する。法量は口径30.4cm、残存高14.9cm。鍔は体部上位に貼り付けられており、鍔径は35.0cm。内面にはハケメが明瞭に残る。

**井戸ＳＥ1001下層出土遺物**（図28－42～45）

瓦器椀(42)、土師器皿(43)～(45)のほか、細片ではあったが羽釜の破片なども出土している。

瓦器椀は口径13.8cm、器高5.4cm。椀の扁平化がなく半球形を呈する。内面と口縁部外面には横位ミガキが施され、底にはらせん状の暗文が認められる。

土師器皿は口径9.0～9.6cm、器高1.4～1.8cm。口縁部と内面はナデで仕上げられるが、底部は未調整。

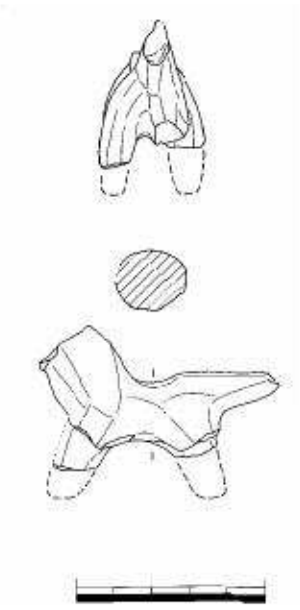


図29　土馬実測図（S＝1/4）

**土馬**（図29－46）

覆土より出土したものである。頭・脚部を欠損する胴部のみの破片で、胴長12.8cm、残存高7.6cmを測る。

**瓦**（図30・31－47～53）

出土総数123点、総重量28.9kgに及ぶ瓦が出土した。小さな破片が多かったため、実測に耐え得るものは次の７点であった。

(47)は今回の調査で出土した唯一の軒丸瓦である。瓦当文様は複弁蓮華文で外区には現状で圏線１条と珠文が配されている。外縁は全て欠け落ち摩滅も著しいものだが、花弁と圏線との間隔が狭いことが特徴的である。摩滅で蓮子の数・配置などもわからないため笵型式は特定しがたいが、花弁の割付・径などから6233型式に類似するもので、藤原京期に位置付けられる資料であると考えられる。

(48)は丸瓦の破片で摩滅が著しい。凸面にはタタキ目などは認められず、凹面は布目と模骨痕が微かに残っている。内面に肥厚する部分があり、その特徴から軒丸瓦であったと考えられる。

(49)も軒丸瓦とみられる破片で、瓦当が欠失している。両面とも摩滅が進んでいるが、凸面には縄目タタキがなされていた模様である。

(50)は平瓦の広端縁の一部である。凸面に調整痕は認められないが、凹面には模骨痕と微かに布目が残っている。(51)は丸瓦の破片である。凸面に粘土の接合痕があり、瓦当が貼り付けられていたと思われる。また凹面には布目が明瞭に残っている。

(52)は硬質に焼き上げられたもので、凹面の布目と模骨痕が鮮明に残る。また凸面には格子目タタキがなされている。

(53)は須恵質に焼成されたもので灰色を呈する。凸面には縄目タタキ、凹面には布目が認められる。

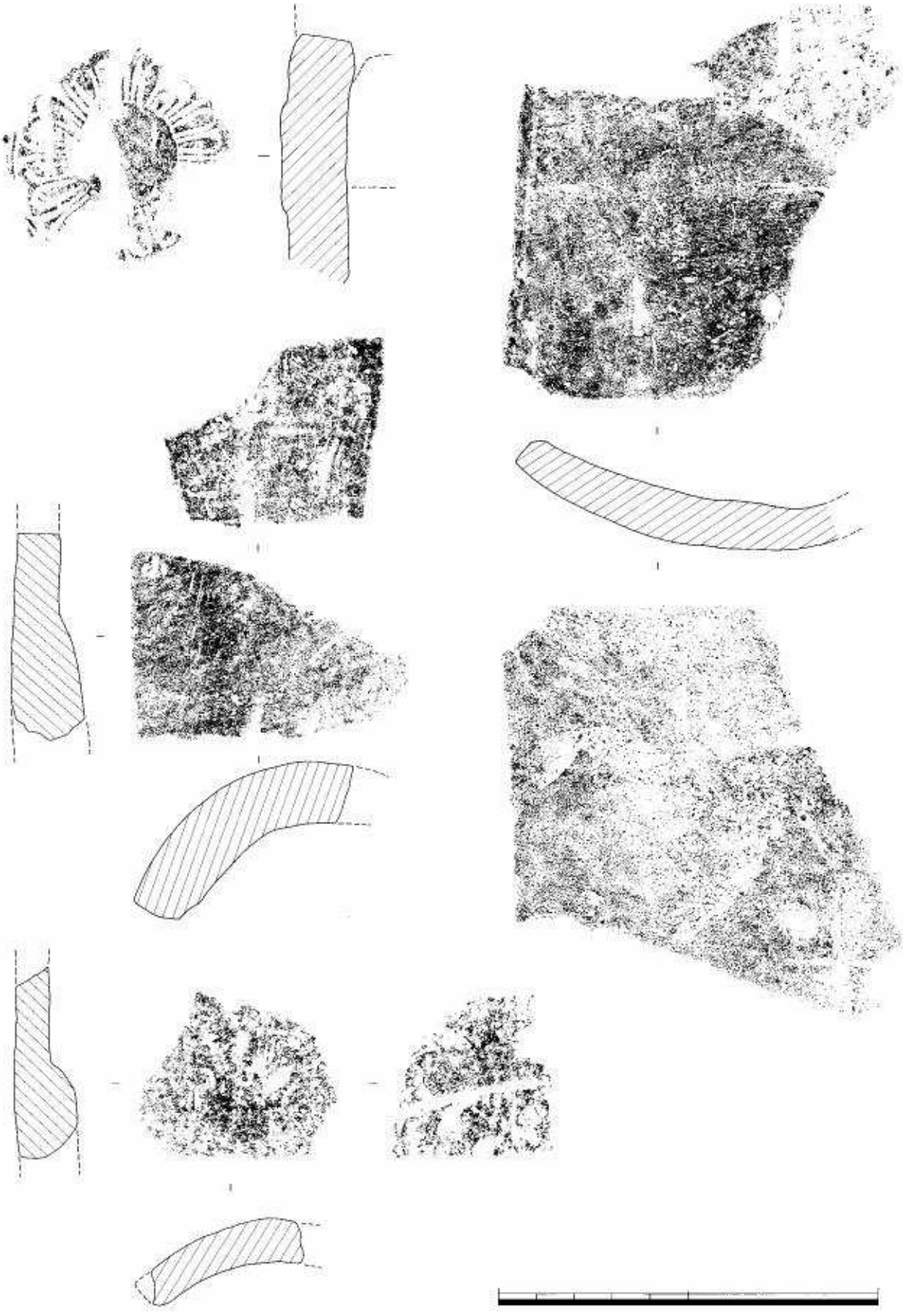


図30　瓦実測図①（S＝1/3）

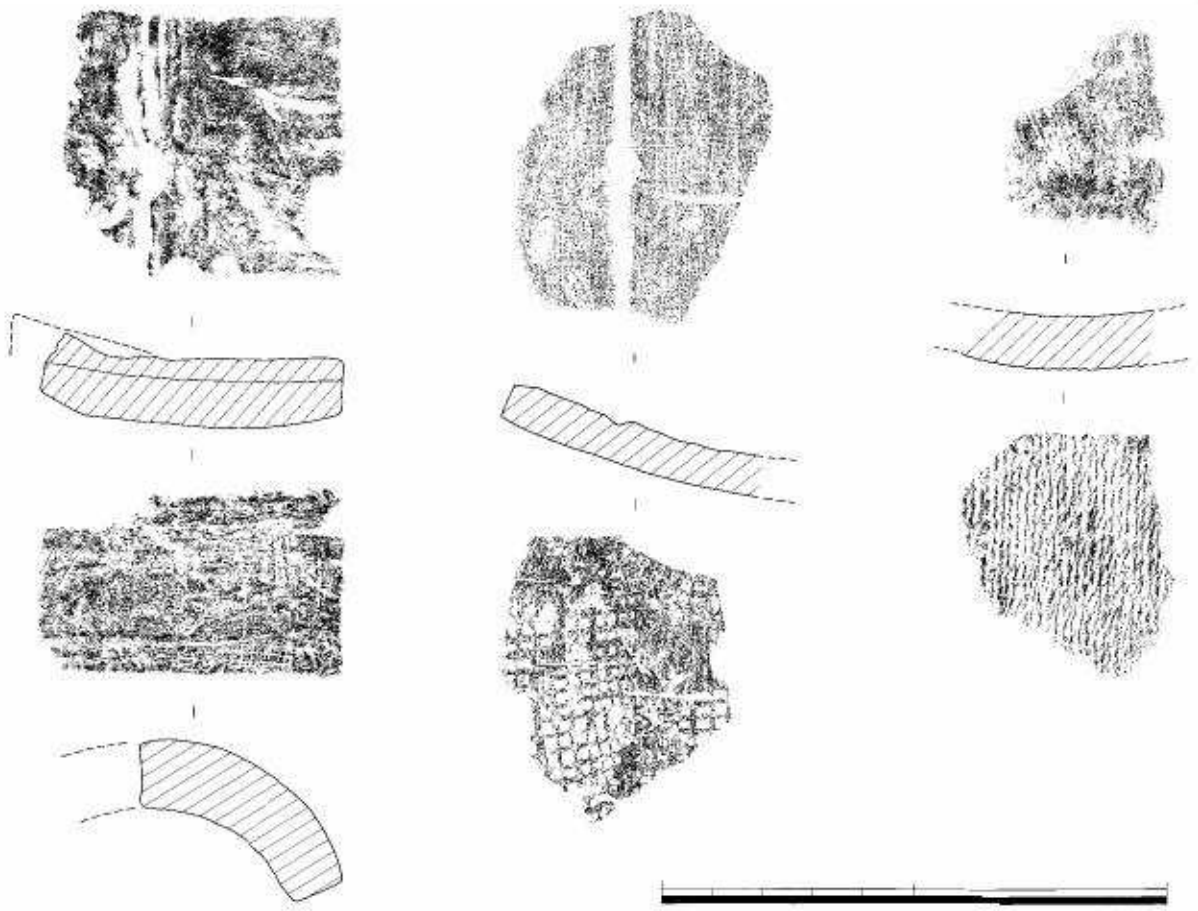


図31　瓦実測図②（S＝1/3）

## 5．まとめ

今回の調査では当初の予想とは異なり、13世紀後半の溝、掘立柱建物、井戸など中世城館跡に伴うと考えられる遺構群、藤原京期の瓦多数を確認したことは大きな成果であった。まず、中世溝のうち西側に位置するＳＤ1002はその規模と配置から館の西面を規定する区画溝になるものと考えられる。それに切り合う井戸ＳＥ1001は、ＳＤ1002と辺を揃えて構築されており、溝を意識した配置が看取される。また、井戸周辺の溝肩が大きく広がる点や、溝底の形状が井戸に従って改変される点は、井戸の方が後に構築されたことを示す事象と推察され、遺構の前後関係を考える上で有効な手がかりとなった。ＳＤ1002の東に位置し方位を揃えるＳＤ1001は、深さが浅く底面で多くの柱穴が検出されたことなどから、塀を構造する溝と柱列になるものと考えられる。塀の内側にあたる調査区東半では掘立柱建物が検出されており、館の中心施設が調査区東方に展開することが明らかになった。周辺では当地の北西約0.7㎞に位置する吉備大臣薮遺跡で14世紀前半期の柱穴や土塁、土塁に伴う区画溝、井戸を伴う中世城館跡が検出され、南北朝期に南北勢力圏の境界にあたるこの地域の様子を知る上で重要な成果が挙げられている[3]。今回の遺構が機能していた13世紀後半は南北朝の戦乱に移行する前段階の時期であり、状況変化に伴う城館構造の変遷等を比較検討しうる資料となるだろう。

吉備池廃寺に関連する遺構・遺物は残念ながら確認することは出来なかった。主要伽藍に隣接する

立地環境にあり東面大垣の推定ラインにもあたっていたが、可能性を示唆するような物証さえも今回の調査では検出されなかった。この結果から当地は、主要伽藍の検出された平坦部と異なり段丘の先端にあたるという地形的な制約から、隣接してはいるものの寺域として不具合が生じたため施設が構築されなかったのかもしれない。あるいは中世に城館が築かれることで、この段階に大がかりな削平が行なわれ遺構が消滅してしまった可能性も推察される。今回関連遺構は確認されなかったが、当地の真北に位置し東面大垣のラインにも推定される第6次調査でバラス敷き・柱穴が検出され、吉備池廃寺創建軒丸瓦の破片なども出土している点はやはり興味深く、このライン上での更なる調査が待たれる。

（木場）

【註】

1）小沢　毅　1997「吉備池廃寺の調査―第81－14・16次」『奈良国立文化財研究所年報1997－Ⅱ』奈良国立文化財研究所
佐川正敏　1998「吉備池廃寺の調査―第89次」『奈良国立文化財研究所年報1998－Ⅱ』奈良国立文化財研究所
西口壽生　1999「吉備池廃寺の調査―第95次」『奈良国立文化財研究所年報1999－Ⅱ』奈良国立文化財研究所
小池伸彦　2000「吉備池廃寺の調査―第105次」『奈良国立文化財研究所年報2000－Ⅱ』奈良国立文化財研究所
橋本輝彦・岩崎大介　1998『吉備池廃寺―（吉備池遺跡第9次）発掘調査資料―』（財）桜井市文化財協会
橋本輝彦　2001「吉備池遺跡第11次発掘調査概要報告」『平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
橋本輝彦　2002「吉備池遺跡第12次発掘調査概要報告」『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

2）清水眞一　1996「吉備池遺跡第6次発掘調査」『桜井市内埋蔵文化財1995年度発掘調査報告書1』（財）桜井市文化財協会

3）橋本輝彦　1998「吉備大臣藪遺跡第1次発掘調査概要報告」『平成9年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
橋本輝彦　1999「吉備大臣藪遺跡第2次発掘調査概要報告」『平成10年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
橋本輝彦　2000「吉備大臣藪遺跡第3次調査概報」『平成11年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

# 第４節　大藤原京関連遺跡第39次発掘調査報告

## 1．はじめに

この大藤原京関連遺跡第39次調査は個人住宅建築に伴う発掘調査である。調査地は桜井市大字橋本66番地４・66番地７で、奈良盆地東南部の丘陵裾を東西に流れる米川の北約100ｍに位置している。調査トレンチは申請地内の南西隅に、南北方向に長さ４ｍ×幅2.5m、面積10㎡に設定した。調査方法は、小型のバックホーを使用し耕作土層を除去後人力による掘削を行った。現地調査の期間は平成14年８月２日～５日となった。

これまでの周辺の第３次・第17次調査ではそれぞれ掘立柱建物[1]や自然流路跡[2]が確認されている他、整地土層と考えられる８世紀の遺物が混入する包含層や掘立柱建物２棟が、第27次調査で確認されている[3]。

## 2．基本層序

第１層は現代盛土層、第２層は現代耕作土層、第３～６層は近代～中世にかけての耕作土層、第７層は８世紀の遺物包含層で、以下若干の遺物を含む洪水砂などの自然堆積層の第８～10層となる。第７層上面まではG.L.約－80cmで、遺物包含層の厚みは約20～30cmであった。

## 3．検出した遺構・遺物の概要

遺構検出は、第７層上・下面と第９層の上・下面で行った。第７層上面では南北方向に掘られた中世素掘溝３条が検出され（図33）幅は約40cm、検出長約3.5mを測る。遺物は細片だが溝内から瓦器椀

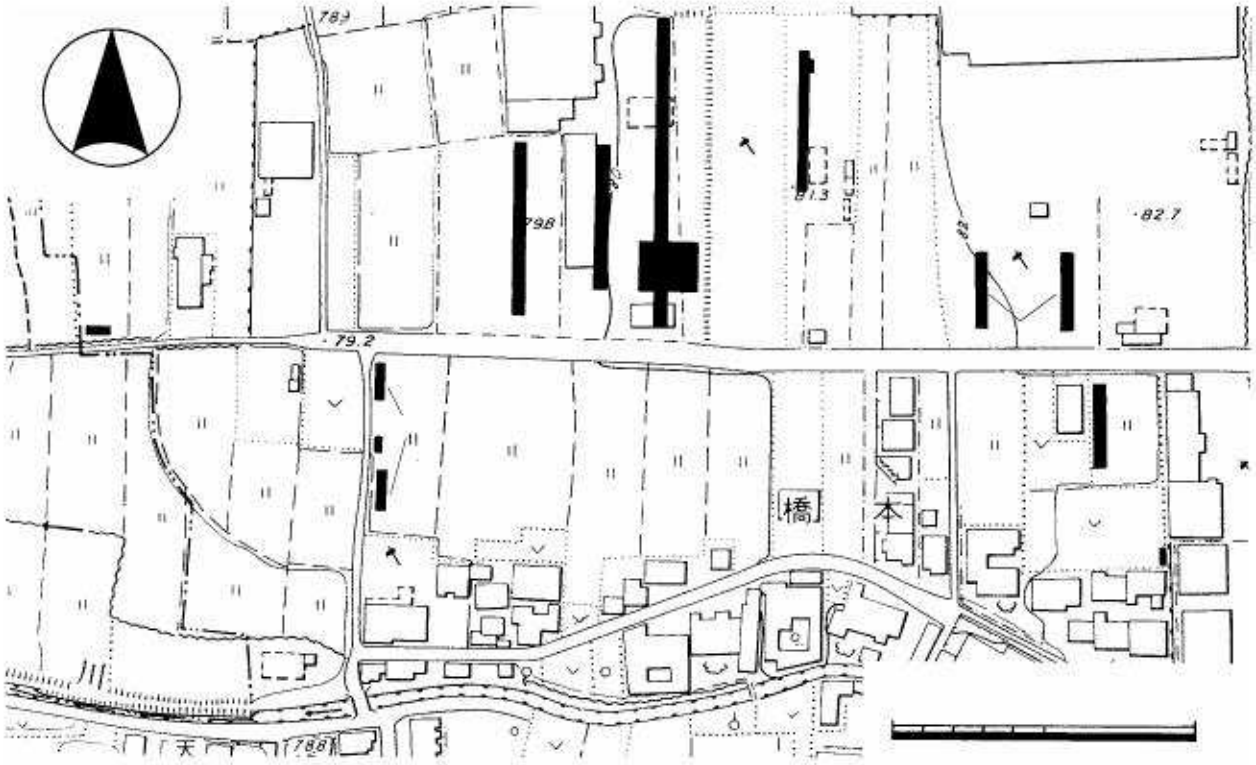



図32　大藤原京関連遺跡第39次発掘調査位置と周辺の調査（S＝1/2500）

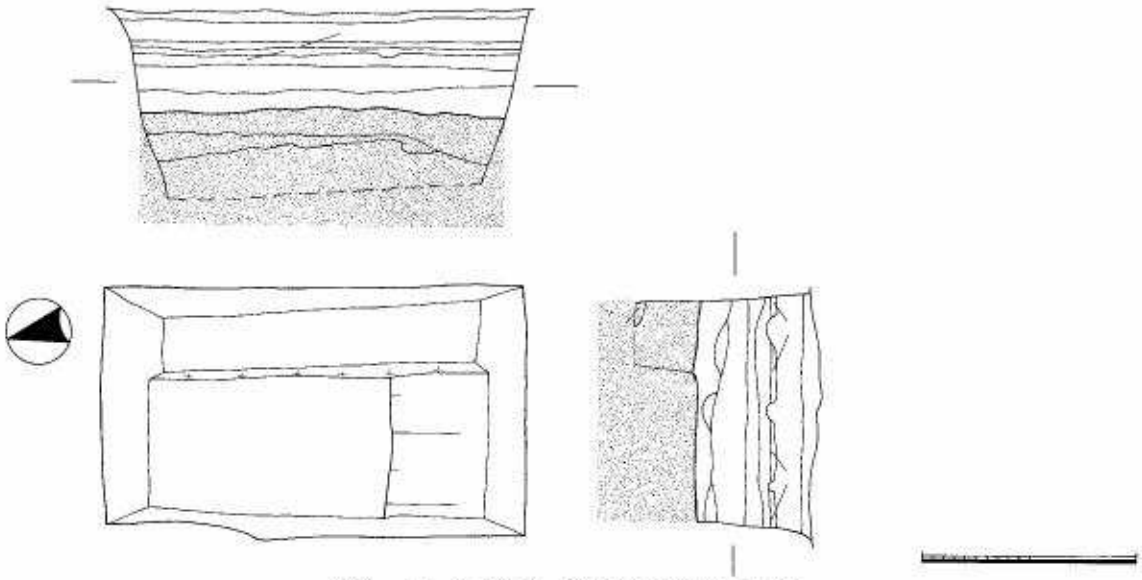


図33　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/70）

片が出土し、その時期は14世紀前半と考えられる。

第９層上・下面については、第８層以下の確認を行うため入れた小トレンチの断面のうち、洪水砂と考えられる第９層から、櫛描文が残る比較的摩滅の少ない弥生時代中期の土器片が２点と若干の縄文土器が出土した事から試みたもので、結果的に遺構は検出されず第９層に包含されていた土器もわずかだった。小トレンチは、G.L.約－1.2mまで掘削したが上記以外の遺構・遺物は確認できなかった。

**遺物包含層**　　第７層遺物包含層については、北側に隣接する第27次調査１トレンチ[6]にて遺物が多量に出土した８世紀前半～中頃の包含層と同一の土層であると考えられる。今回の調査では混入していた遺物の量こそ少ないものの、須恵器坏蓋片・土師器皿片が出土し、時期も１トレンチと重複が見られた。この事から、第７層が南北に平面的な拡がりを持つ整地土層になる可能性を考え、中世素掘溝を完削した後に第７層上面だけでなく下面でも遺構検出を試みたが、何も確認されなかった。

## 4．まとめ

今回の調査は平成12年度に実施した大藤原京関連遺跡第27次調査の２つのトレンチの間での調査であったため、それぞれのトレンチで確認できた遺構に関連するもの若しくは両者をつなぐ遺構の検出が予想された。しかしながら１トレンチから続く遺物包含層は薄いながらも確認できたが、２トレンチで検出された掘立柱建物に関連する柱穴などの遺構を検出する事はできなかった。この他第９層からは弥生時代中期と考えられる櫛描文が残る土器片が検出されたが、これは周辺に弥生時代中期の遺構が存在する可能性を示しており、今後の周辺の調査で検出される事が期待される。　　（松宮）

【註】

1）前園実知雄　1984「桜井市橋本・冠名遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概要・1983年度』奈良県立橿原考古学研究所
清水眞一　1988「吉備池遺跡柳田地区の調査報告」『吉備池遺跡切田地区発掘調査報告書』桜井市教育委員会
清水眞一　1988「吉備池遺跡冠名地区第２次調査概要」『吉備池遺跡切田地区発掘調査報告書』桜井市教育委員会
2）橋本輝彦　1996「大藤原京関連遺跡第17次調査」『1995年度発掘調査概要集』（財）桜井市文化財協会
3）橋本輝彦　2001「大藤原京関連遺跡第27次調査」『2000年度発掘調査概要集』（財）桜井市文化財協会
4）３）と同一

# 第５節　箕倉山遺跡第３次発掘調査報告

## 1．はじめに

箕倉山遺跡第３次調査は個人住宅建築に伴う発掘調査である。調査地は桜井市大字茅原307番地１・305番地１で、現地調査の期間は平成14年11月26日～12月６日で実施した。調査トレンチは、調査地の西側端で南北方向に９×2.5mの面積22.5㎡で設定し、調査方法は小型のバックホーを用いて表土や現代の整地土層・耕作土層を除去した後に、中世の遺物を多量に包含する土層を確認した時点から人力による掘削に切り替えた。これまで周辺の調査では、山の神古墳として調査され、素文鏡・滑石製玉類・ミニチュア土製品等が出土した磐座[1]や、７世紀後半の井戸状遺構[2]が確認されている。

## 2．基本層序

今回の調査では、整地土層がトレンチの南側で確認された。そのためトレンチの北と南で断面の様相が大きく異なっているものの、全体で13層に区分することができた（図35）。

トレンチの全面に拡がる第１層は表土及び現代整地土層である。それ以下、トレンチ北側では第２・３層が吉野川分水設置時に出た土を用いた整地土層、第４・５・６層が耕作土層となっており第６層下面まではG.L.－約1.2mを測る。第７層は整地土層が流出した結果できた遺物包含層と考えられ、層厚約20～25cmである。その下層の第12・13層は自然堆積層で褐～灰色細～中粒砂で構成されている。

トレンチ南側では、第１層直下からは13世紀後半～14世紀前半の遺物が混入する整地土層である第８～11層が確認されている。その下層にはトレンチ北側から第12・13層が続いている。整地土層の層厚は約80～90cmで、第12層上面まではG.L.－約１mを測る。

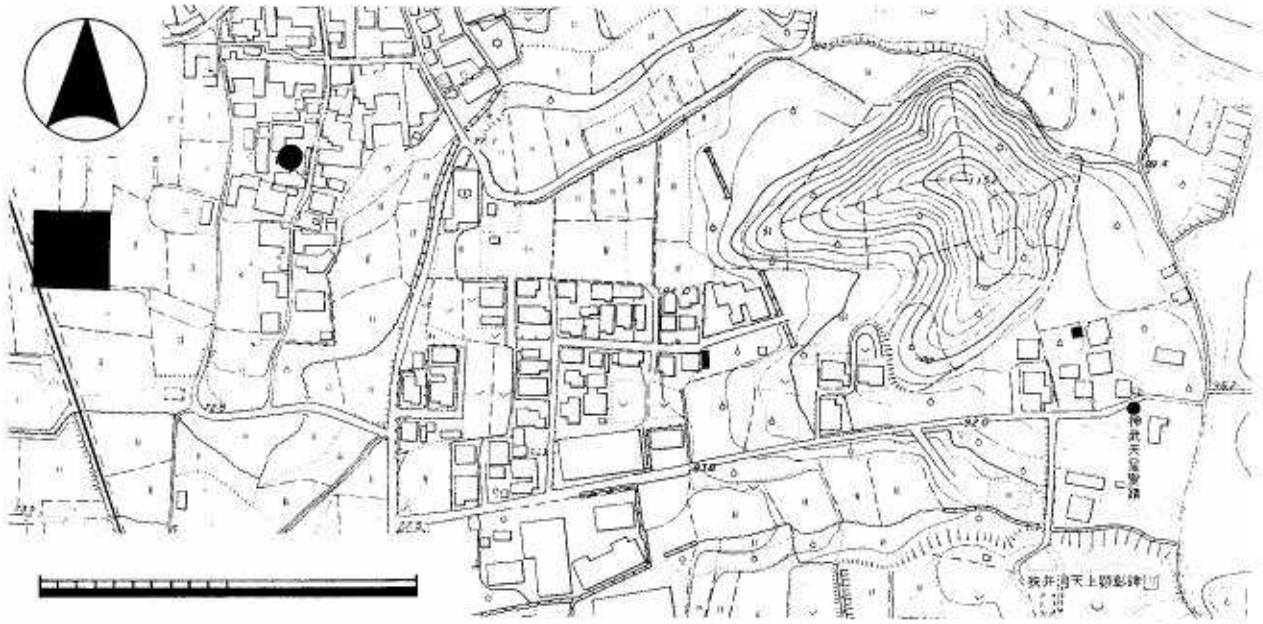


図34　箕倉山遺跡第３次発掘調査位置と周辺の調査（S＝1/4000）

## 3. 検出した遺構の概要

整地土層の高まりは平面的には南側の尾根に沿う様に、南西～北東方向に向かって検出された（図35）。整地土層に伴う遺構については、最上層となる第8層上面からもその下層の第9層上面からも検出されなかった。ただし第10層上面と第12層上面でピット・土坑を検出する事ができた。時期は出土した土器片から、いずれも13世紀後半～14世紀前半と考えられる（図36）。

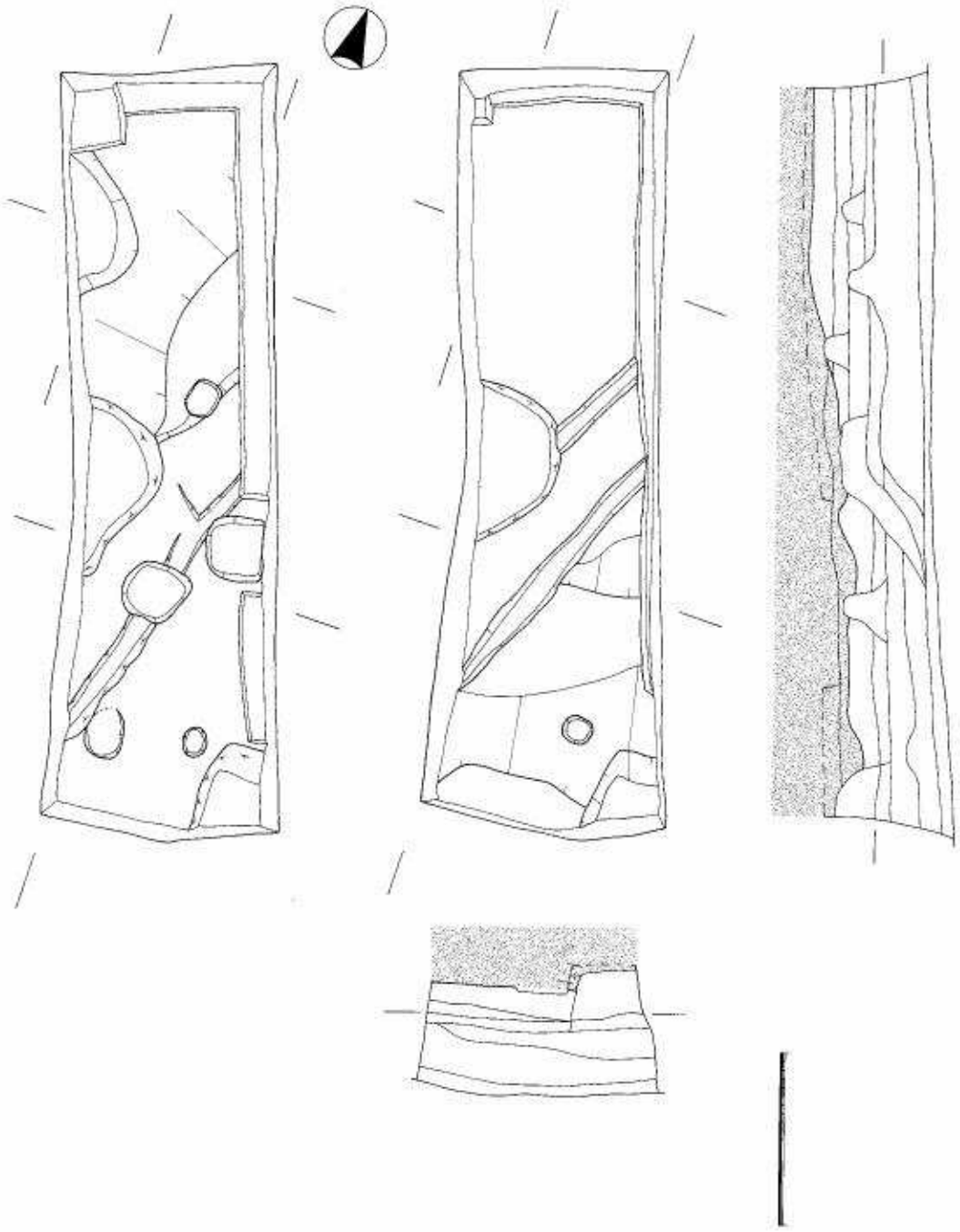


図35　第10・12層上面・断面実測図（S＝1/80）

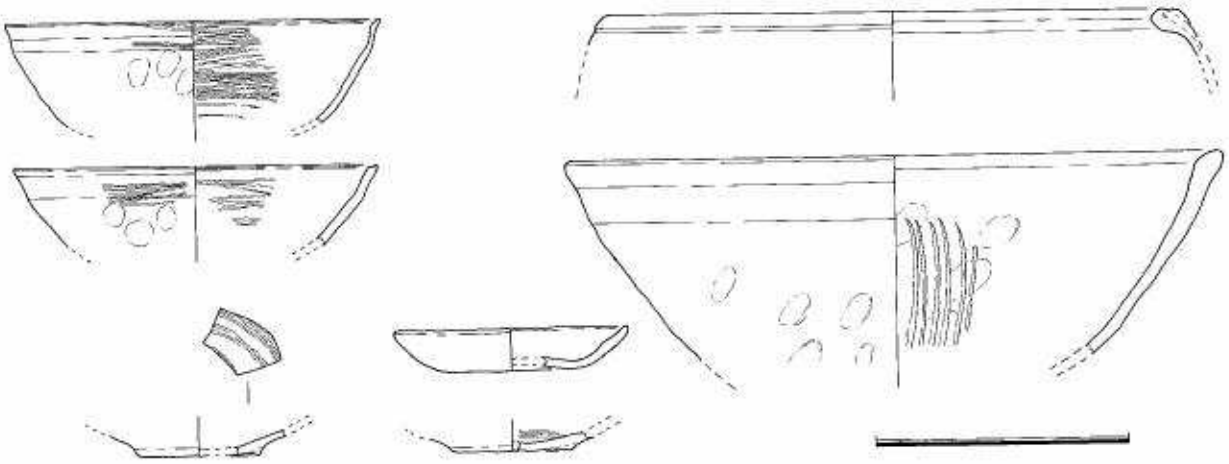


図36　整地層内出土遺物実測図（S＝1/3）

（1）　第10層上面

**ピット1・2**　　それぞれ径約40cmで、ピット1は深さ約50cm、ピット2は深さ約30cmを測る。これらは埋土が黄褐色中粒砂と褐色シルトのブロック層と共通している事と整地土層と同じく尾根に沿う方向に並ぶ可能性が高い事から同時に造られたものと考えられ、杭列跡又は建物跡を構成する柱跡と考えられる。

**土坑1**　　検出長約1.1m×約80cmの長方形と考えられる土坑で、深さは約70cmである。断面では柱痕が確認できたが、土坑自体1基しか確認できなかったので建物跡になるとしても規模等は不明である。

（2）第12層上面

**土坑2～5**　　土坑2は一辺約70cmの正方形で、深さは約20cmを測る。土坑3は径約50cm、深さは約15～20cmで、底面が北にやや傾斜している。土坑4は一辺約60cmの菱形に近い形で、深さは約25cmとなる。

**ピット3**　　ピット3は径約30～40cmの楕円形を呈し、深さは約10cmを測る。いずれの土坑も各々の間隔や方向性にやや規則性が欠けるため、関連する遺構になるかどうかは不明である。

## 4．まとめ

調査地東側に位置する箕倉山には中世城郭があると言われており、今回検出した整地土層は、調査地点が近い事や遺構の時期を考慮すると、城郭に伴う何らかの遺構になる可能性が考えられる。ただし城郭関連遺構になるとしても、整地土層上などで検出した個々の遺構が建物になるのか整地の際の工事に伴うものなのかは不明であり、具体的にどのような施設になるのかの推測は、現段階では困難である。箕倉山周辺は調査回数もまだ少なく、今後の調査により、今回確定できなかった遺構の内容や整地土層の平面的な拡がりを追認できることが期待される。　　（松宮）

【註】

1）高橋健自・西崎辰之助　1920「三輪町馬場山の神古墳」『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第7回　奈良県

2）松宮昌樹　1998「馬場山の神遺跡第1次調査」『平成10年度国庫補助による発掘調査報告』桜井市教育委員会
なおこの調査は今回の第3次調査を行うにあたり、箕倉山遺跡第2次調査に名称が変更となっている。

# 第６節　大藤原京関連遺跡第41次発掘調査報告

## 1．はじめに

大藤原京関連遺跡第41次調査は、桜井市西之宮128番地１他の住宅建設に伴い、平成14年11月27日から29日にかけて発掘調査を実施した。調査位置は、従来の藤原京の北限とされていた横大路と、近鉄大阪線の線路との間の市道に面した南側で、周辺は近年の開発行為によって発掘調査を次々と実施している場所である。

近鉄大阪線の線路の北側には、今まで何回も大藤原京関連の道路遺構が検出されているが、南側は今までの調査では未検出の状況である。いずれも、中世土層の下にニコ土が検出され、中世水田造成時に飛鳥以降の土層が削り取られたと推定される。

## 2．調査の成果

東西方向に、幅２m、長さ10mのトレンチを設定して掘り下げた。上から耕作土層・灰色土層・淡灰色粘土層・淡褐色粘土層で、最下層は暗褐色粘土層であった。黒斑混じりの粘土層で遺物は無く、黒灰色の瓦粘土と呼ばれる土層と比べると、黒色が薄い特徴があった。従来見られた暗灰色の素堀溝も、今回の調査では認められなかった。淡褐色粘土層中から、中世の土師器片・瓦器片が少量出土したが、その下層から須恵器高坏脚の破片が１点出ている。上層の淡灰色粘土層中から、完形の土師皿が１点出土している。トレンチの設定場所付近では予想できたものの、従来どおり飛鳥時代の土層や道路遺構は確認できなかった。

## 3．出土遺物

**須恵器高坏**（図40－1）　脚径13.5cm、高さ６cm以上。方形透かしが入り、端部はシャープな作り。色調は青灰色で、内外面撫で仕上げ。５世紀末。

**須恵器壷**（図40－2）　口縁部がわずかに玉縁化した壷で、口径21cm、高さ５cm以上。内外面淡黒灰色の自然釉がつく。６～７世紀頃か？

**高坏**（図40－4）　土師器高坏の７世紀代のもの。暗褐色で、柔らかい。坏の肩部分の径８cm。

**土師皿**（図40）　（６）は端部が内へ折れこむ形式。口径20cm、高さ2.5cm以上。暗褐色の色調をとる。今回唯一の藤原京期の遺物だった。（７）は直径8.4cm、高さ1.6cm。口縁がわずかに立ち上がる形式。色調は淡褐色で、内外面撫で仕上げ。底部はヘラ切り技法。内面にすす付着。16～18世紀頃か？

## 4．まとめ

わずかな面積しか調査できなかったが、予想どおり中世以前の土層が削られていた。横大路あたりから北に広がっていた台地が、水田耕作のため北の低地に客土されたものであろう。今回の結果からだけでは、この地域が大藤原京内の賑わいの内にあったとは想像が難しいが、京内がずいぶん凹凸の

ある地形状にあったことが推定される。

41回目の調査だが、いつかはこの地域で横大路や中津道道路を完全に掘り出したい。　（清水眞一）

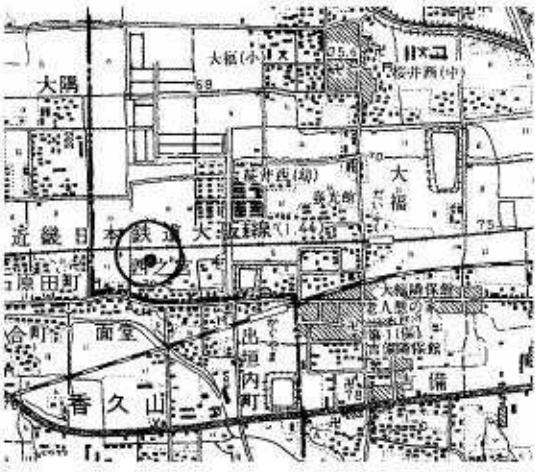



図37　発掘調査位置図（S＝1/25000）

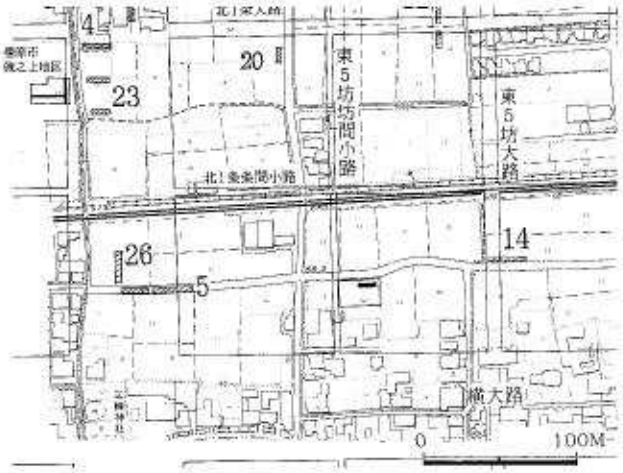



図38　トレンチ位置図（S＝1/5000）

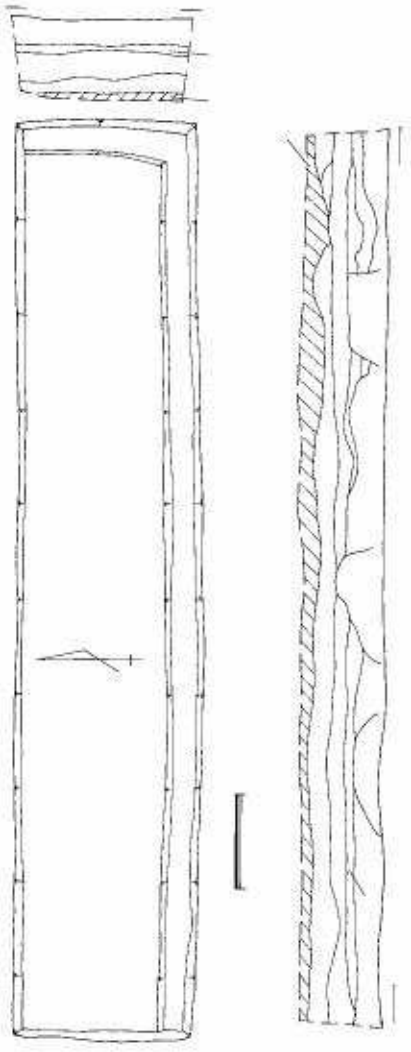


図39　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）

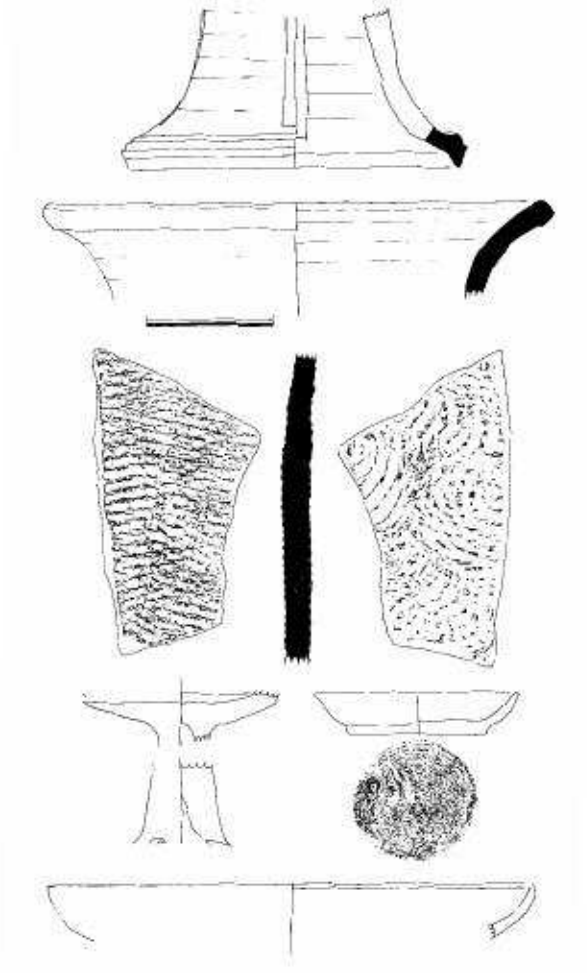


図40　出土遺物実測図（S＝1/3）

# 第７節　谷遺跡第17次発掘調査報告

## 1．はじめに

谷遺跡第17次調査は個人住宅建築に伴う発掘調査である。調査地は遺跡範囲の南端部分となる、桜井市安倍木材団地１丁目14番地５に所在する。調査トレンチは32×２ｍの64㎡の面積を、南北に長く申請範囲の南東寄りに設定した。現地調査の期間は平成14年12月25日～１月24日である。

調査の方法は、旧耕作土層についてはバックホーで掘削・除去し、それ以下からは整地土層と思われる土層が検出されたため人力掘削で行った。またトレンチの南側から約15mについては整地土層下層の調査を行ったが、掘削にあたっては本来人力で行う所を日程の都合上バックホーを用いて掘り下げを行った。なおその際は排土を点検して遺物の採集に努めた。

これまでの周辺の調査では、６～７世紀にかけての玉造関連遺物[1]やガラス工房関連遺物[2]、鍛冶関連遺物[3-5]が出土しており、遺跡が立地する丘陵の緩斜面には各種工房跡群があった事が推測される。

## 2．基本層序

東側に隣接する第14次調査地区では６世紀代の遺物を含む整地土層が確認されているが、今回も各々厚みと遺物の量は異なるものの同様の土層が確認された（図42）。G.L.－約80cmからG.L.－約1.3mまでの第12・13・29～34層が整地土層となる。 整地土層は大きく上・中・下の３層に大別ができ、上層は第12・13層、中層は第29～32層、下層は第33・34層となる。上・中層は比較的土器片・礫が多くシルト質であり、下層は少量だが包含される土器の破片が大きく砂質であった。またそれぞれの整地土層内には炭・焼土が多量に混じり、部分的には密集している部分もあったが遺構にはならず整地土層の

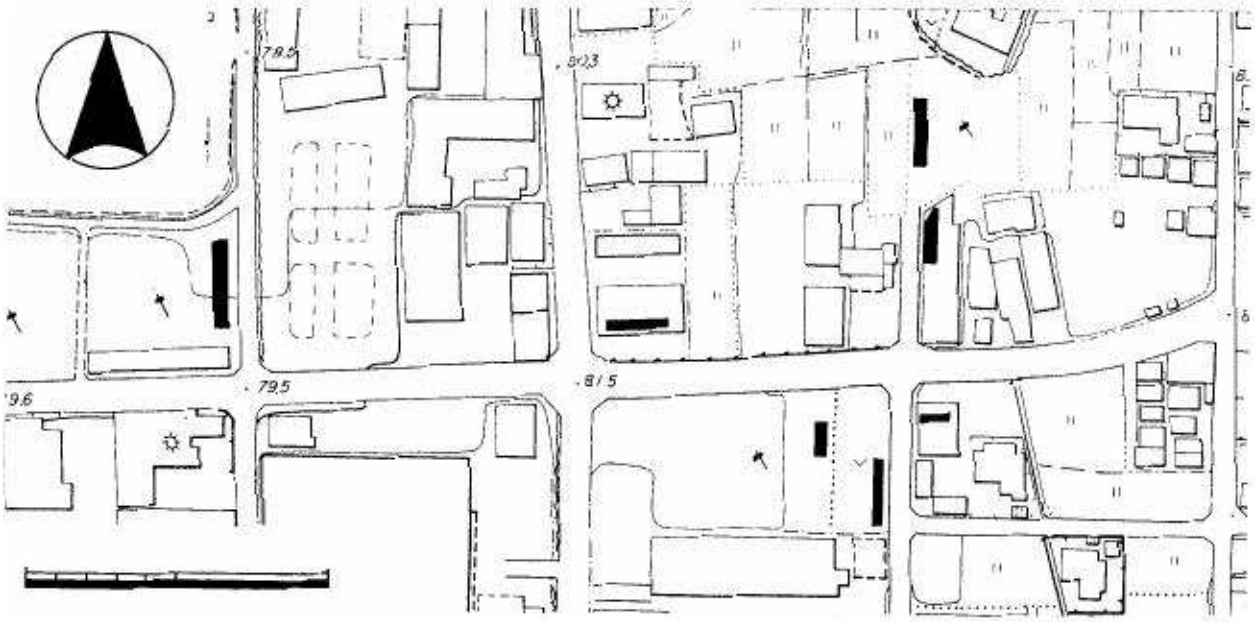



図41　谷遺跡第17次発掘調査位置と周辺の調査（S＝1/2500）

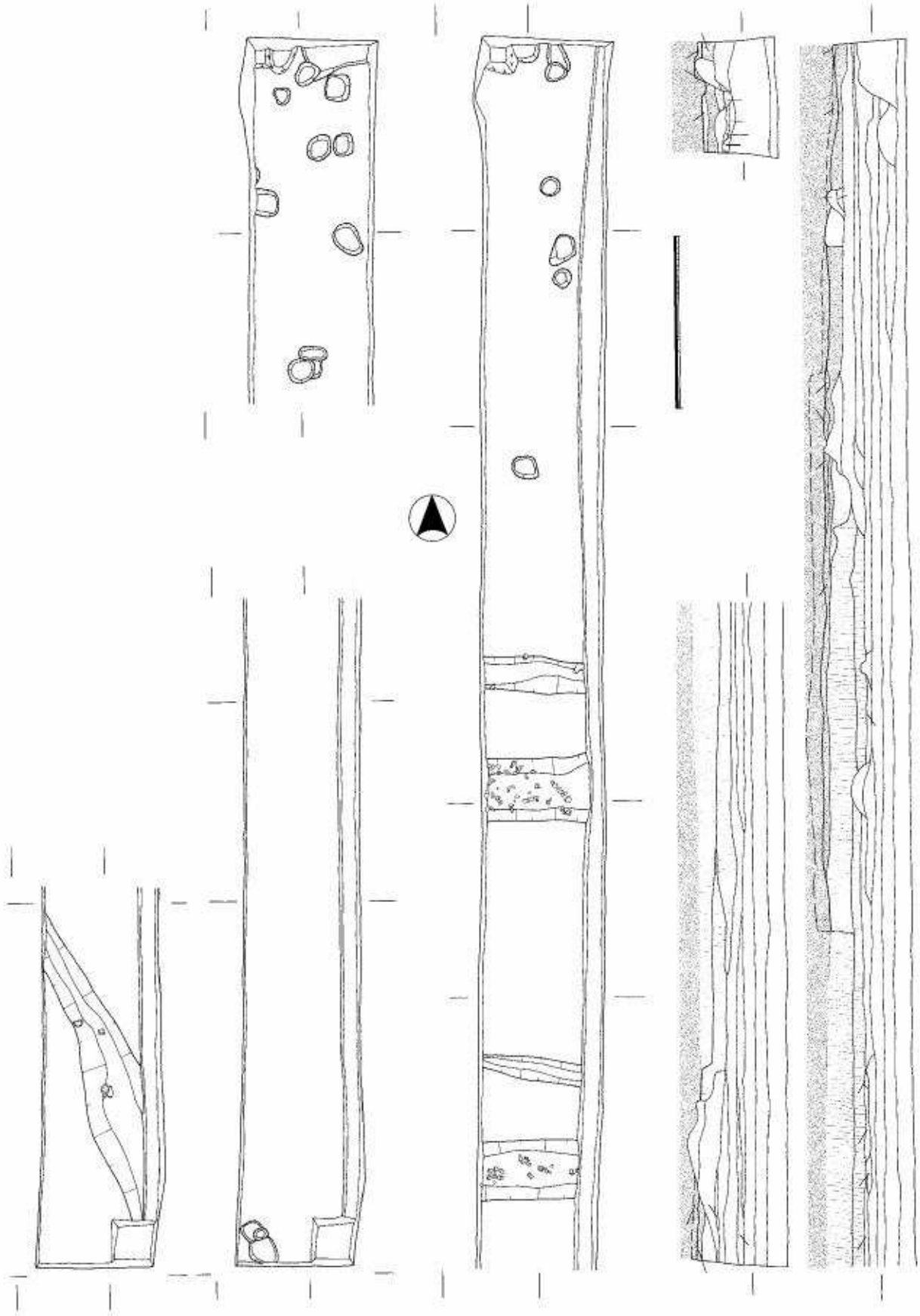


図42　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/100）

一部を構成する土であった。

第36層以下は自然堆積層(地山)となるが、今回の調査地区では花崗岩風化土層は確認できなかった。

## 3. 検出した遺構・遺物の概要

整地土層の上～下層各上面からは、溝計6条、ピット計22基を検出することができた。また各層からは多量の須恵器・土師器が出土したが（図44)、これらの層からは特殊遺物としてフイゴの羽口片（図45）も多数出土している。これは第14次調査でも同様であった。中には完形に近い羽口片や高坏を転用した羽口も出土している。(図45－41・50)。時期は上層遺物は7世紀前半、中～下層は図化できなかった小片を考慮に入れた結果、6世紀後半と考えられる。

### （1） 整地土層上層上面

**溝1～4**　上層である第13層上面からは溝1～4を検出した。

東西方向に走る溝1・2はそれぞれ幅約1.1m、深さ約15cmと、幅約1m、深さ約20cmを測り、規模が類似している。また溝埋土内からは拳大の円礫が多量に出土する共通点も見られ、同時期の区画溝などの、互いに関連ある遺構と考えられる。

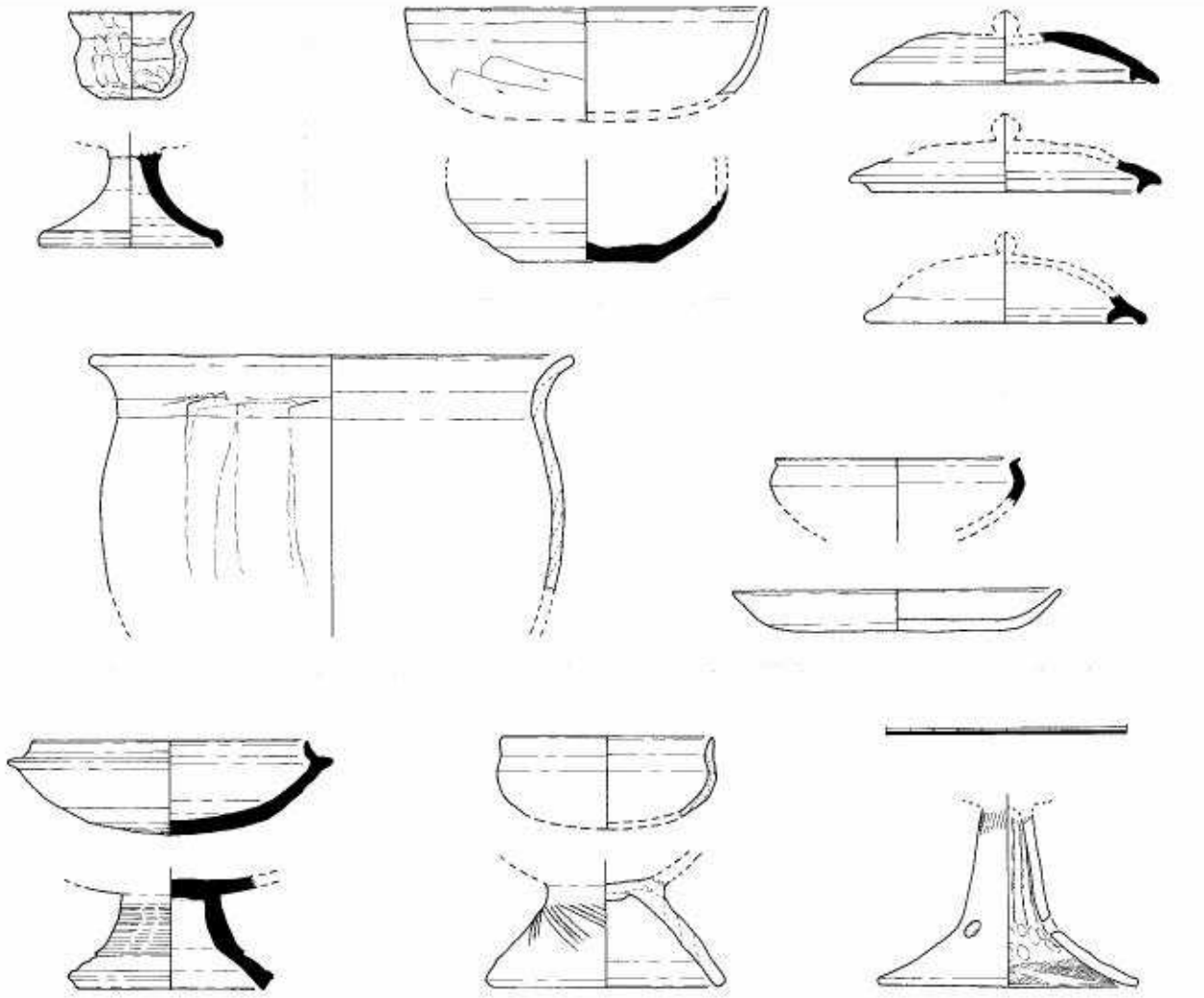


図43　溝1・2・4・5出土遺物実測図（S＝1/3）

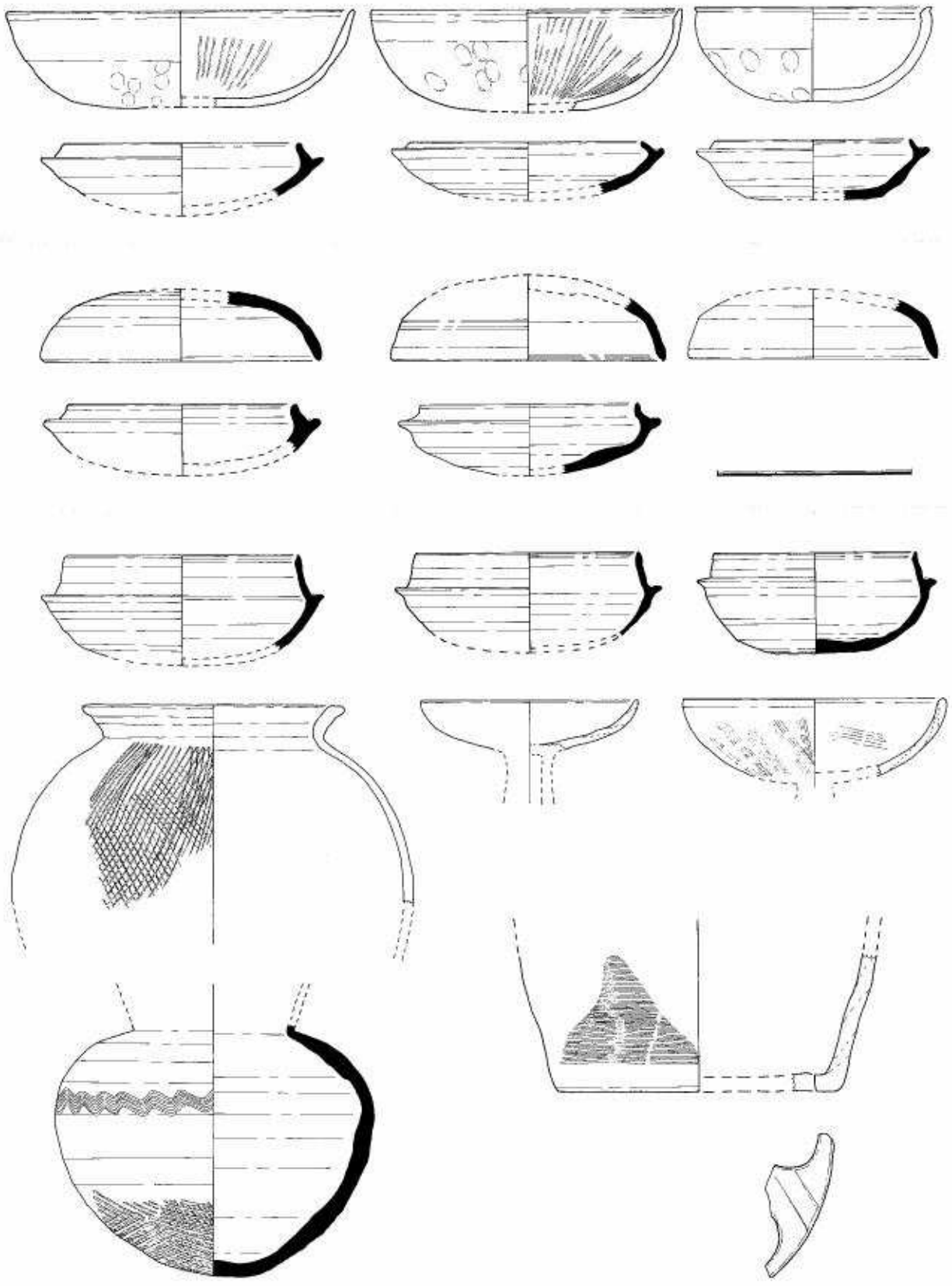


図44　整地層上～下層出土土器実測図（S＝1/3）

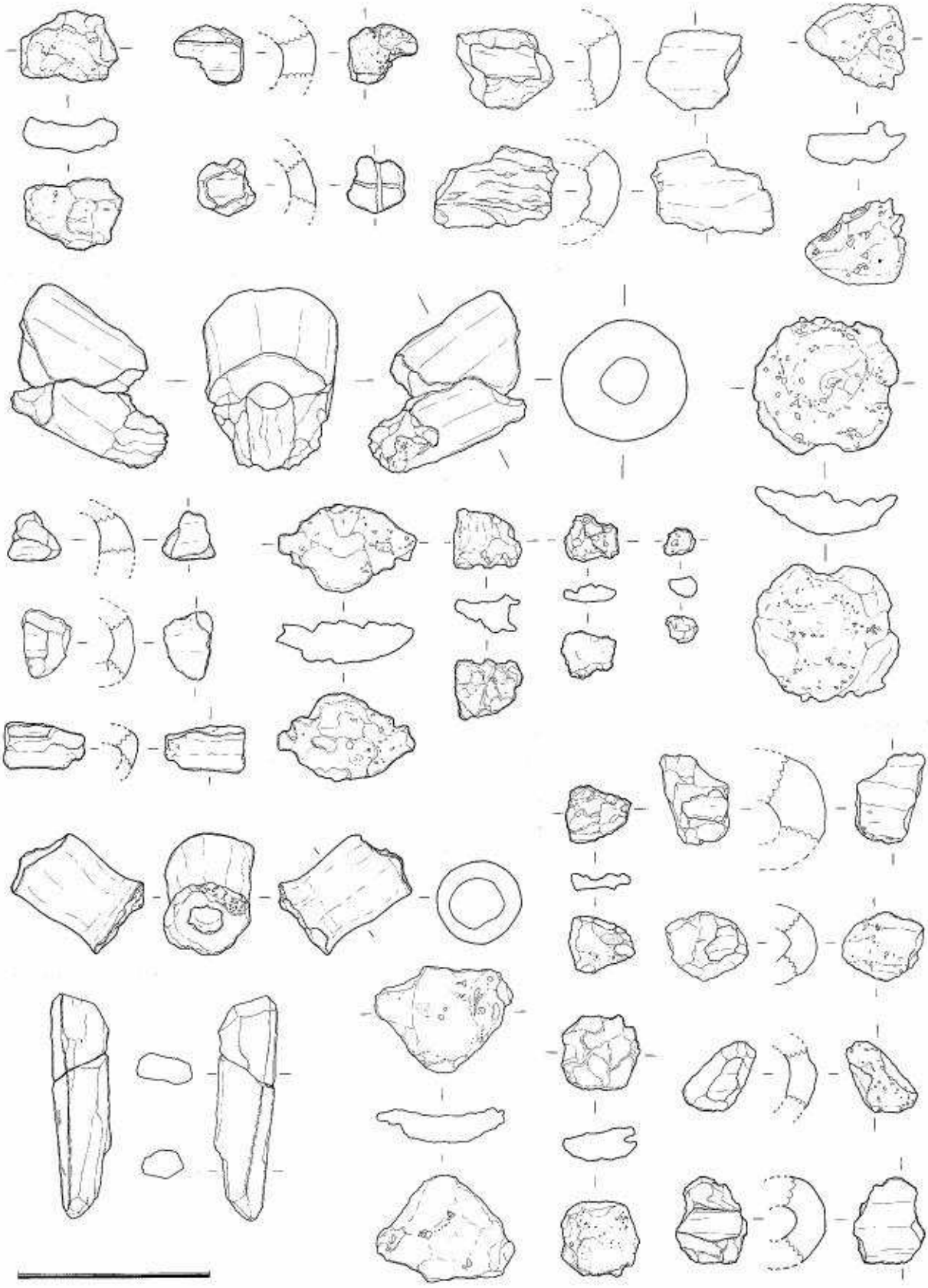


図45　整地層出土鉄滓およびフイゴ羽口実測図（S=1/3）

溝３・４は、溝１・２のそれぞれ南側約１ｍと同じ距離で検出されており、溝１・２と同時期若しくは若干前後する時期の遺構と考えられる。溝３は幅約40cm、深さ約５cm、溝４は幅約60cm、深さ約20cmを測る。埋土は明るい黄褐色シルトで自然堆積ではなく、人工的に埋められた可能性が高い。溝からはいずれも７世紀中ごろの遺物が最も新しい遺物として出土している（図43－１～10）が、出土量が少ない事と整地土層内の遺物が混入している事から、溝の時期はさらに下る可能性が残っている。

**ピット１～10**　ピットは溝１～４の内側からは確認されなかったが、トレンチの両端付近で計10基検出することができた。径は約30cmと約40～50cmのものがあり、深さは約10cm前後から約60cm前後のものまで確認する事ができた。

（２）整地土層中層上面

**溝５**　溝５はトレンチの北側で検出した、上層である第13層を除去した中層上面から検出した遺構である。北西～南東方向に掘削されたもので、幅約60cm～1.2m、深さ約60cmを測る。溝内の上層からは完形となる須恵器坏身などが出土しており（図43－11）、時期は６世紀後半である。

**溝６**　トレンチ南側で検出された溝で、北東から南西に走る幅約１m、深さ約65cmを測る。

（３）整地土層下層上面

**ピット11～22**　ピットは自然堆積層第36層上面で検出を行ない、トレンチ南側から約６ｍまでの間で確認できた。なお断面観察から整地土層下層上面である第33層から掘り込む遺構になる事を確認している。平面形は楕円や不整円で、径はいずれも約40～50cm、深さは約10～20cmを測る。トレンチが狭く面的でないため掘立柱建物もしくは杭列になるかどうかは不明である。遺物は出土しているものの、細片ばかりで時期が確定できる個体は見受けられなかった。

## ４．まとめ

今回の調査では、トレンチの全面で耕作土層直下から整地土層が検出され、その上面から掘り込まれる溝・ピットが検出された。整地が行われた時期は、出土土器から６世紀後半～７世紀前半までと考えられる。また整地土層から第14次調査でも出土している鍛冶関連遺物が出土した事が特徴的であり、土層内に混入していた炭片・焼土などから、調査地周辺には鍛冶工房が存在していた可能性が高いと考えられる。（松宮）

【註】


1）清水眞一　1994『桜井市内埋蔵文化財1992年度発掘調査報告書２』－谷遺跡第５次調査－（財）桜井市文化財協会
2）清水眞一　1991「谷遺跡発掘調査概要」『桜井市内埋蔵文化財1990年度発掘調査報告書２』（財）桜井市文化財協会
3）関川尚功　1982「桜井市阿部六ノ坪遺跡発掘調査概報」『1982年度奈良県発掘調査概報（第一分冊）』奈良県立橿原考古研究所
4）松宮昌樹　2000「谷遺跡第14次調査報告」『平成11年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会
5）清水眞一　1994「谷遺跡第６次の発掘調査」『桜井市埋蔵文化財1993年度発掘調査報告書』（財）桜井市文化財協会

# 第８節　纒向遺跡第133次発掘調査報告

## 1．はじめに

纒向遺跡第133次調査は、桜井市大字巻野内101番地における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査区は、対象地内の北端に東西７ｍ×南北３ｍ、面積21㎡のトレンチを設定した。調査期間は、平成15年１月22日～30日、実働日数は６日間であった。

## 2．位置と環境

纒向遺跡は、三輪山北麓から西に広がる纒向川扇状地に立地している。特に古墳時代前期初頭には、箸墓古墳に代表される発生期の前方後円墳群や東西2.0㎞、南北1.5㎞の広範囲にわたる大集落が形成され、初期ヤマト政権の最初の都宮として推定される遺跡である。

調査地は、標高84m前後の扇状地扇央部の緩斜面地であるが、現況は水田として利用されており、階段状に地形が改変されている。調査地より南西約100mの地点には巻野内石塚古墳が位置し、その南方には小川塚古墳、茶ノ木塚古墳などの小円墳が群在する。

調査地の所在する巻野内地区は、調査密度の疎らな地域であり、遺構の分布が点的に把握されるにとどまっている。既往の調査については、東方約50mの巻野内坂田地区（第42次調査）において、布留１式期の土器とともに鶏形埴輪や冠形埴輪、朝顔形埴輪が出土し、当時の葬送儀礼や王位継承儀礼との関連性が指摘されている[1]。巻野内石塚古墳隣接地の調査（第127次調査）では、古墳時代中期の落ち込みが検出されたほか[2]、西方約150mの第86次調査では、庄内期の土坑からＶ様式系甕とその中に据え置かれた小型壺などが出土している[3]。

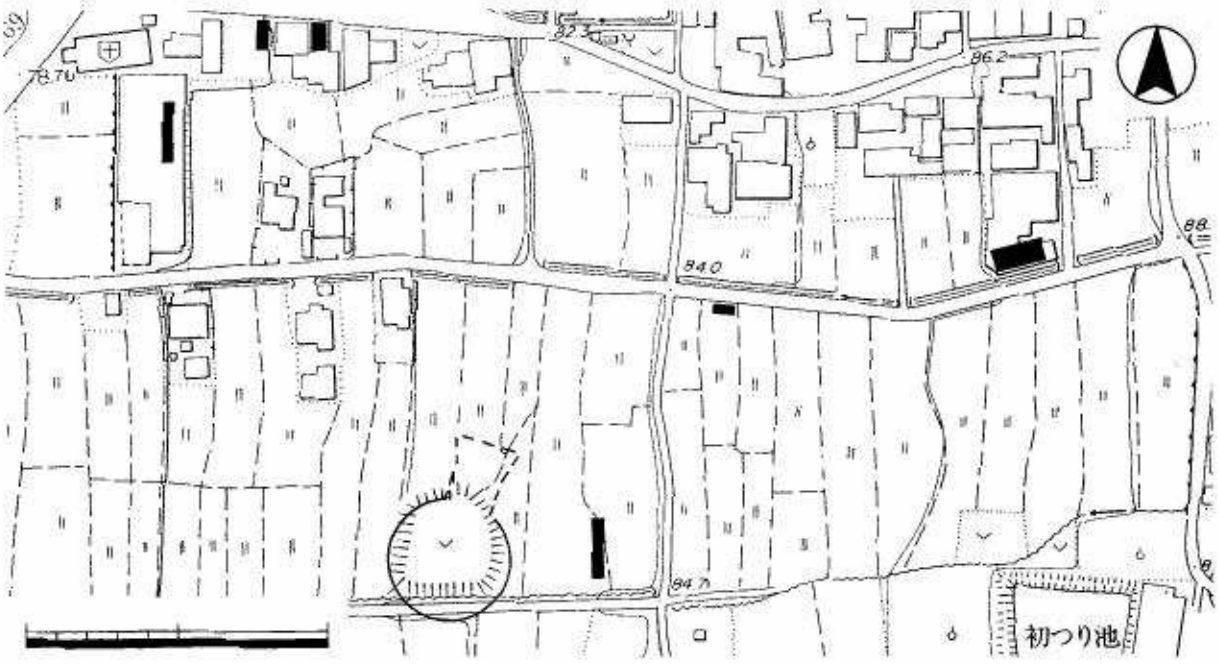



図46　纒向遺跡第133次発掘調査位置図（S＝1/2500）

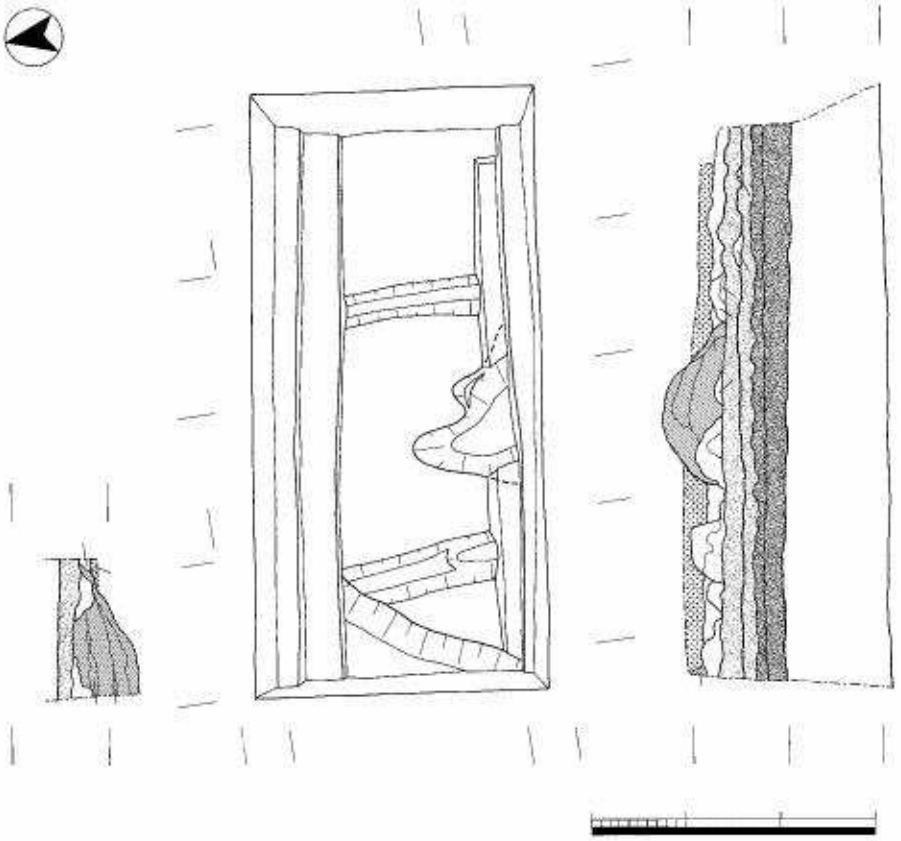


図47　トレンチ平面・断面実測図（S=1/80）

## 3. 基本層序

調査地は、宅地造成のため約１mの盛土（０層）がなされ、それより下位の土層は、水田耕土および床土（１～３層）、旧耕土（５層）、地山に相当する扇状地堆積物（22・23層）から構成される。旧耕土層は地山層と直に接しており、本来存在していた旧表土層は、後世の農耕活動に伴い完全に欠損している。土層の特徴は、以下の通りである（図47）。

１～３層は、宅地造成以前の水田耕土および床土で、暗緑灰色極細粒砂～シルトと砂礫混じり極細粒砂～シルト、および砂混じり緑灰色極細粒砂～粘質シルトからなり、層厚は約50cmを測る。

５層の旧耕土は、灰色砂混じり粘質シルトからなり、層厚約20cmを測っている。遺物は出土していないものの、開発の時期については中近世段階と考えられる。

22・23層は、扇状地堆積物であり、当地の地形基盤となっている。22層が若干砂礫を含む黄褐色粘土、23層が褐色砂礫混じり粘質シルトで、掘削時には滲み出すように湧水がみられた。

## 4. 検出遺構

今回の調査では、旧耕土層の５層を除去し、地山相当の22層の上面において遺構検出を実施した。遺構は、中近世段階と考えられる素掘溝３条と溝２条（溝１・２）を検出している。（図47・図版28・29）

溝１・２は、ともに溝壁の勾配がきつく、深鉢形の断面形状を呈す。

溝１は、調査区西端を南西～北東方向に貫流し、現状で最大幅90cm、深さ70cmを測る。埋土は、黒褐色粘質シルト～黒色粘土（上層）・黄灰色粘質シルト（中層）・灰色粘土～灰色粘土ブロックを含む黄灰色粘土（下層）から構成される。下層は色調が淡く、土質の軟弱な粘土層を主体とし、部分的には灰色粗～中粒砂の薄層が認められることから、溝の機能時には常時滞水した状態にあり、一時的な流水もあったことが伺える。中層・黄灰色粘質シルト層中から、古式土師器片が３点出土している。

溝２は、溝１とは繋がらずに検出長1.2m程で不正形に収束している。調査区より南東方向へ延びるものと考えられ、現状では最大幅1.0m、深さ60cmを測っている。埋土は、上層より暗褐色砂混じり粘土・黒褐色粘土・灰色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色礫～砂混じりシルトからなる。埋土の様相が溝１と近似していることから、溝１・２は同時に機能していた可能性が高い。

## 5. 出土遺物

溝１の中層・黄灰色粘質シルト層中から、古式土師器片が３点出土している（図48－1・図版29－１～3）[4]。（１）は、弥生形甕の底部であり、突出しない平底のもので、体部は球形を呈すると推定される。調整は外面にタタキ、内面に板状の工具によるケズリＢを用いている。（２）は、東海系甕の体部片である。色調は乳白色を呈し、外面に櫛状の工具によるスリナデⅡが施されている。（３）は、摩滅のため器種・調整等は不明であった。これらの土器の年代については、概ね庄内式期後半から布留式期前半の中に収まるものと考えられる。

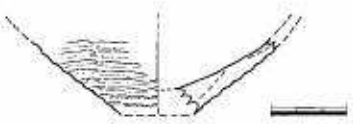


図48　溝１出土遺物実測図（S＝1/3）

## 6. まとめ

今回の調査では、庄内式期後半～布留式期前半に埋没したと考えられる溝２条を確認した。調査面積の制約から、これらの溝の機能や性格、掘削時期については不明瞭であるが、当該期の遺構の分布範囲を把握する上で一定の成果が得られたといえる。（清水哲）

【註】

1）清水眞一　1992「磯城・磐余の夜明け－ニワトリ形埴輪の持つ意義－」（財）桜井市文化財協会

2）橋本輝彦　2002「纒向遺跡第127次発掘調査報告」『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

3）橋本輝彦　1996「纒向遺跡第86次発掘調査報告」『平成７年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市教育委員会

4）寺沢薫編　1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所
以下、本報告における土器の調整技法・編年観はこれに準拠する。

# 第９節　纒向遺跡第134次発掘調査報告

## 1．はじめに

纒向遺跡第134次調査は桜井市大字太田168番地１において、個人住宅の建設に先立って実施された。調査地はJR巻向駅の西側約200mの畑作地で、古墳時代前期の大規模な集落遺跡と考えられる纒向遺跡のほぼ中央に位置している。調査地のある太田集落周辺は、概ね東側から西側へと緩やかに傾斜する地形を示しており、東西に長い帯状の微低地・微高地が連続している状況がみとめられる。このうち太田集落の北半部を含んでいる太田北微高地において行われた調査（県営纒向団地の調査・20次調査など[1]）では、多数の土壙や庄内式期の時期が考えられる掘立柱建物群の存在が確認された。今回の調査地は、この太田北微高地から太田微低地を挟んですぐ南側に位置し、太田微高地の北端部にあたる。この太田微高地は以前より居住域の存在が想定されてきた地域であり、今回の調査地においても古墳時代前期に属する遺構が確認されることが想定された。なお、調査は平成15年２月６日から３月10日にかけて実施した。調査面積は40㎡である。

## 2．基本層序

調査地における層序は、以下のように５層に大別される。

第Ⅰ層　　現代～近世耕作土層　　黒褐色シルト～極細粒砂

第Ⅱ層　　近世整地層　　褐色シルト～極細粒砂

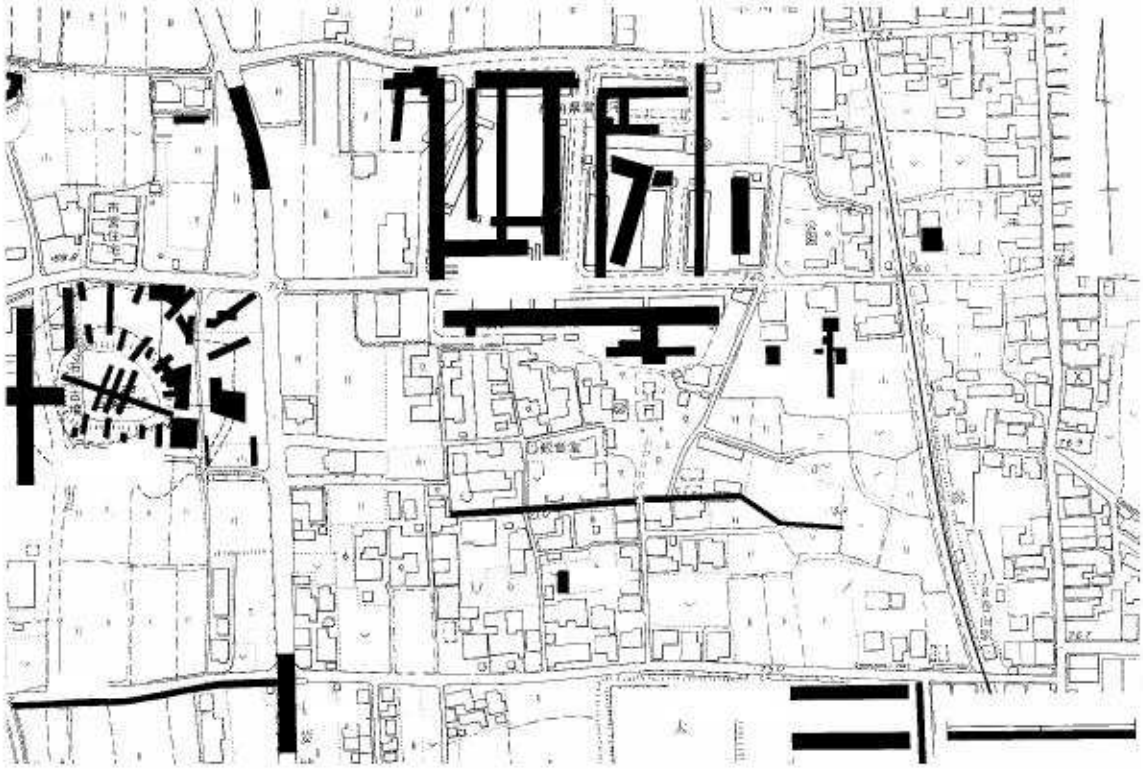


図49　纒向遺跡第134次発掘調査位置図（S＝1/4000）

| | | |
|---|---|---|
| 第Ⅲ層 | 地山 | 黒色粘土～シルト |
| 第Ⅳ層 | 地山 | 褐灰色シルト～中粒砂 |
| 第Ⅴ層 | 地山 | 黄褐色シルト～極細粒砂 |

調査地は最近まで畑地として使用されていたこともあり、地表下40～50cmにかけては耕作土である黒褐色土が厚く堆積していた（第Ⅰ層、図50－1～3層）。耕作土の下層には褐色土の薄い堆積がみとめられ（第Ⅱ層、図50－6層）、さらにその下層には遺構面を形成する黒色粘土層がひろがっていた（第Ⅲ層、図50－24層）。第Ⅱ層には古式土師器片とともに陶器類の小片が含まれることから、近世以降の整地土である可能性が考えられる。第Ⅲ層は30～40cm程度の厚さで堆積し、その下に続く第Ⅳ層（褐灰色砂質土、図50－25）及び第Ⅴ層（黄褐色砂質土、図50－26）とともに地山を形成している。

## 3．検出遺構

**検出遺構の概要**　調査区北半部においては、切り合い関係を見せる5基の土坑（土坑1～4・7）が西壁に沿う位置で確認され、東壁沿いでは方形に掘り込まれた土坑5が検出されている。調査区南半部では方形のピット1～3、調査区南西隅においては土坑6が検出された。このほか南北方向に走る

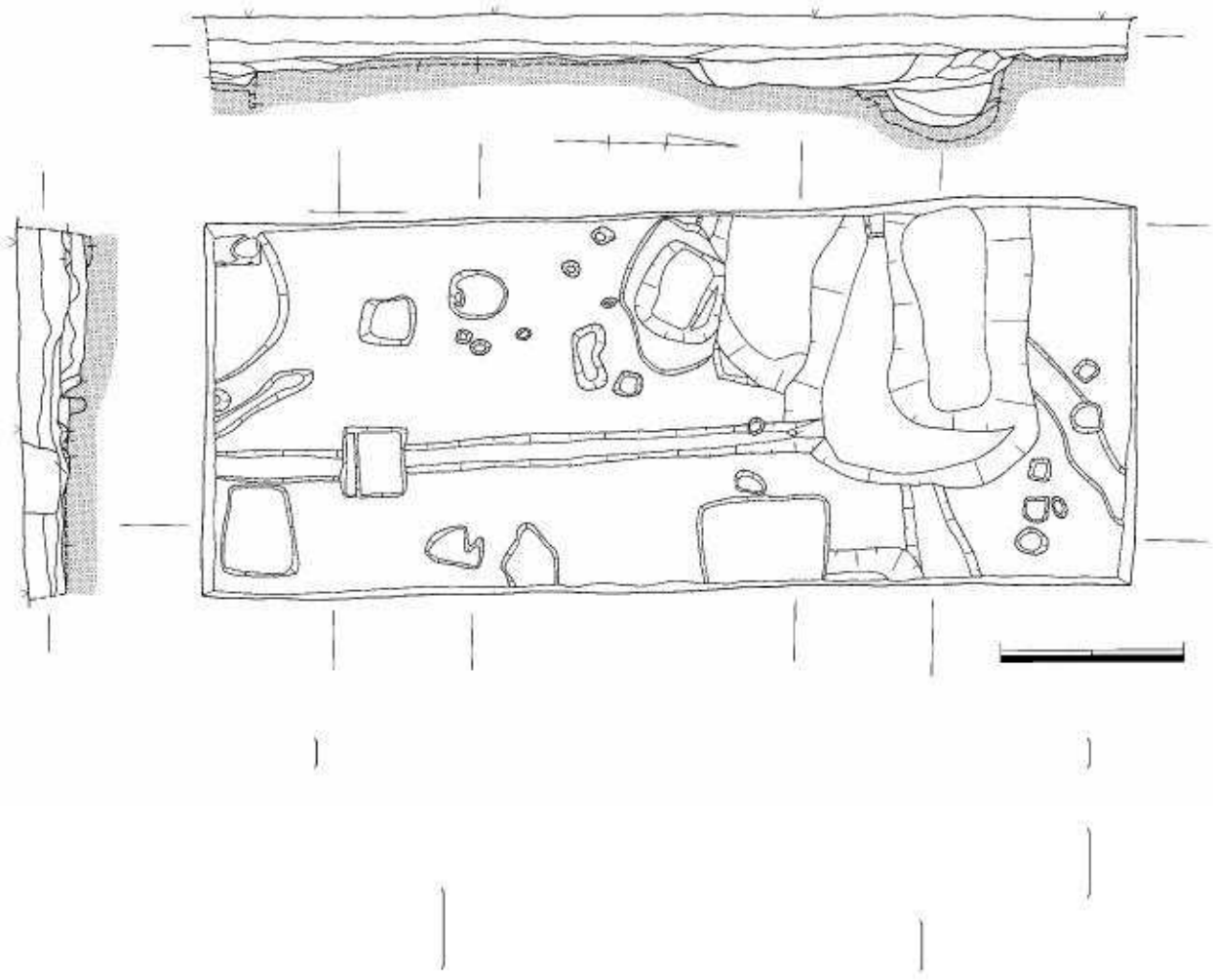


図50　トレンチ平面・断面実測図（S＝1/80）

溝１、複数の小規模なピット等が確認されている（図50）。

これらの遺構のうち３mを超える大型の土坑である土坑１・２・４及び土坑５、ピット２・３については、埋土に瓦片や陶器片が含まれており近世以降の時期を与えることができる。溝１や小規模なピット群についても同様の陶器片等を含むものが多く、大半の遺構が近世以降の時期のものと考えられる。一方で調査区中央西側において確認された土坑３からは、後述するように布留式期の土師器が出土している。調査区南端付近で検出された土坑６とピット１については、近世遺物は含まれず土師器の小片のみが検出されていることから、土坑３と同様に古墳時代前期まで遡る可能性がある。なお、土坑２・４からは近世の遺物とともに庄内式期～布留式期の土師器片が出土している。

**土坑３**（図51）　　調査区中央付近の西壁寄りの位置で検出された。検出面では長径約160cm、短径約110cmの東西に長い長円形の平面形態が確認され、その中央を一辺60cm～100cm程度の方形に近い形状に深く掘り下げている。検出面からの深さは約95cmで、底部は50cm×80cm程度の長方形を呈している。埋土の上層は拳大の礫を含むオリーブ黒色の砂質土で、土師器の小片を含んでいた。中層は粘性を持つ黒色砂質土で、多くの土師器片と、石製品の破片１点が検出されている。下層は地山起源の黄褐色～褐灰色の砂層で、後述のように礫が充填されていた。なお底部付近は湧水が著しく、砂質土で構成される壁面が一部崩落している状況がみとめられた。

この土坑で特徴的なのは、底部に厚さ約30cmにわたって拳大以下の礫が充填されている点である。礫の上面は土坑北壁にある三角形のテラス状の段と面をそろえており、これにより不等辺五角形の平坦な面を形成している。この上面において土師器片が検出されており、礫の隙間

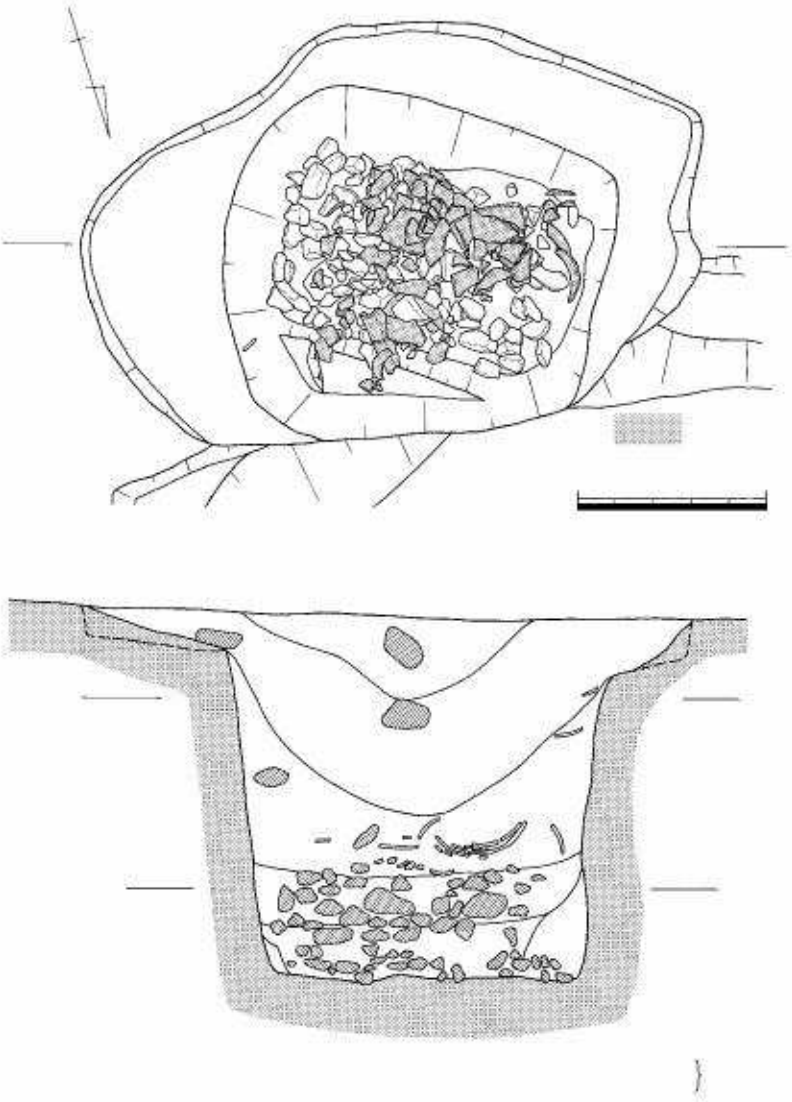


図51　土坑３平面・断面実測図（S＝1/20）

にも土師器の小片が多数含まれていた。このほか、土坑東側壁に沿う位置において長さ20cm程度の板状の木器片が検出されている。

## 4．出土遺物

**出土遺物の概要**　調査区の全体を覆っていた第Ⅰ層・第Ⅱ層及び土坑1・2・4・5などの埋土からは、近世以降の瓦・陶器片とともに庄内式期～布留式期に属すると考えられる土師器片が若干量出土している。土坑3では礫上面において多くの土師器片が検出されており、埋土からは土師器小片・石製品などが出土した。その他の遺構については第Ⅰ層・第Ⅱ層などと同様に近世遺物を出土するものが大半を占めている。

**土坑3出土土器**（図52～55）　土坑3から出土した土器の大半は、土坑底部に充填された礫の上面及び三角形のテラスの上面において検出されている。土器はいずれも土師器で小片が多く、完形に近い状態に復元できた個体はごく少数であった。特に礫の周辺では2cm以下の小片が多く検出されており、当初より破砕を意図していた可能性も考えられる。確認された器種は小形丸底壺、小形丸底鉢、広口壺、短頸壺、直口壺、甕などで、土器の総量はコンテナケースでおよそ1箱分である。以下では土坑3出土土器のうち、図化することができた71個体の形態的特徴と調整について記す。各個体の法量や色調等は別表において記している（表4）[21]。なお外来系のものと考えられる個体については図55に示した。

図52の(1)は小形丸底鉢で、内湾する体部と短い口縁部を有する。内外面ともヨコナデにより仕上げられている。(2)～(4)は小形丸底壺である。(2)は口縁部を欠く個体で、扁球形の体部を持つ。体部上半には細かいタテハケが施される。内面はナデにより仕上げられるが、板状工具によると思われる圧痕がみとめられた。(3)・(4)は小形丸底壺の口縁部片と考えられる。内外面ともにヨコ方向のミガキが施され、このうち(4)は肩部の張りが弱い体部形態が推定される。

(5)・(6)は二重口縁壺の口縁部片と考えられる個体である。(5)は外反する二重口縁部の端部を上方につまみあげる形態を示す。(6)はわずかに外反する二重口縁部を有し、その下端を垂下させている。口縁端部は丸くおさめられていた。

(7)～(11)は壺の口縁部片である。(7)・(11)は外反する口縁部を有し、内外面ともにヨコハケが施される。(8)・(10)は外反する口縁部で、内面にナナメ方向のハケメがみとめられ、(10)の外面にはタテハケが施されていた。(9)は直口壺で、口縁の外面にタテハケが薄く残存し、ヨコナデによるものと考えられる弱い沈線が数条みとめられる。また図54に示した口縁部小片のうち、(59)・(60)は外反する口縁を持つ壺の口縁端部と考えられる。

(12)～(14)は外反する口縁を持つ広口壺の口縁部である。(12)・(13)は口縁端部に面を有し、下方にわずかに肥厚させる。図53の(61)も同様の広口壺であると考えられる。(13)は内外面ともにハケメがみとめられる。(14)は口縁端部に明瞭な面を有し、上方と下方に肥厚させており、特に上方はつまみあげるような形状を示す。図54の(62)も類似する口縁形態を持つ広口壺であると考えられる。

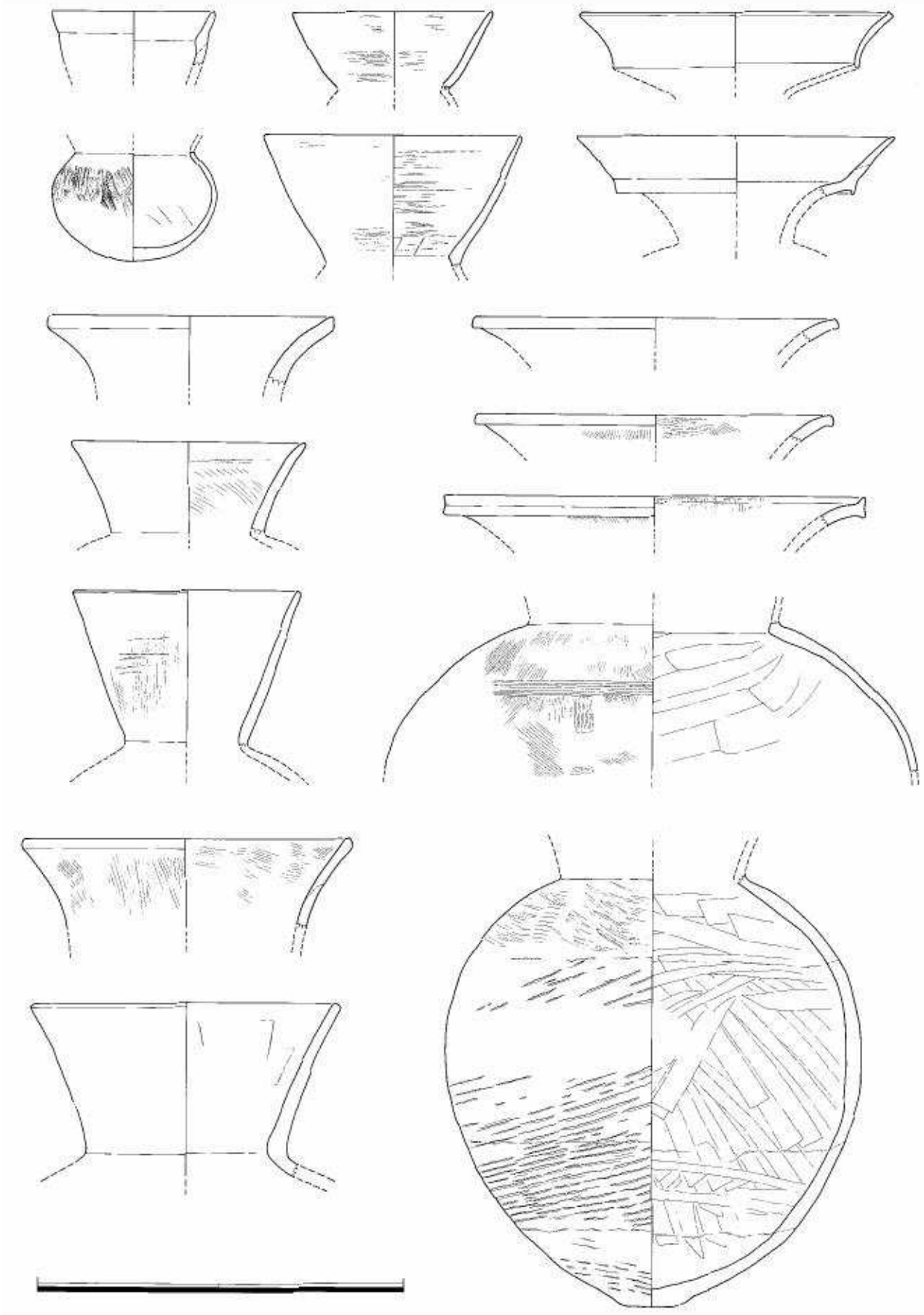


図52　土坑３出土土器実測図①（S＝1/3）

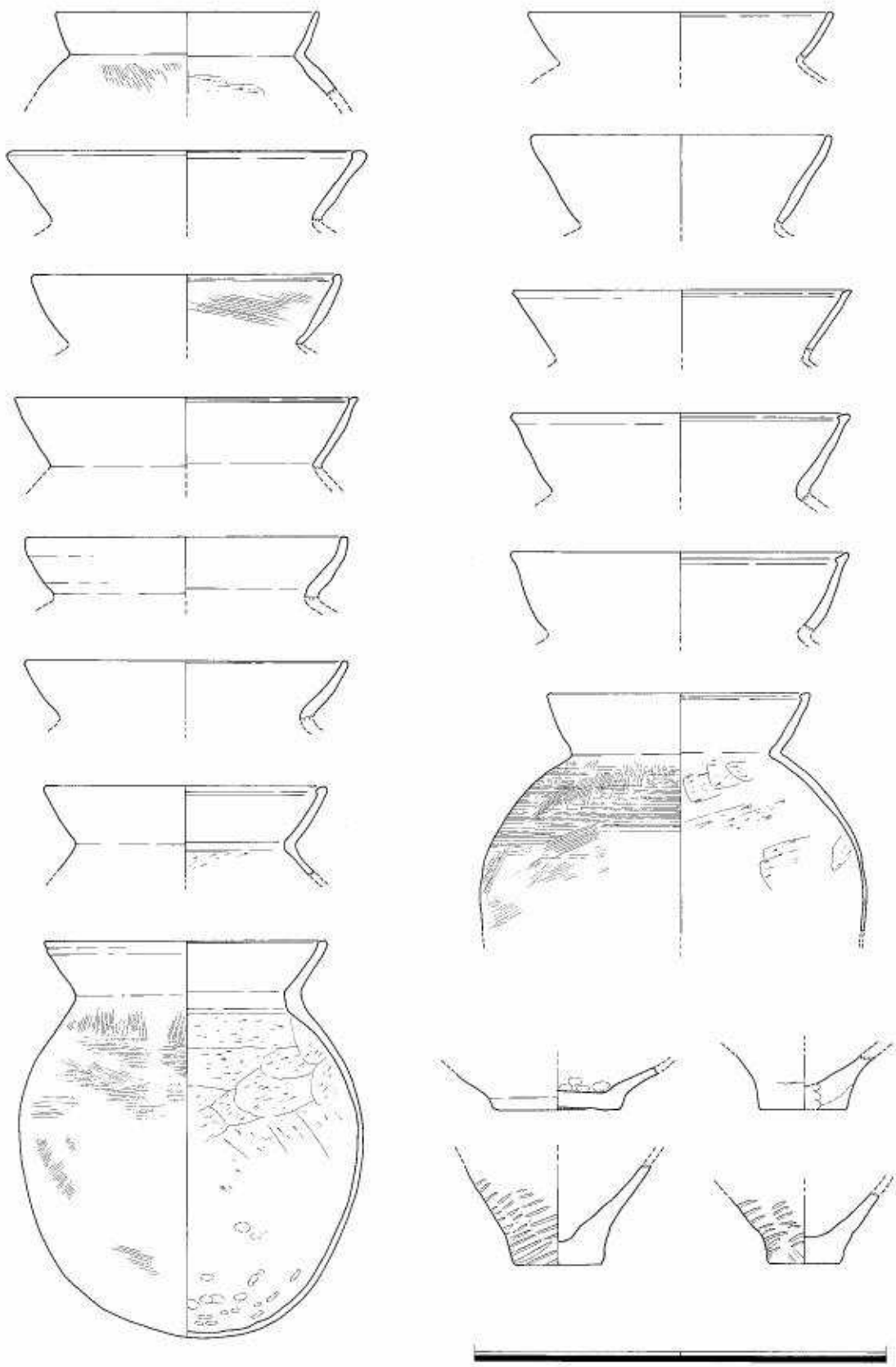


図53　土坑3出土土器実測図②（S＝1/3）

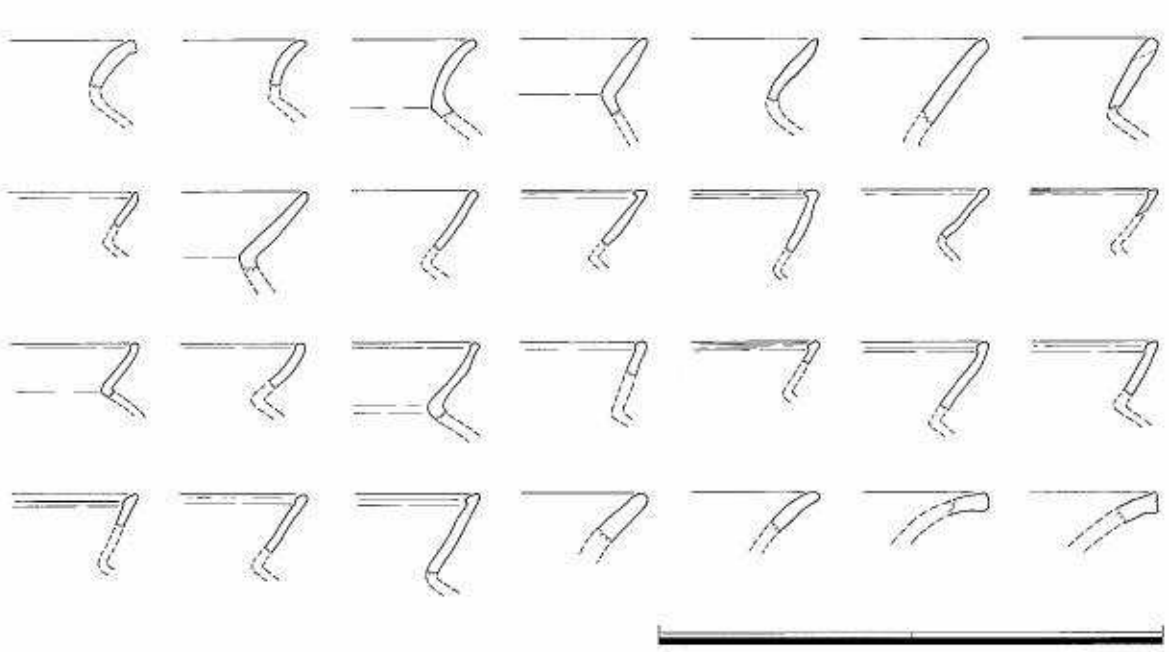


図54　土坑3出土土器実測図③（S＝1/3）

(15)は丸く張った肩部を持つ甕の体部である。頸部以上を欠いているため、口頸部の形態は不明である。体部の内面は粗いナデで仕上げられており、外面には主にタテハケが施され、肩部にヨコナデが巡らされていた。(16)は壷で、底部から体部の大半を復元することができた。頸部以上を欠いているため口頸部の形態は不明であり、体部は丸く張った肩部を持つ球形に近い形状を示す。底部はわずかに突出する平底を呈している。外面の肩部付近はミガキで仕上げられ、それ以下はタタキが施される。内面はナナメ方向のナデで仕上げられていた。

図53の(17)は、直線的に立ち上がる短い口縁部をもつ甕である。口縁端部は丸くおさめられ、肩部外面にはナナメ方向のハケメがみとめられる。体部の内面はヨコ方向のケズリが施され、それ以外の部分はヨコナデにより仕上げられていた。(18)～(28)はやや内湾する口縁部を持つ甕である。端部は(21)・(22)・(25)についてはほぼ丸くおさめられているが、その他はいずれも内面を肥厚させている。

(29)は丸く張った肩部と内湾する口縁を持つ甕である。口縁端部は内面に肥厚させており、肩部外面はヨコ及びタテ方向の細かいハケメで仕上げられる。体部の内面はナナメ方向のケズリが施されていた。(30)は、唯一完形に近い姿に復元できた甕である。体部はやや長胴気味の球形で、肩部の張りは弱い。口縁部は内湾するもので、端部にはわずかに内傾する端面を有している。外面の肩部上半はタテハケ、それ以下はヨコハケで仕上げられる。内面は体部上半にヨコ及びナナメ方向のケズリが施され、体部下半から底部周辺には棒状工具によると思われる圧痕がみとめられる。口縁周辺はヨコナデにより仕上げられていた。

(31)は壷、(32) ～(34)は甕の底部片である。(31)はやや突出した底部を持ち、中央部をわずかに凹ませている。(32)～(34)は平底を呈し、(33)・(34)は外面にタタキが施される。なお(31)は、体部とは異なる砂礫を多く含んだ胎土を底部にのみ使用しているという点で特徴的である。

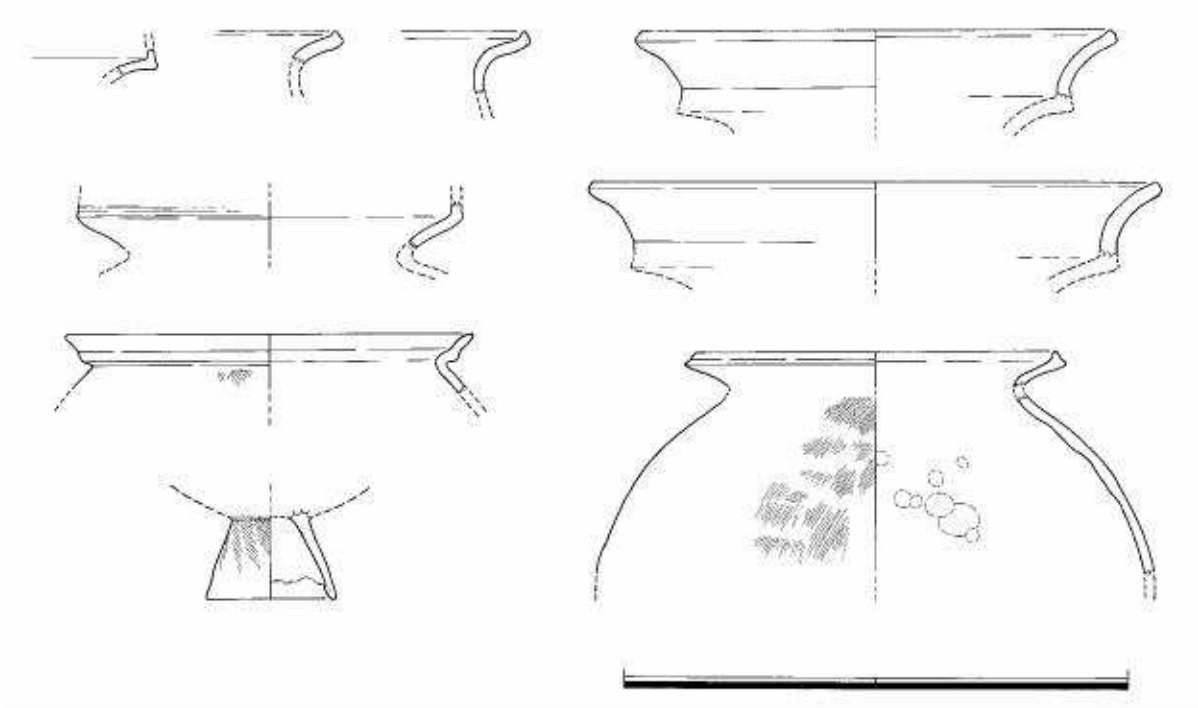


図55　土坑３出土土器実測図④（S＝1/3）

図54に示した甕口縁部の小片のうち、(35)～(37)は外反する口縁部をもち、端部は端面を有するか丸くおさめられている。(38)～(44)の口縁部は直線的に立ち上がり、端部は面を有するか丸くおさめられるが、(42)は上方につまみあげられる。(45)～(58)は内湾する口縁部と内面に肥厚する口縁端部を有している。

**土坑３出土の外来系土器**　土坑３出土の土器の大半は図化できない体部の小片等である。その中から外来系土器を抽出することは困難であるため、ここでは比較的地域差が表れやすい口縁部及び底部・脚台部の破片の中から外来系土器を抽出した。土坑３出土土器のうち口縁部や底部・脚台部を有するものは、図52～55に示した71個体である。このうち外来系の土器と考えられるものは９点存在し、12.7%を占めている。図55においてこれらを図示した。

(63)・(66)は短い二重口縁を有する吉備型甕の口縁部片と考えられる。二重口縁部はやや内傾してまっすぐに立ち上がり、(66)ではその外面に数条の弱い凹線が巡らされる。(64)・(65)・(71)は東四国系の甕である。「く」の字形に外反する口縁の端部は上方につまみあげられており、外側に端面を有している。(71)の体部外面にはナナメ方向の細かいハケメが施され、内面には棒状の工具によると思われる圧痕がみとめられた。

(67)・(68)は東海系のＳ字状口縁台付甕である。(67)は口縁部周辺の破片で、Ｓ字状に屈曲する口縁部を有し、端部は丸くおさめている。肩部外面にはハケメが観察される。(68)は直線的に外側に開く小型の脚台部で、その端部は内側に折り返しておさめられる。脚台の外面にはナナメ方向のハケメが放射状に施されていた。(69)・(70)は東四国地域に見られる二重口縁壺の口縁部である。ほぼ垂直に立ち上がったのちに外反する二重口縁部を持ち、その端部には不明瞭な端面が形成される。

土坑３から出土した外来系土器は以上の９個体であり、東四国系が５個体で最も多く、吉備系・東海系がそれぞれ２個体ずつとなっている。纒向遺跡で出土する外来系土器は様々な地域のものを含んでいるが、土坑３出土の外来系土器の中では東四国系の土器の比率が最も高いという点が注意される。

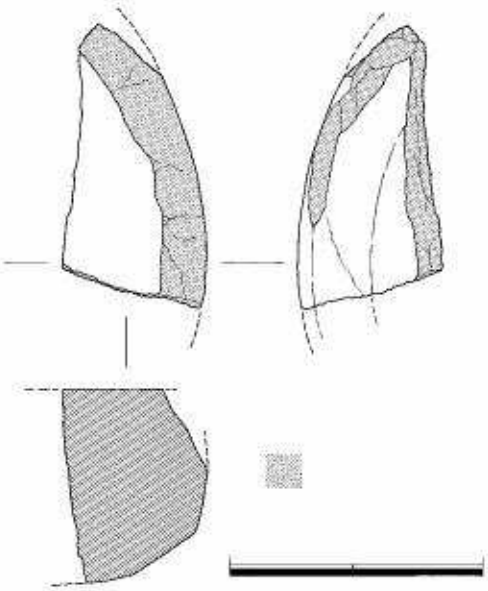


図56　土坑３出土石製品実測図（S＝1/3）

**土坑３出土土器の時期**　土坑３から出土した土器の大半は礫の上面で検出されており、その状況から一括性の高い資料群として捉えることができる。最も資料数の多い甕の口縁部に注目すると、内湾気味に立ち上がる口縁と内面を肥厚させる端部を有する個体が多いことから、概ね布留式の範疇で考えられる。一方で直線的に立ち上がり端部を丸くおさめるような口縁を持つ甕も一定量存在することから、布留式の中でも古相に位置付けることができるであろう。これに出土土器のうち（29）・(30)や(16)など、比較的残存状況の良好な個体の形態的特徴を考えあわせると、土坑３出土の土器群は布留１式期でも古い段階に属するものと考えることができる。

**土坑３出土石製品**（図56－72）　土坑３埋土（図51－３層上層）より石製品の破片が１点出土した。砂岩系統の石材を加工したもので、復元径約31cm、厚さ８cm程度の円盤状を呈していたと考えられる。上面には平滑な面を有しており、縁部がわずかに盛り上がる形状を推定することができる。側面から底面にかけては、同心円を描くように面取りして成形している。なおこの個体には赤色顔料等の付着はみとめられなかったが、纒向遺跡辻地区旧河道出土の石製臼[3]と形態・材質などの点で共通点が多いことから、朱の精製に用いられた石製臼であると考えられる。

## 5．まとめ

今回の調査地は纒向遺跡の中央に位置する太田微高地の北端にあたり、従来から居住域の存在が推定されてきた地域の一端にあたる。しかし調査地周辺は中世以前より続く太田集落の中に位置することもあり、現代に至るまで多くの人の手が加えられていると考えられた。実際調査区内には近世の遺構が多く存在し、古墳時代前期に遡る可能性があるものはわずかに過ぎなかった。

検出された遺構のうち布留１式期の時期が考えられる土坑３は、底部に礫を充填するという特徴的な形態を示す土坑であった。この土坑３からは、土器のほか石製臼の破片が１点と板状の木器が１点出土しているのみであり、その用途・性格を明らかにするには至らなかった。今後の類例の増加を待って検討する必要がある。またこの土坑３から出土した布留1式期の一括資料の中に、外来系の土器が一定量存在し、その中でも東四国系のものが多数を占めていることは注目される。

今回の調査成果は広大な纒向遺跡の範囲のうちわずか40㎡から得られた情報に過ぎない。しかし纒向遺跡の全体像を明らかにしていく過程では、こうした小規模な調査の成果の積み重ねが必要であり、個々の調査成果の占める位置はきわめて重要であるといえるだろう。今回調査が行われた太田微高地周辺の状況についてもまだ不明な部分が多く、調査成果の蓄積を待って検討していくことが今後の課題である。（福辻）

【註】

1）石野博信　関川尚功編　1976『纒向』　桜井市教育委員会
　寺沢 薫編　1979「纒向遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1978年度　奈良県立橿原考古学研究所

2）表中に示した口縁部形式は、以下の文献を参考とした。
　寺沢 薫編　1986『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第49冊　奈良県立橿原考古学研究所

3）石野博信　1976「3. 石製品・玉類」『纒向』　桜井市教育委員会

| 図番号 | 写真図版 | 器種 | 口縁部形式 | 復元口径[cm] | 器高(残存)[cm] | 底径(復元)[cm] | 色調（外面） | 残存状況 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 図52－1 | 図版32－1 | 小形丸底鉢 | a | 8.8 | (3.0) | | 褐灰色（7.5YR4/1） | 口縁～体部上半　1/8 | |
| 図52－2 | 図版34－2 | 小形丸底壺 | | | (5.9) | | にぶい黄橙色（10YR7/2） | 体部～底部 | |
| 図52－3 | 図版32－3 | 小形丸底壺 | a | 10.8 | (4.2) | | 橙色（2.5YR6/6） | 口縁部　1/6 | |
| 図52－4 | 図版32－4 | 小形丸底壺 | a | 13.9 | (6.9) | | 橙色（7.5YR7/6） | 口頸部　1/8 | |
| 図52－5 | 図版32－5 | 二重口縁壺 | d | 16.3 | (3.1) | | にぶい橙色（7.5YR7/3） | 口縁部　1/10 | |
| 図52－6 | 図版34－6 | 二重口縁壺 | a | 17.2 | (3.3) | | にぶい橙色（7.5YR6/4） | 口縁部　2/5 | |
| 図52－7 | 図版32－7 | 短頸壺 | b | 15.5 | (3.7) | | 橙色（5YR6/6） | 口縁部　1/8 | |
| 図52－8 | 図版32－8 | 短頸壺 | a | 12.6 | (4.9) | | 橙色（7.5YR7/6） | 口縁部　1/4 | |
| 図52－9 | 図版32－9 | 直口壺 | b | 12.0 | (8.4) | | 灰黄色（2.5Y7/2） | 口頸部　1/5 | |
| 図52－10 | 図版32－10 | 短頸壺 | b | 17.7 | (4.9) | | にぶい黄橙色（10YR7/4） | 口縁部　2/5 | |
| 図52－11 | 図版34－11 | 短頸壺 | b | 16.2 | (9.4) | | 浅黄色（10YR8/3） | 口頸部　1/3 | |
| 図52－12 | 図版32－12 | 広口壺 | b | 19.6 | (1.3) | | 褐灰色（10YR4/1） | 口縁部　1/10 | |
| 図52－13 | 図版32－13 | 広口壺 | b | 19.2 | (1.5) | | 橙色（7.5YR6/6） | 口縁部　1/7 | |
| 図52－14 | 図版32－14 | 広口壺 | d | 22.9 | (1.6) | | 橙色（5YR6/6） | 口縁部　1/10 | |
| 図52－15 | 図版34－15 | 甕 | | | (8.1) | | 灰黄色（2.5Y7/2） | 体部上半　1/6 | 煤付着 |
| 図52－16 | 図版34－16 | 壺 | | | (25.4) | 3.5 | 橙色（5YR7/6） | 体部～底部 | |
| 図53－17 | 図版32－17 | 甕 | a | 12.4 | (4.1) | | にぶい黄橙色（10YR7/3） | 口縁～肩部　1/8 | |
| 図53－18 | 図版32－18 | 甕 | f | 17.4 | (3.4) | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁部　1/10 | 煤付着 |
| 図53－19 | 図版32－19 | 甕 | g 2 | 14.6 | (3.4) | | にぶい黄橙色（10YR6/4） | 口縁部　1/3 | 煤付着 |
| 図53－20 | 図版32－20 | 甕 | g 1 | 16.3 | (3.4) | | 明黄褐色（10YR7/6） | 口縁部　1/4 | 煤付着 |
| 図53－21 | 図版32－21 | 甕 | c | 15.1 | (3.0) | | 浅黄色（10YR8/4） | 口縁部　1/7 | |
| 図53－22 | 図版32－22 | 甕 | c | 15.3 | (2.8) | | にぶい橙色（7.5YR7/3） | 口縁部　1/10 | 煤付着 |
| 図53－23 | 図版32－23 | 甕 | g 2 | 13.4 | (4.2) | | 灰褐色（7.5YR4/2） | 口縁～肩部　1/10 | 煤付着 |
| 図53－24 | 図版32－24 | 甕 | g 1 | 14.6 | (2.3) | | にぶい橙色（7.5YR6/4） | 口縁部　1/10 | 煤付着 |
| 図53－25 | 図版32－25 | 甕 | h | 14.4 | (4.3) | | にぶい橙色（7.5YR7/3） | 口縁部　1/10 | |
| 図53－26 | 図版32－26 | 甕 | g 1 | 16.1 | (3.0) | | 橙色（5YR7/6） | 口縁部　1/10 | |
| 図53－27 | 図版32－27 | 甕 | g 1 | 16.2 | (4.3) | | にぶい赤褐色（5YR5/4） | 口縁部　1/10 | |
| 図53－28 | 図版32－28 | 甕 | g 1 | 17.3 | (3.8) | | 灰白色（5YR8/2） | 口縁部　1/10 | 煤付着 |
| 図53－29 | 図版34－29 | 甕 | g 2 | 12.5 | (11.4) | | 浅黄色（10YR8/3） | 口縁～体部上半　3/5 | 煤付着 |
| 図53－30 | 図版34－30 | 甕 | g 2 | 13.6 | 19.2 | | 橙色（7.5YR7/6） | 全体　3/5 | 煤付着 |
| 図53－31 | 図版33－31 | 壺 | | | (2.1) | 6.2 | にぶい橙色（5YR6/3） | 底部 | 煤付着 |
| 図53－32 | 図版33－32 | 甕 | | | (2.7) | (4.2) | にぶい橙色（5YR6/4） | 底部　2/5 | |
| 図53－33 | 図版33－33 | 甕 | | | (4.8) | 4.2 | 橙色（2.5YR6/6） | 底部 | 煤付着 |
| 図53－34 | 図版33－34 | 甕 | | | (3.3) | 3.5 | にぶい橙色（7.5YR6/4） | 底部 | |
| 図54－35 | 図版33－35 | 甕 | b | | (1.9) | | にぶい橙色（7.5YR6/4） | 口縁部　1/12 | |
| 図54－36 | 図版33－36 | 甕 | a | | (1.8) | | にぶい黄橙色（10YR6/3） | 口縁部　1/12以下 | 煤付着 |
| 図54－37 | 図版33－37 | 甕 | a | | (3.1) | | 明黄褐色（10YR7/4） | 口縁部　1/12 | 煤付着 |
| 図54－38 | 図版33－38 | 甕 | a | | (3.1) | | 橙色（5YR6/6） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図54－39 | 図版33－39 | 甕 | a | | (2.5) | | 橙色（7.5YR7/6） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図54－40 | 図版33－40 | 甕(壺) | b | | (3.5) | | 橙色（7.5YR6/6） | 口縁部　1/12 | |
| 図54－41 | 図版33－41 | 甕 | b | | (2.8) | | にぶい黄橙色（10YR7/3） | 口縁部　1/20以下 | |
| 図54－42 | 図版33－42 | 甕 | d | | (1.3) | | にぶい橙色（7.5YR7/4） | 口縁部　1/20以下 | |
| 図54－43 | 図版33－43 | 甕 | a | | (3.2) | | にぶい橙色（7.5YR7/4） | 口縁部　1/12 | |
| 図54－44 | 図版33－44 | 甕 | h | | (2.4) | | にぶい橙色（7.5YR6/4） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図54－45 | 図版33－45 | 甕 | f | | (2.3) | | 橙色（7.5YR7/6） | 口縁部　1/12以下 | 煤付着 |
| 図54－46 | 図版33－46 | 甕 | f | | (2.5) | | 暗黄灰色（2.5Y5/2） | 口縁部　1/12以下 | 煤付着 |
| 図54－47 | 図版33－47 | 甕 | g 1（f） | | (1.9) | | にぶい橙色（7.5YR6/4） | 口縁部　1/20 | |
| 図54－48 | 図版33－48 | 甕 | g 2 | | (0.8) | | 褐灰色（7.5YR5/1） | 口縁部　1/20以下 | |
| 図54－49 | 図版33－49 | 甕 | g 2 | | (2.3) | | にぶい橙（5YR6/4） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図54－50 | 図版33－50 | 甕 | g 2 | | (1.8) | | 褐灰色（7.5YR4/1） | 口縁部　1/20 | 煤付着 |
| 図54－51 | 図版33－51 | 甕 | h（a） | | (3.2) | | にぶい橙色（7.5YR7/4） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図54－52 | 図版33－52 | 甕 | g 1 | | (1.4) | | 浅黄色（7.5YR8/4） | 口縁部　1／20以下 | |
| 図54－53 | 図版33－53 | 甕 | g 1 | | (0.9) | | 浅黄色（7.5YR8/4） | 口縁部　1/20以下 | |
| 図54－54 | 図版33－54 | 甕 | g 2 | | (2.7) | | 灰褐色（5YR6/2） | 口縁部　1/12 | 煤付着 |
| 図54－55 | 図版33－55 | 甕 | g 2 | | (2.3) | | にぶい橙色（10YR6/3） | 口縁部　1/20 | 煤付着 |
| 図54－56 | 図版33－56 | 甕 | g 2 | | (1.4) | | にぶい橙色（7.5YR6/4） | 口縁部　1/20以下 | 煤付着 |
| 図54－57 | 図版33－57 | 甕 | g 1 | | (2.4) | | 橙色（5YR7/6） | 口縁部　1/20 | |
| 図54－58 | 図版33－58 | 甕 | g 2 | | (3.2) | | 暗赤褐色（5YR3/2） | 口縁部　1/12 | 煤付着 |
| 図54－59 | 図版33－59 | 壺 | a | | (1.9) | | にぶい橙色（5YR7/4） | 口縁部　1/12 | |
| 図54－60 | 図版33－60 | 壺(甕) | a | | (1.6) | | 灰褐色（7.5YR5/2） | 口縁部　1/20 | 煤付着 |
| 図54－61 | 図版33－61 | 広口壺 | b | | (0.9) | | にぶい橙色（5YR6/4） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図54－62 | 図版33－62 | 広口壺 | h（d） | | (1.3) | | にぶい橙色（7.5YR6/4） | 口縁部　1/12以下 | |
| 図55－63 | 図版33－63 | 甕 | － | | (1.0) | | にぶい橙色（7.5YR6/5） | 口縁付近　1/12 | 古墳系 |
| 図55－64 | 図版33－64 | 甕 | － | | (1.3) | | 灰黄褐色（10YR5/2） | 口縁部　1/20 | 東四国系 |
| 図55－65 | 図版33－65 | 甕 | － | | (2.5) | | にぶい橙色（7.5YR7/4） | 口縁部　1/12 | 東四国系 |
| 図55－66 | 図版33－66 | 甕 | － | | (2.0) | | にぶい橙色（7.5YR7/4） | 口縁付近　1/8 | 古墳系　煤付着 |
| 図55－67 | 図版33－67 | 台付甕 | － | | (2.3) | | 灰黄褐色（10YR6/2） | 口縁～肩部　1/10 | 東海系 |
| 図55－68 | 図版33－68 | 台付甕 | | | (3.3) | 脚径（6.0） | 灰黄褐色（10YR6/2） | 脚台部　1/4 | 東海系 |
| 図55－69 | 図版33－69 | 二重口縁壺 | b | 18.6 | (2.8) | | にぶい橙色（7.5YR7/4） | 口縁部　1/8 | 東四国系 |
| 図55－70 | 図版33－70 | 二重口縁壺 | b | 22.2 | (3.0) | | にぶい黄橙色（10YR6/3） | 口縁部　1/6 | 東四国系 |
| 図55－71 | 図版33－71 | 甕 | － | 14.2 | (8.7) | | 黄灰色（2.5Y6/1） | 口縁～肩部　1/10 | 東四国系 |

表４　纒向遺跡第134次調査 土坑３出土土器一覧表

# 第3章　ま　と　め

平成14年度の国庫補助による発掘調査は、個人住宅建設に伴うものが８件、圃場整備に伴うものが１件、重要遺跡の範囲確認調査が１件の計10件が実施され、本書では磐余遺跡群第５次調査を除く９件の調査について報告することができた。いずれも小規模な調査ではあったが、いくつかの調査において重要な成果が得られている。

市内北部に位置する纒向遺跡では計４件の調査が行なわれた。129次調査は箸墓古墳の「外濠」が想定される範囲内で実施され、これまでに確認されている周濠内堆積土と類似する腐植土層が確認された。今回の調査成果からは「外濠」の存否を確定することはできなかったが、箸墓古墳の全体像を考える上で重要な成果であったといえるだろう。130次調査では縄文時代後期の遺構・遺物が検出された。纒向遺跡西半ではこれまでにも同時期の遺物の出土が知られており、縄文時代の遺構がこの一帯に存在する状況が想定される。弥生時代終末から古墳時代前期の居住域が想定される太田微高地で行なわれた134次調査では、期待された庄内式期の遺構は確認されなかったが、特殊な形態をもつ土坑が検出された。土坑内からは布留1式期の土器が出土し、この時期の良好な一括資料を得ることができた。

吉備池遺跡の範囲確認調査（第13次調査）は、吉備池廃寺東面大垣の推定ライン上で実施された。ここでは吉備池廃寺に関連する遺構は確認されなかったが、一方で鎌倉時代の掘立柱建物・井戸などが検出され、この地に中世居館が存在したことが明らかになった。

安倍木材団地内で行なわれた谷遺跡第17次調査では、鉄滓やフイゴ羽口などの鍛冶関連遺物が出土した。安倍山の西側にあたるこの地域では、これまでの調査でも玉造やガラス工房に関連する遺物が出土しており、古墳時代後期を中心とする時期に、各種工房群が営まれていたことが想定される。

上記以外の４件は、いずれも20㎡前後のきわめて小規模な調査であった。それゆえに検出された遺構・遺物を直ちに性格付けることは難しいが、今後行なわれるであろう周辺の調査成果次第では、重要な意味を持つ可能性がある。

国庫補助による発掘調査は、大半が個人住宅建設に伴うものであるため、調査面積は小さなものが多い。しかし、こうした小規模な調査の継続と成果の蓄積が、それぞれの遺跡の性格、ひいてはその地域の歴史的な位置付けを可能にしているといえるだろう。桜井市の国庫補助による発掘調査件数は、ここ数年漸減傾向にある。稀少な調査機会であることを意識しながら、過去の遺構・遺物と向き合っていくことが大切である。（福辻）

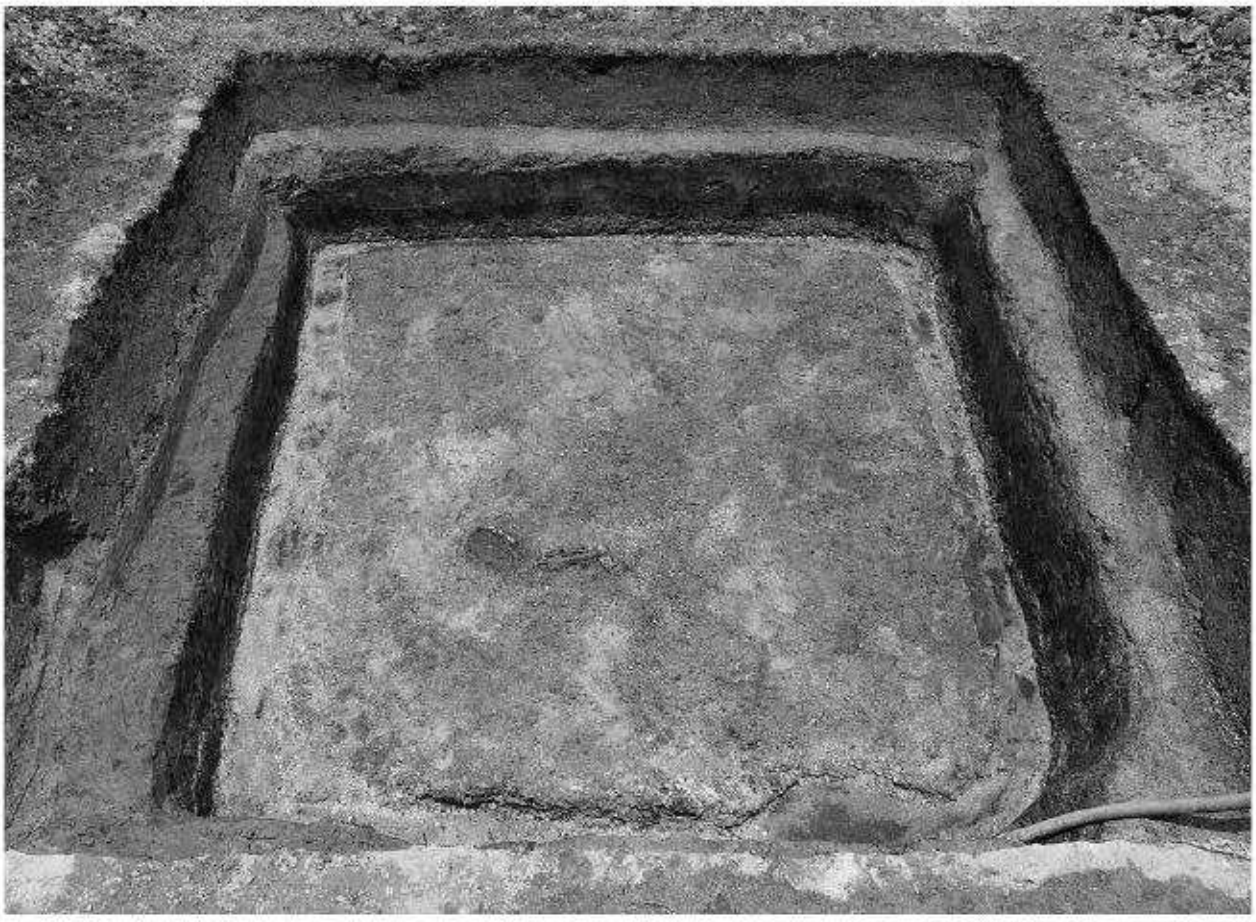
# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| 書名 | 桜井市平成14年度国庫補助による発掘調査報告書 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第24集 |
| 編著者名 | 清水眞一　松宮昌樹　福辻淳　木場佳子　清水哲 |
| 編集機関 | 桜井市教育委員会　文化財課 |
| 所在地 | 〒633-0074　奈良県桜井市芝58-2　　TEL0744-42-6005　　FAX0744-42-1366 |
| 発行年月日 | 2003年3月31 |

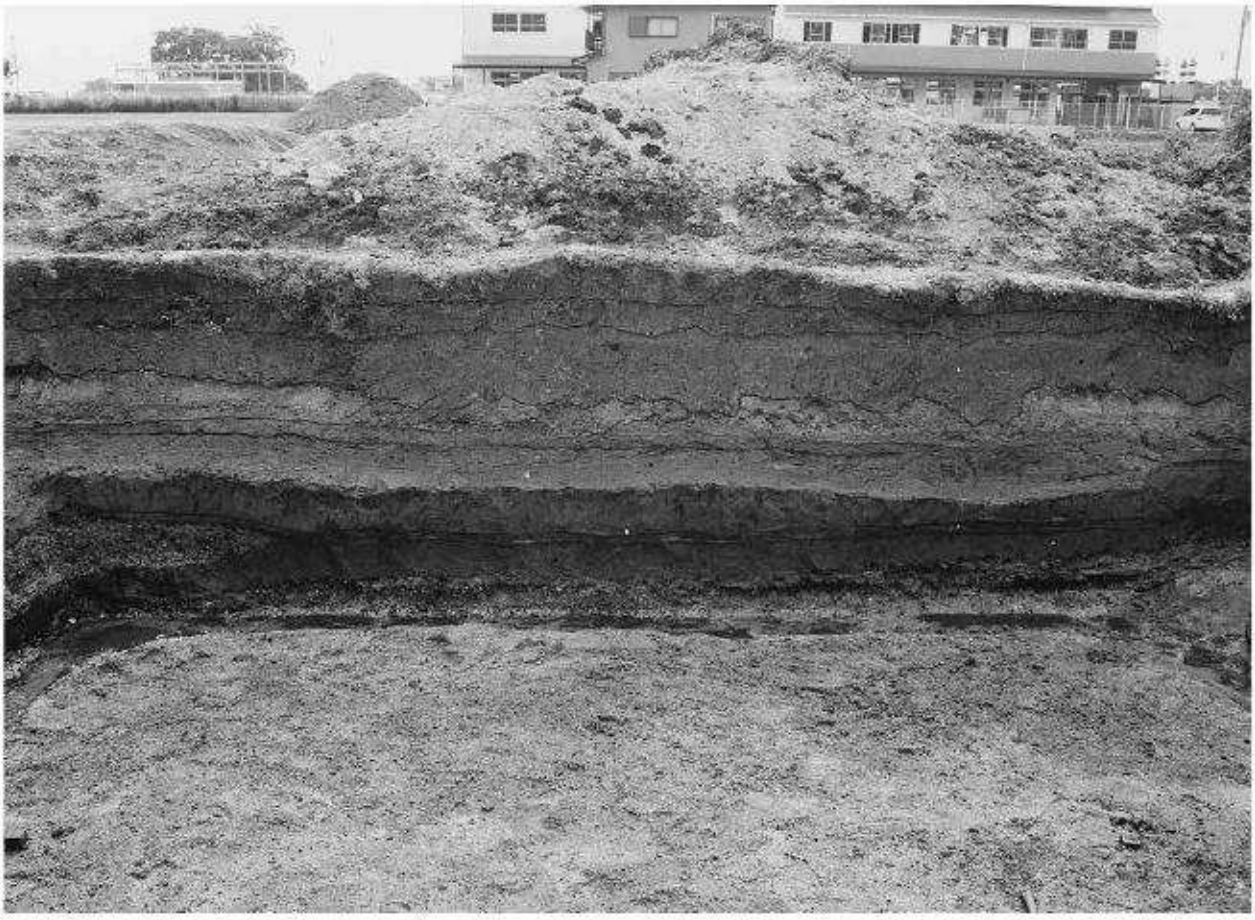
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 ° ′ ″ | 東経 ° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積 ㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 纒向遺跡<br>第129次 | 桜井市<br>箸中1008－2 | 292061 | 11-D-487 | 32°<br>32′05″ | 135°<br>50′05″ | 20020522～<br>20020607 | 57㎡ | 個人住宅建築に伴う調査 |
| 纒向遺跡<br>第130次 | 桜井市<br>豊前86－1･5 | 292061 | 11-D-487 | 34°<br>32′14″ | 135°<br>50′10″ | 20020523～<br>20020605 | 55㎡ | 個人住宅建築に伴う調査 |
| 吉備池遺跡<br>第13次 | 桜井市<br>吉備47 | 292061 | 14-B-24 | 34°<br>30′05″ | 135°<br>50′15″ | 20020722～<br>20020830 | 72㎡ | 範囲確認調査 |
| 大藤原京関連<br>遺跡　第39次 | 桜井市<br>橋本66－4･7 | 292061 | | 34°<br>29°53″ | 135°<br>50′09″ | 20020802～<br>20020805 | 12㎡ | 個人住宅建築に伴う調査 |
| 箸倉山遺跡<br>第３次 | 桜井市<br>茅原305－1他 | 292061 | 11-D-529 | 34°<br>31′48″ | 135°<br>51′13″ | 20021126～<br>20021206 | 22.5㎡ | 個人住宅建築に伴う調査 |
| 大藤原京関連<br>遺跡　第41次 | 桜井市<br>西之宮128－1他 | 292061 | | 34°<br>30′32″ | 135°<br>49′26″ | 20021127～<br>20021129 | 20㎡ | 個人住宅建築に伴う調査 |
| 谷遺跡<br>第17次 | 桜井市<br>安倍木材団地<br>1丁目14－5 | 292061 | 14-B-203 | 34°<br>30′08″ | 135°<br>50′32″ | 20021225～<br>20030124 | 64㎡ | 個人住宅建築に伴う調査 |
| 纒向遺跡<br>第133次 | 桜井市<br>巻野内101 | 292061 | 11-D-487 | 34°<br>32′27″ | 135°<br>50′54″ | 20030122～<br>20030130 | 21㎡ | 個人住宅建築に伴う調査 |
| 纒向遺跡<br>第134次 | 桜井市<br>太田168－1 | 292061 | 11-D-487 | 34°<br>32′32″ | 135°<br>50′29″ | 20030206～<br>20020310 | 40㎡ | 個人住宅建築に伴う調査 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|
| 纒向遺跡第129次(箸墓古墳) | 集落･古墳 | | 土師器 | |
| 纒向遺跡第130次 | 集落遺跡 | 柱穴・土坑 | 縄文土器・石器 | 縄文後期の柱穴 |
| 吉備池遺跡第13次 | 集落遺跡 | 掘立柱建物・井戸・溝 | 瓦器椀・土馬・瓦 | 中世居館遺構 |
| 大藤原京関連遺跡第39次 | 集落遺跡 | 中世素掘溝 | 瓦器・須恵器・土師皿 | |
| 箸倉山遺跡第３次 | 祭祀遺跡 | 柱穴・土坑 | 瓦器・土師器 | |
| 大藤原京関連遺跡第41次 | 集落遺跡 | | 須恵器・土師器 | |
| 谷遺跡第17次 | 集落遺跡 | 溝・ピット | 鉄滓・フイゴ羽口 | |
| 纒向遺跡第133次 | 集落遺跡 | 溝 | 土師器 | |
| 纒向遺跡第134次 | 集落遺跡 | 土坑 | 土師器・石製臼 | 礫敷をもつ土坑 |

第1トレンチと箸墓古墳前方部（南東より）



第1トレンチ全景（拡張前　南より）

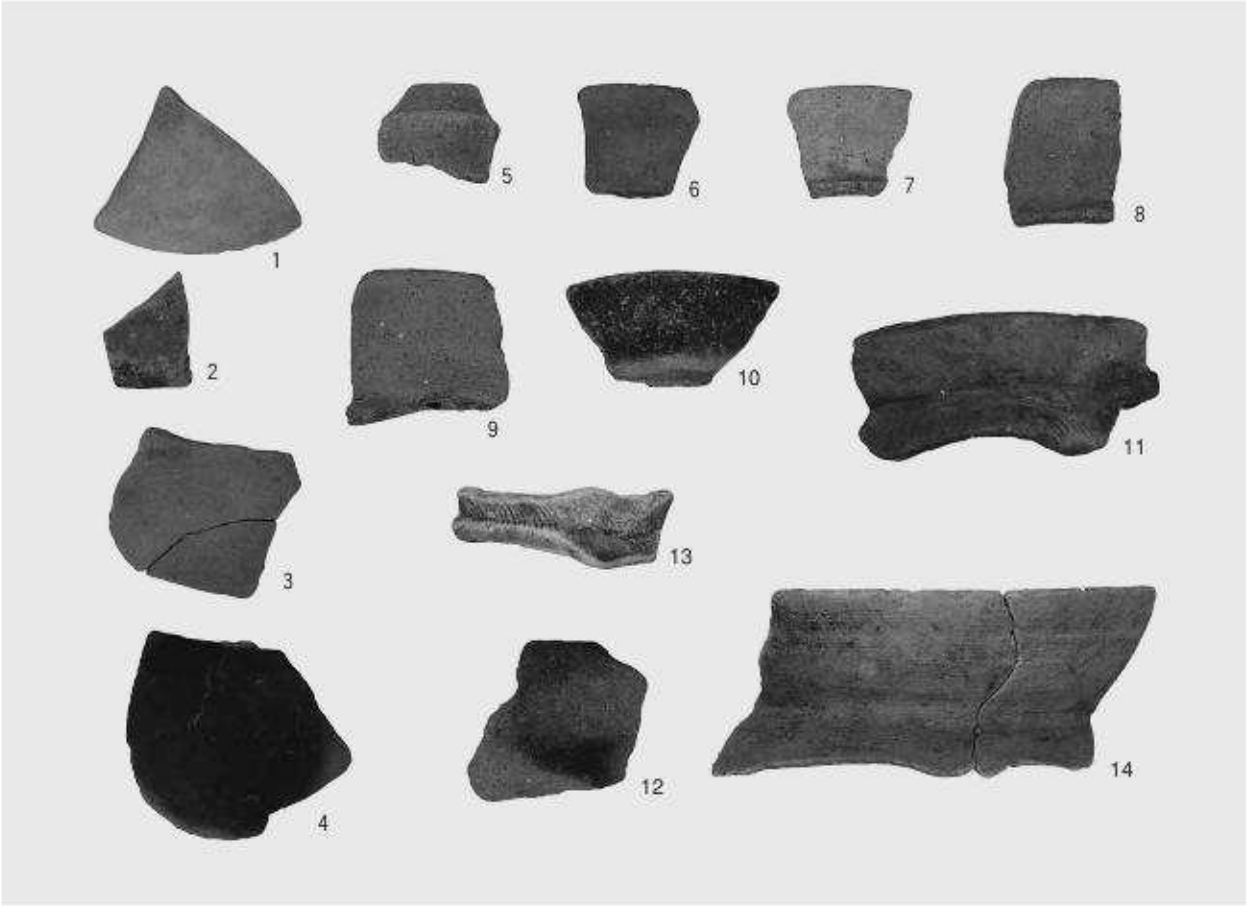


第１トレンチ西壁断面（東より）

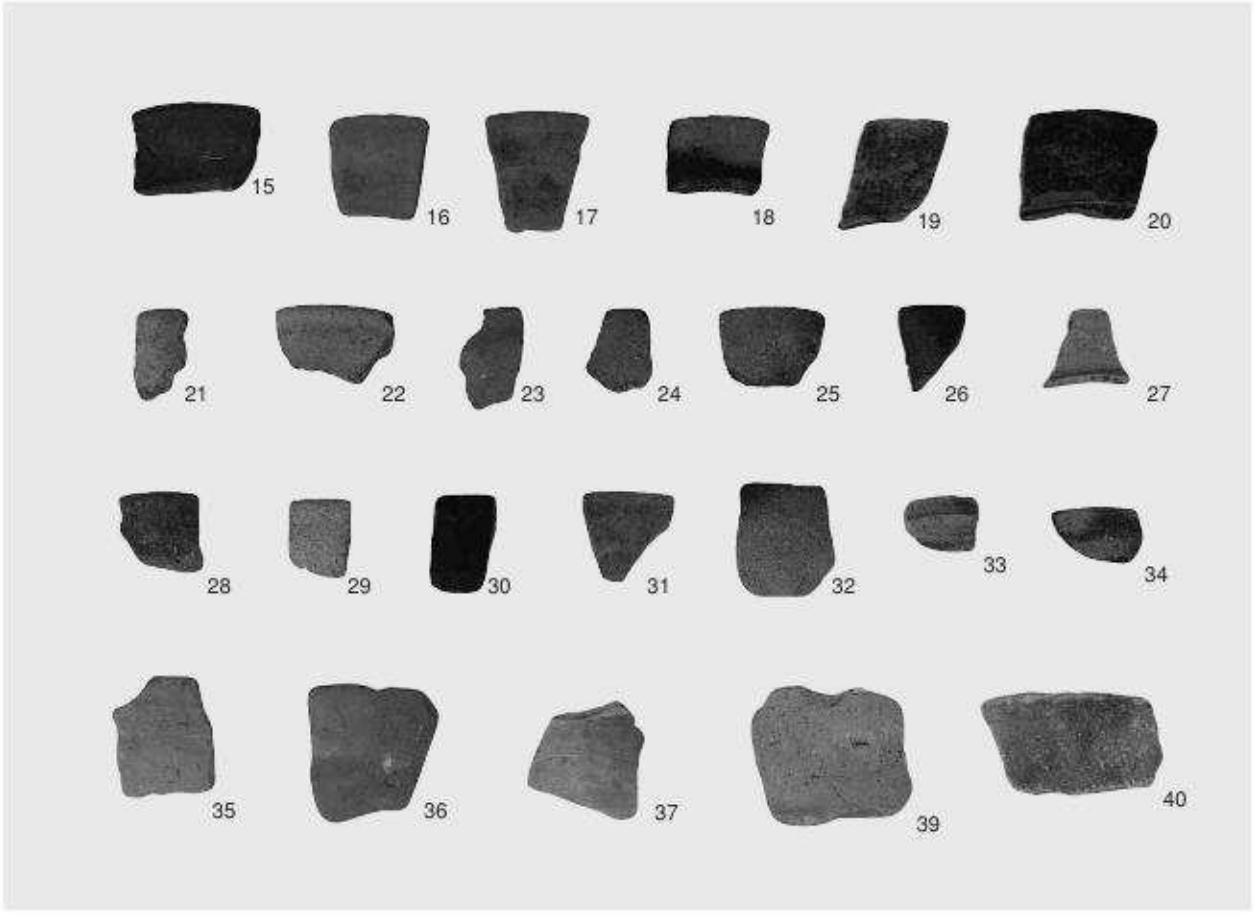
第２トレンチ東壁断面（北西より）

第2トレンチ全景①（北より）

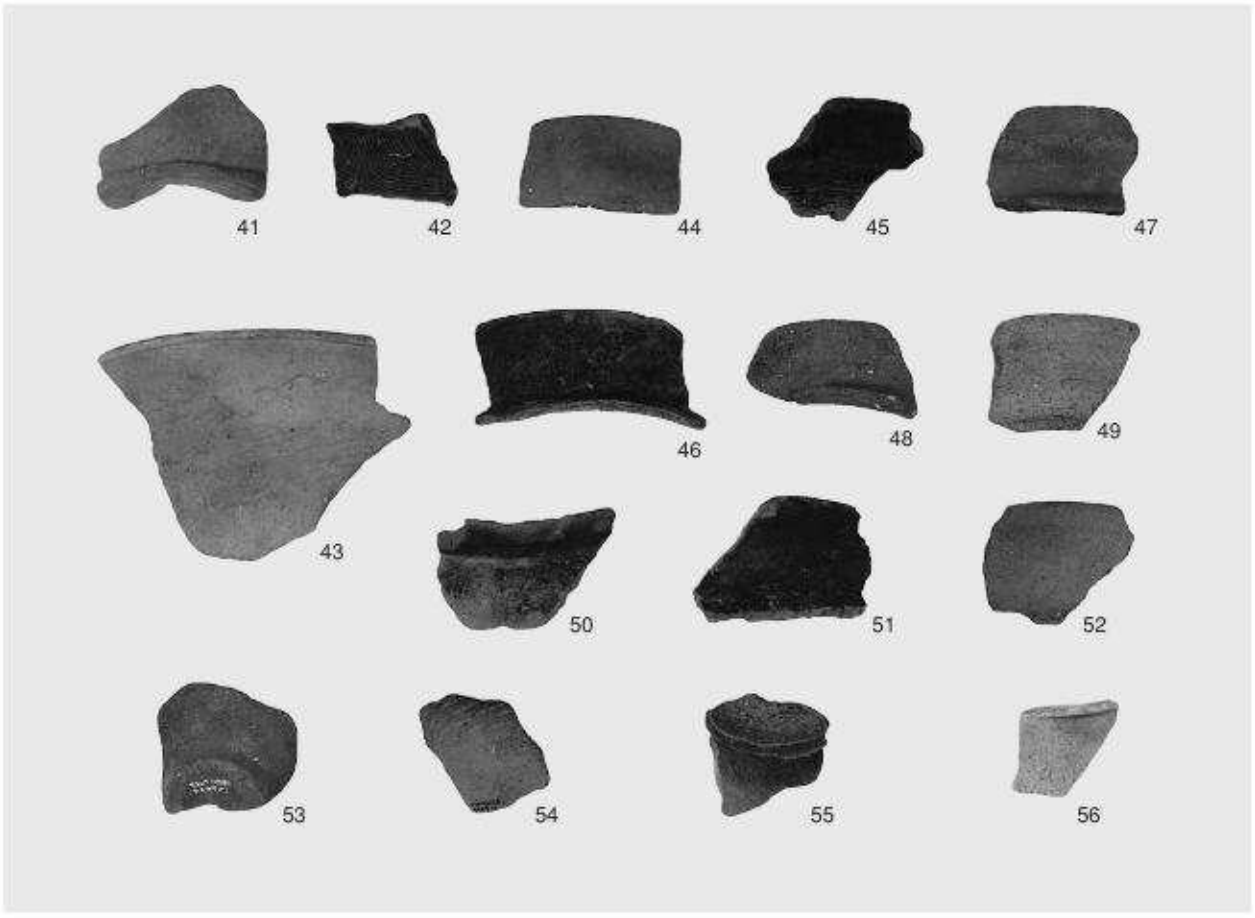
第2トレンチ全景②（南より）



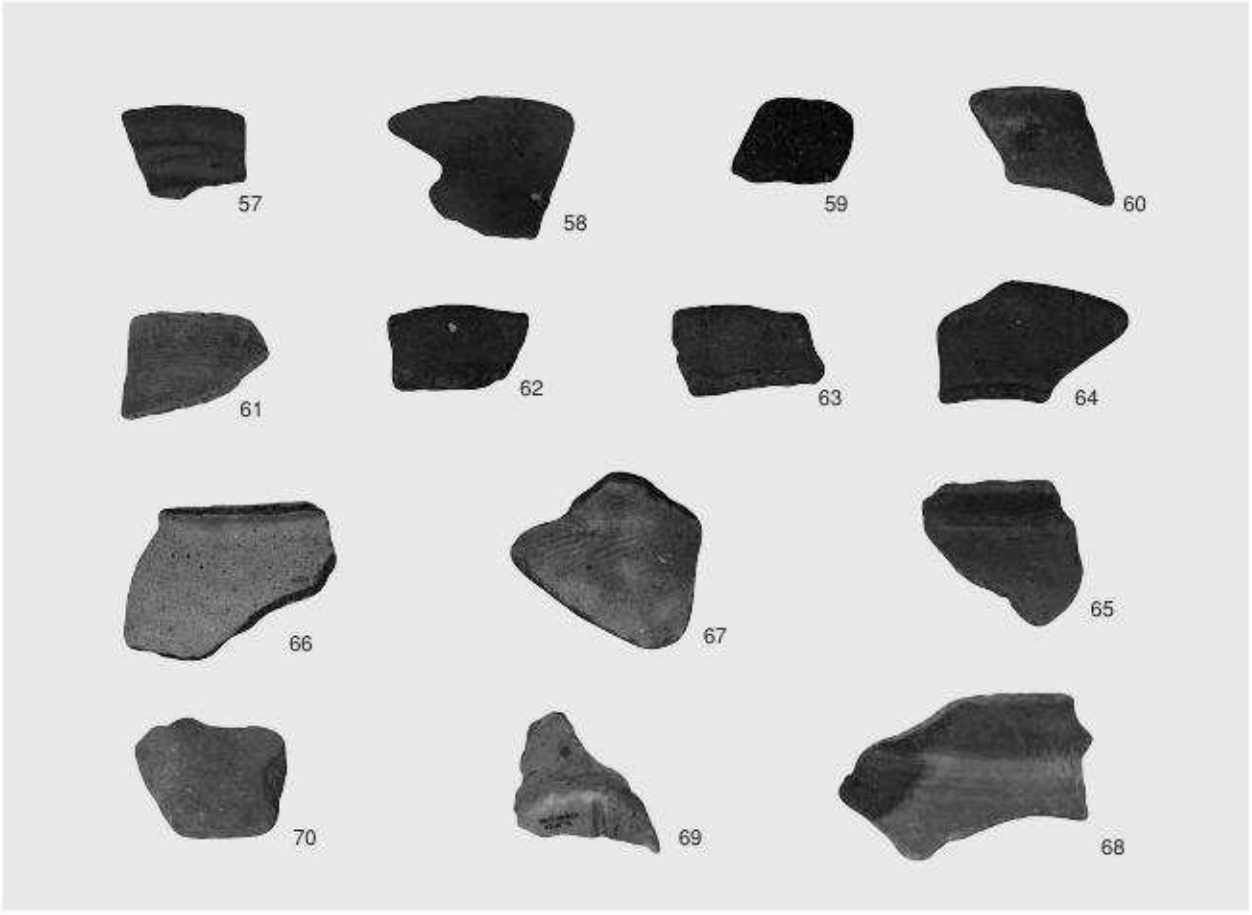

出土土器①


15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
39
40

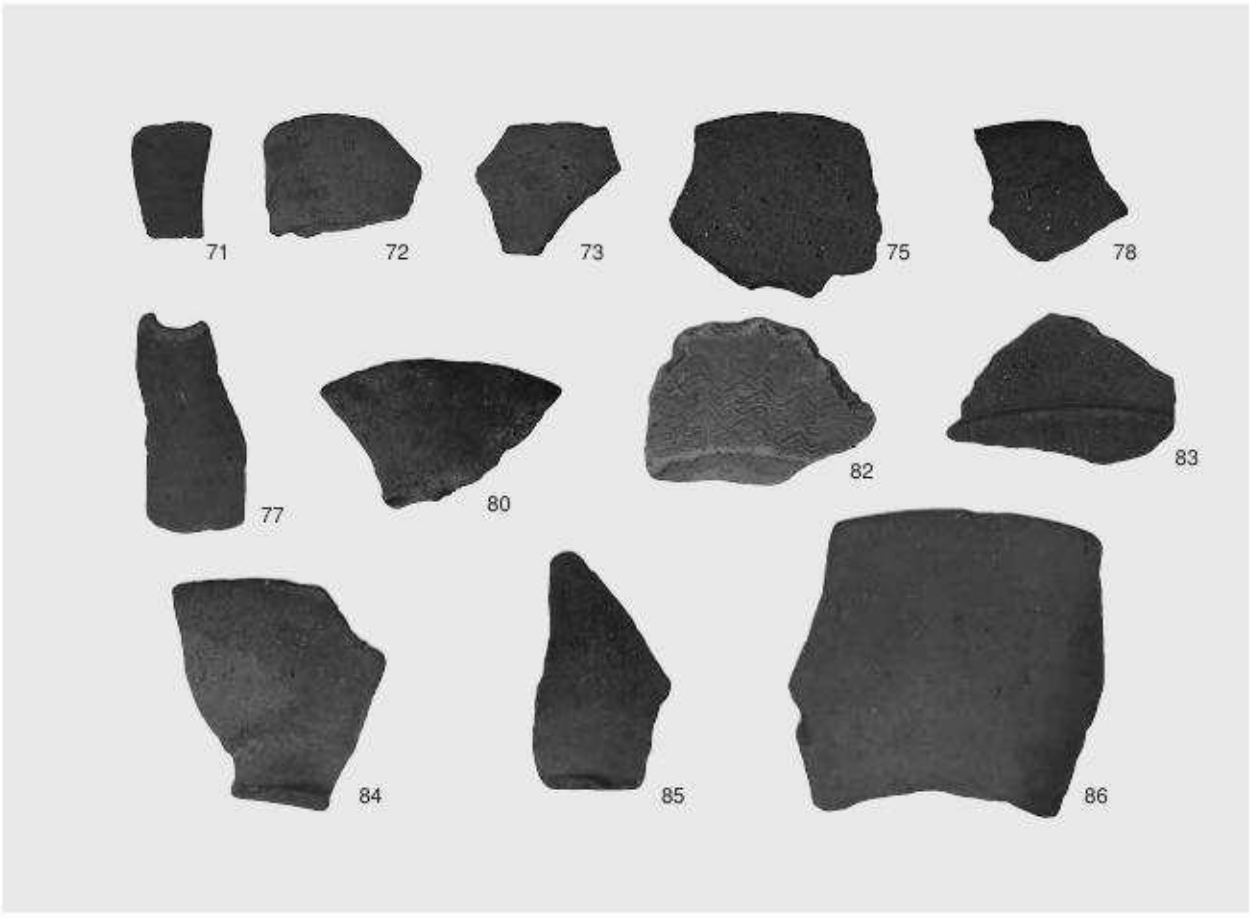
出土土器②


41
42
44
45
47
43
46
48
49
50
51
52
53
54
55
56

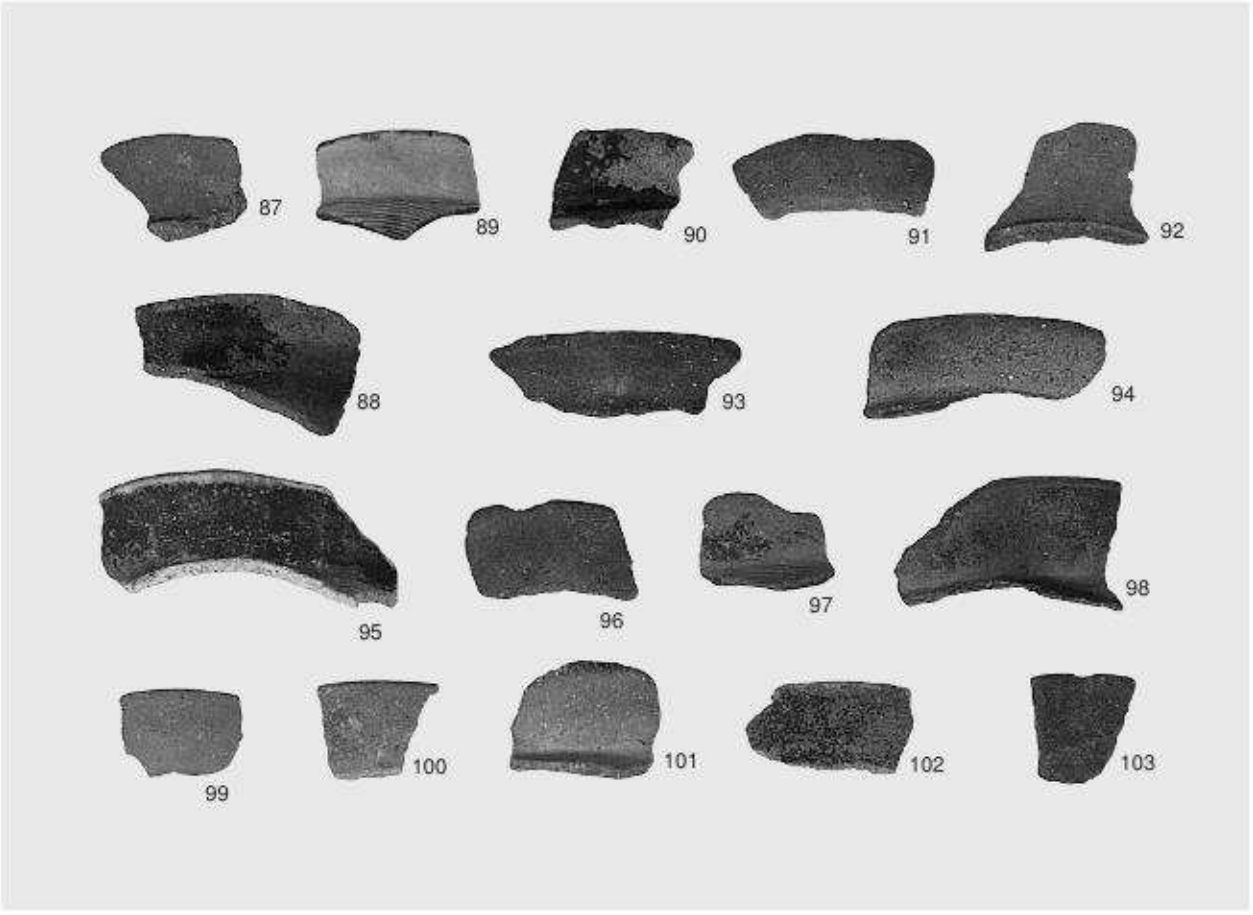
出土土器③


57
58
59
60
61
62
63
64
66
67
65
70
69
68

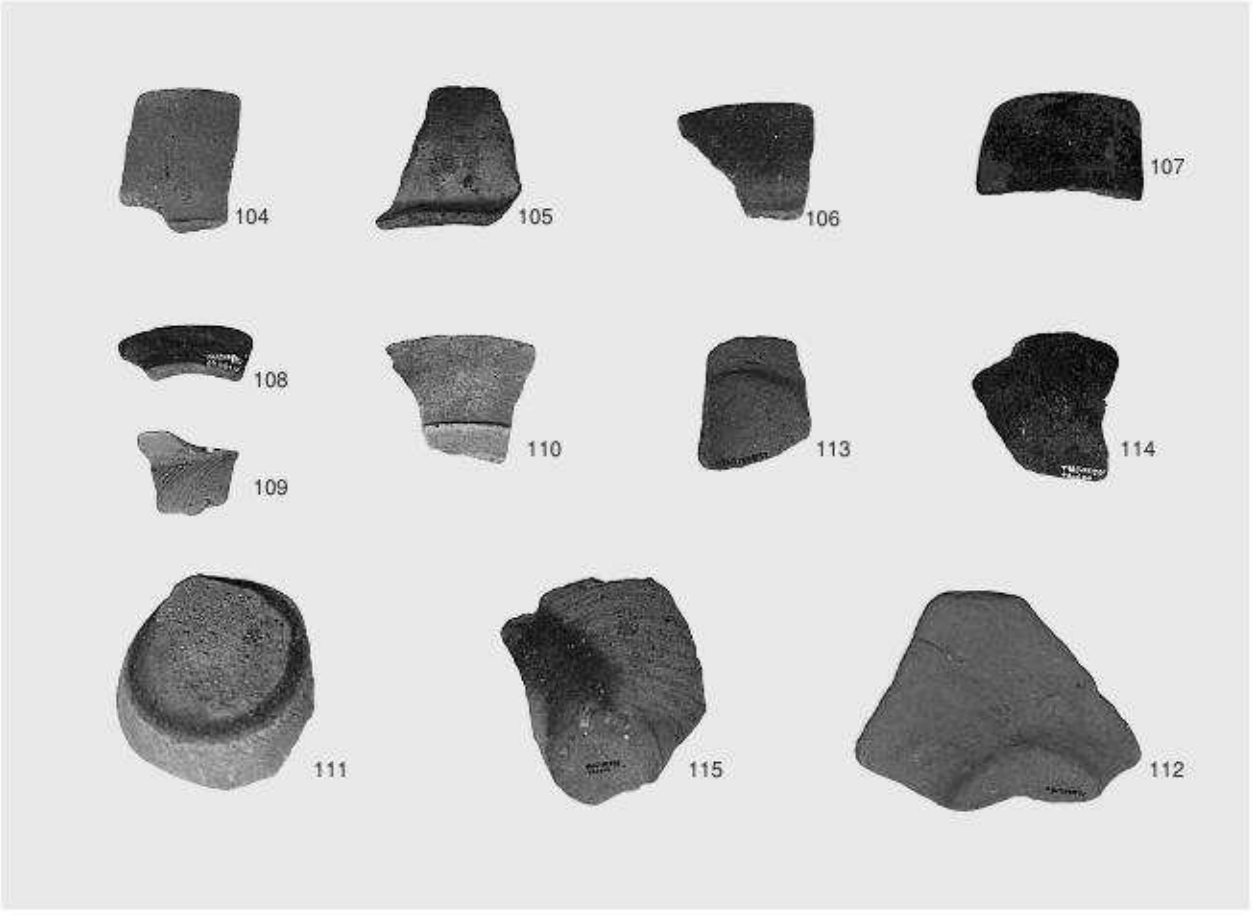
出土土器④


71
72
73
75
78
77
80
82
83
84
85
86

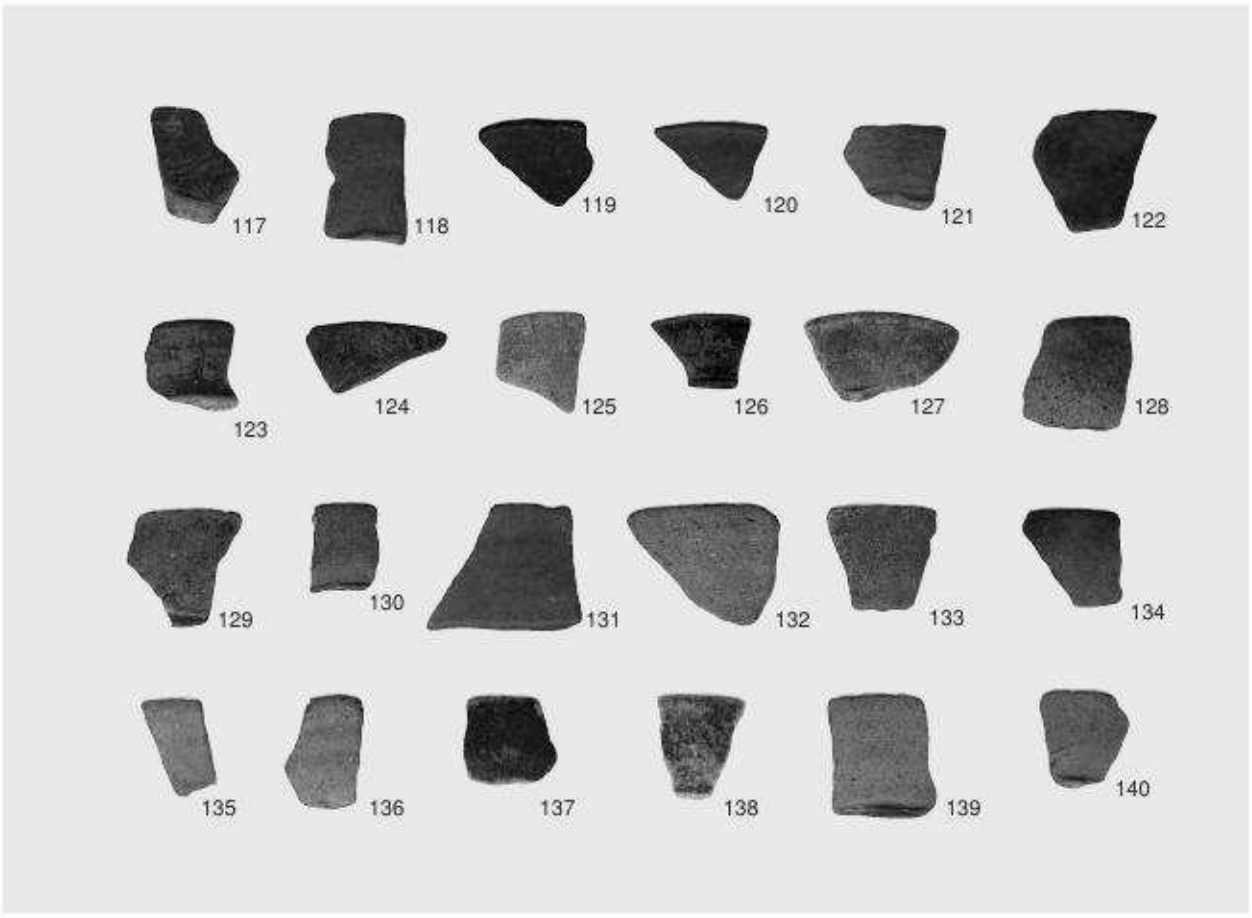
出土土器⑤


87
89
90
91
92
88
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103

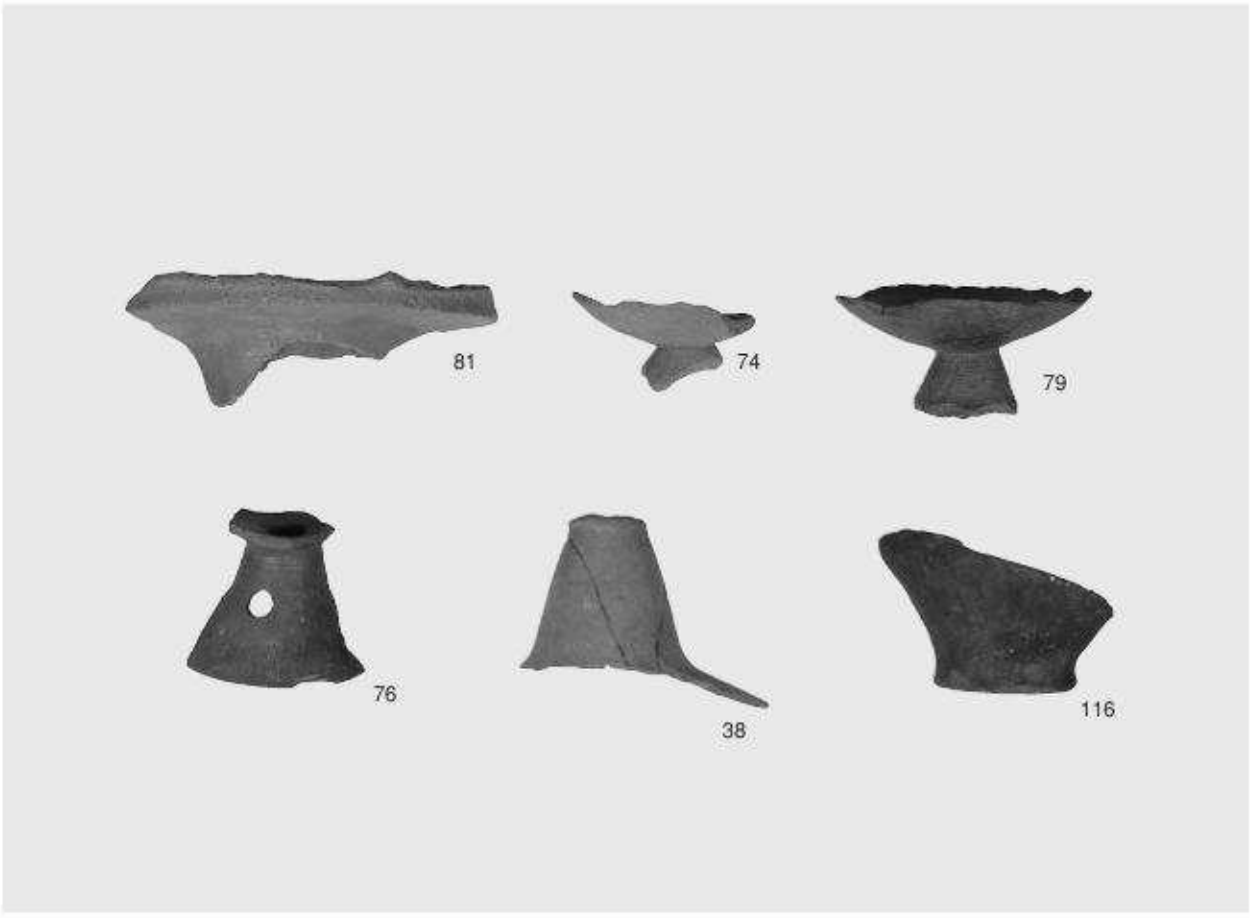
出土土器⑥


104
105
106
107
108
109
110
113
114
111
115
112

出土土器⑦


117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140

出土土器⑧

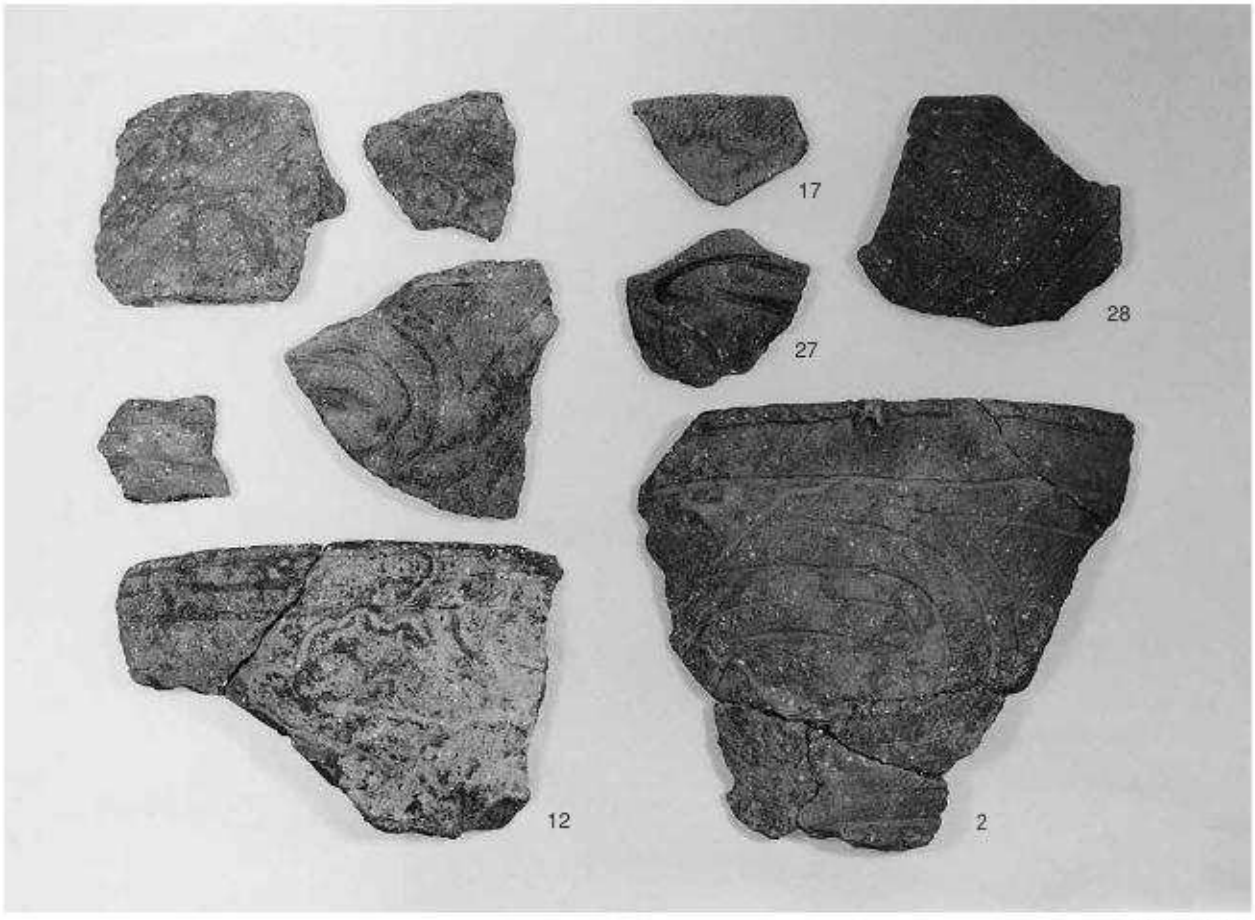

81
74
79
76
38
116

出土土器⑨

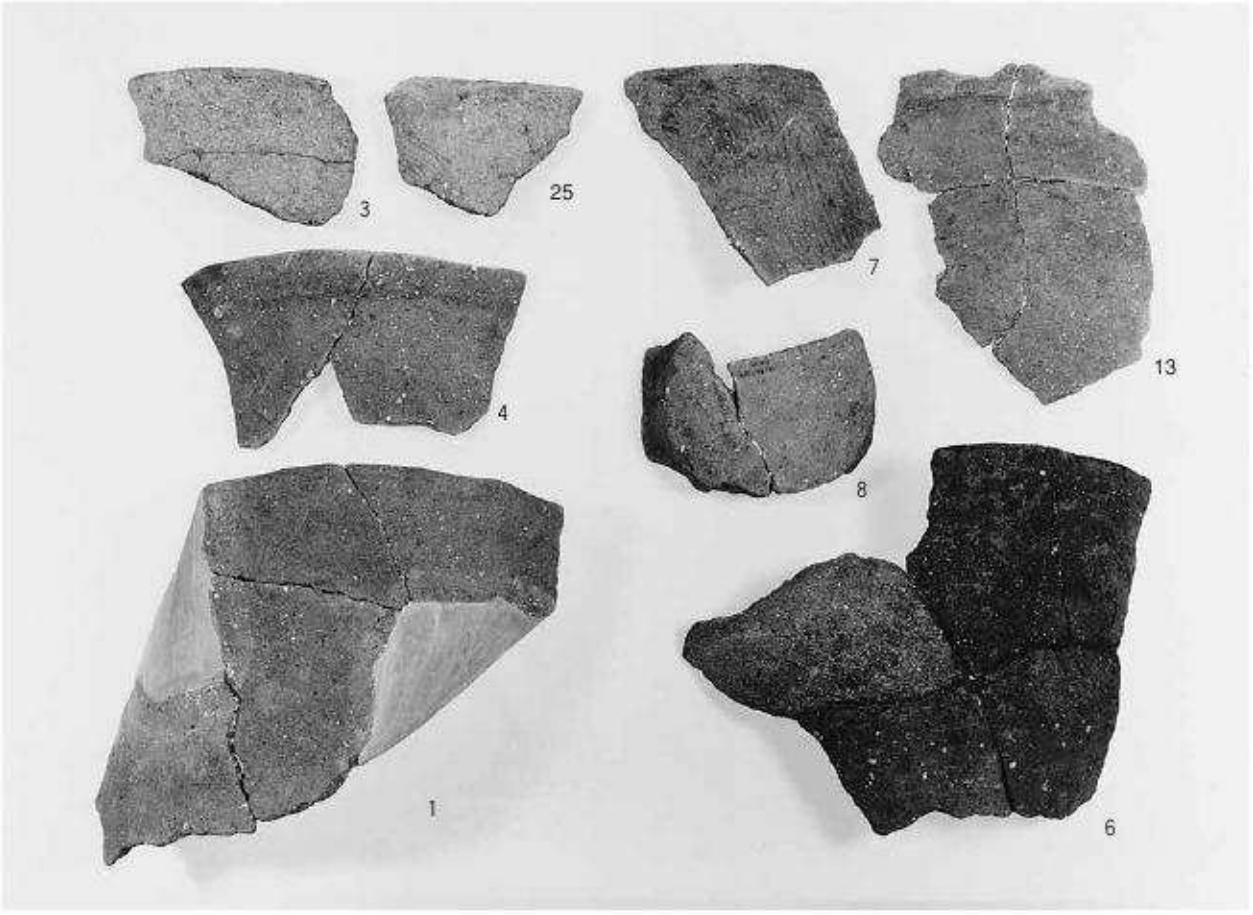
トレンチ全景（北より）

西側中央拡張区（東より）

西壁土層堆積状況（東南より）

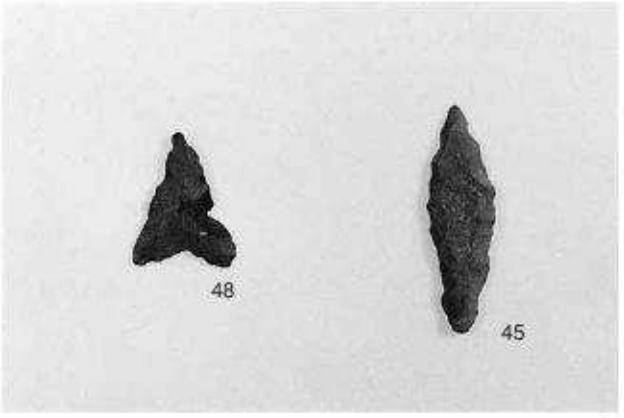



縄文土器①



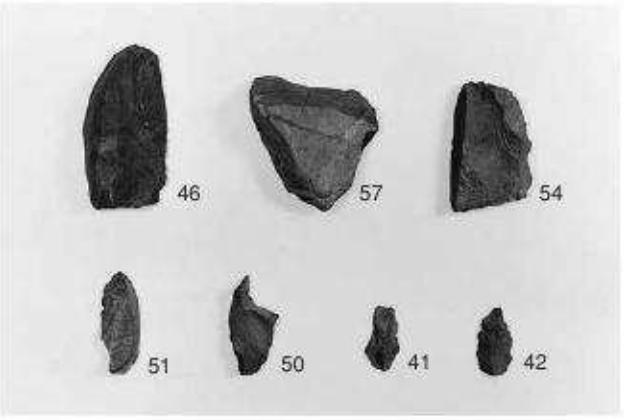

縄文土器②

縄文土器③（注口土器）




石鏃

磨石



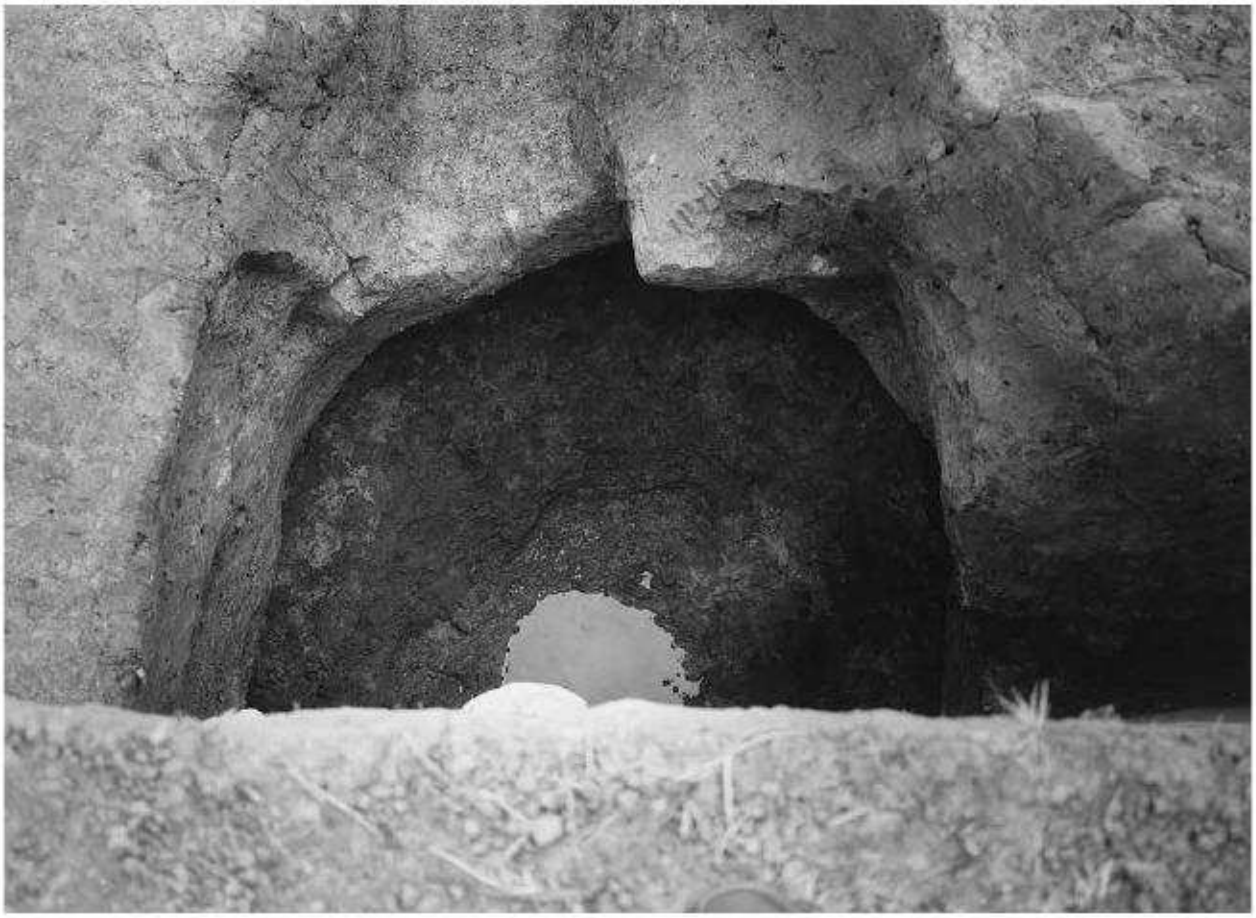

サヌカイト剥片

トレンチ全景①（東南より）

トレンチ全景②（西より）

溝SD1002　河原石出土状況（南より）

溝SD1002　完堀状況（南より）

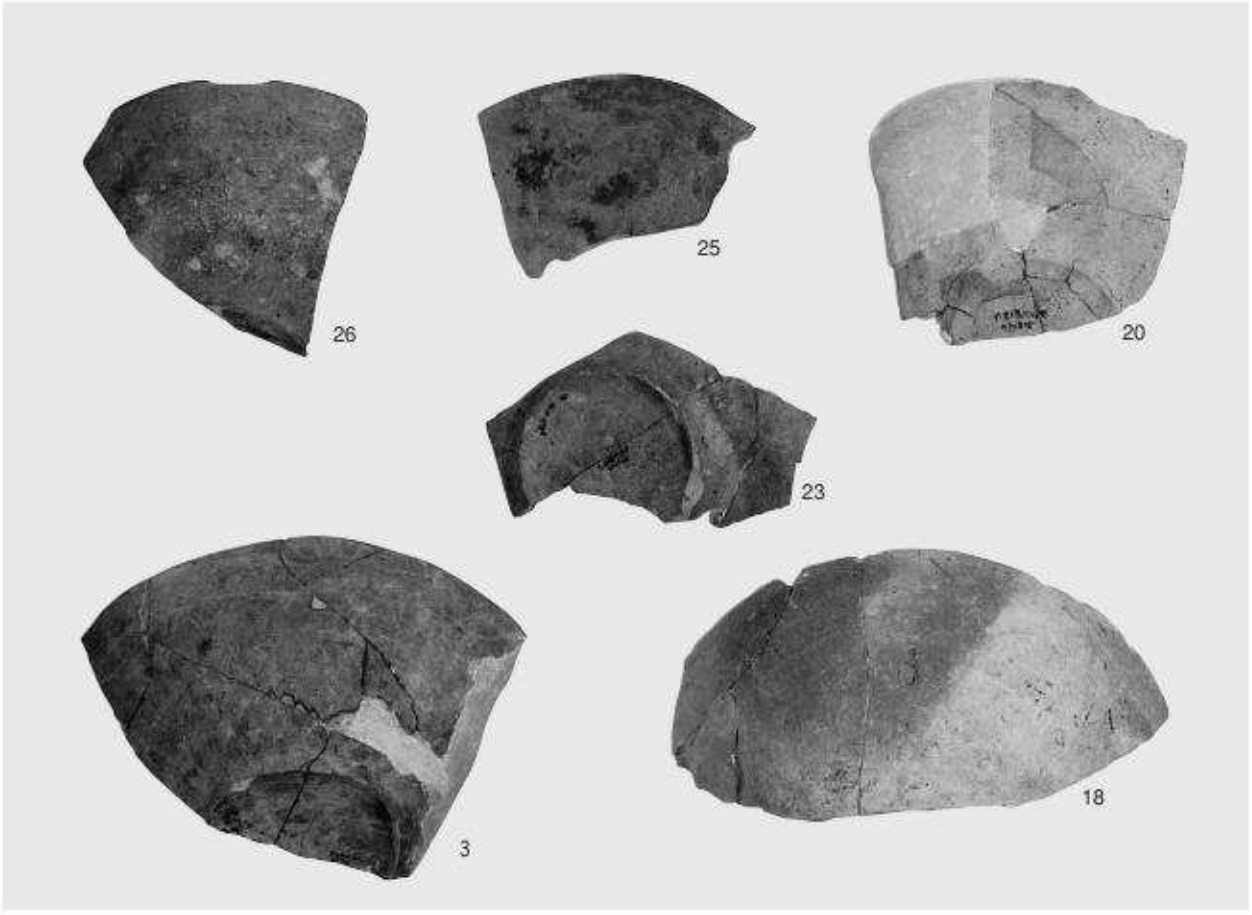


井戸SE1001（北より）

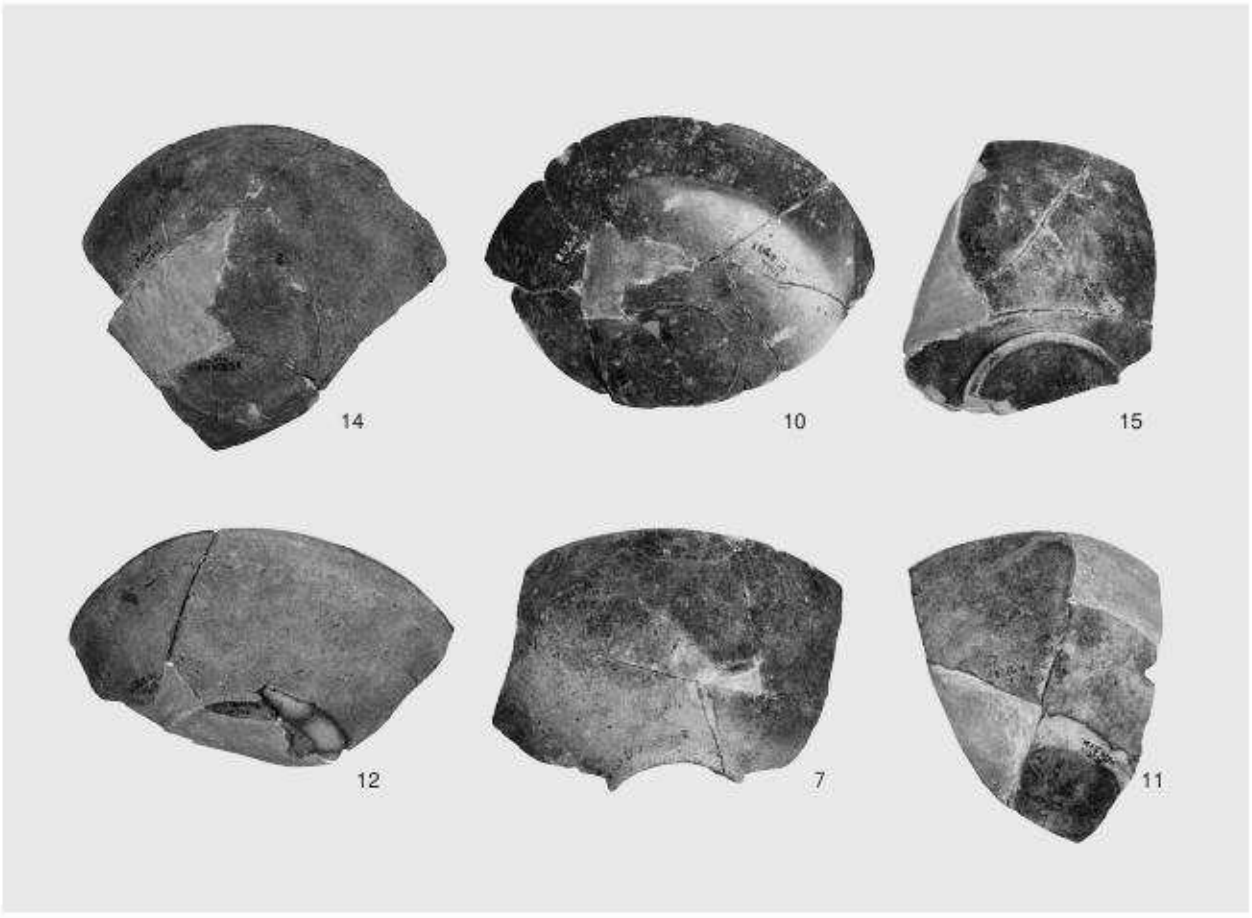
井戸SE1001　土層断面（南より）

落ち込みSX1001（西北より）

南東拡張区（北より）

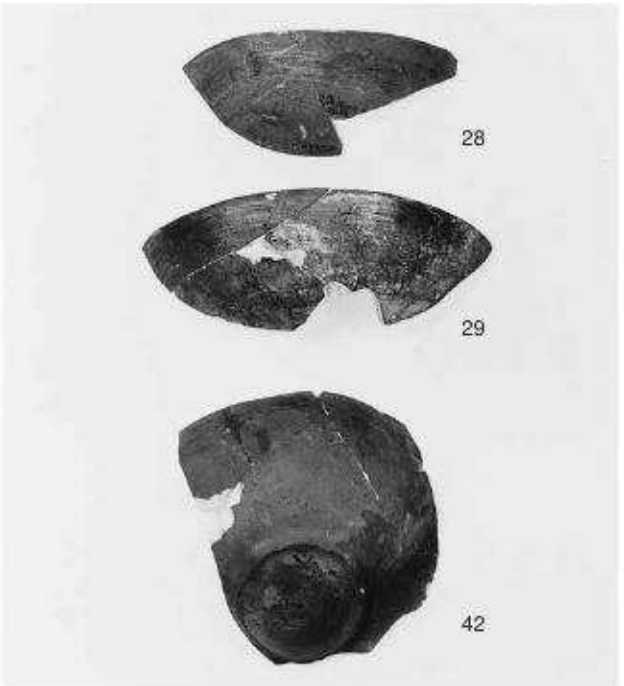



瓦器




落ち込みSX1001・溝SD1002　断割部分出土瓦器

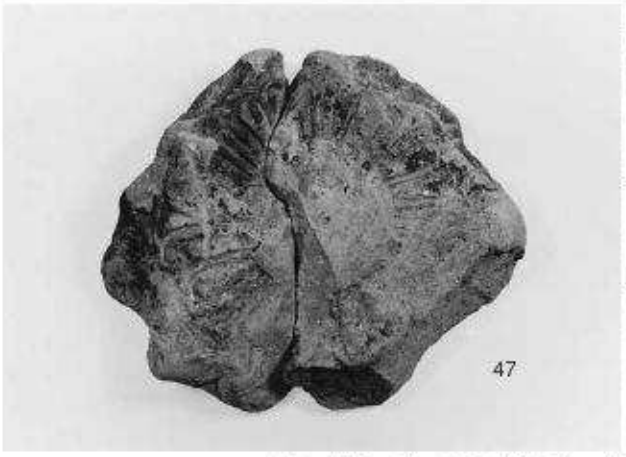
落ち込みSX1001・溝SD1002　断割部分出土遺物




井戸SE1001　出土遺物

溝SD1001　出土瓦器椀

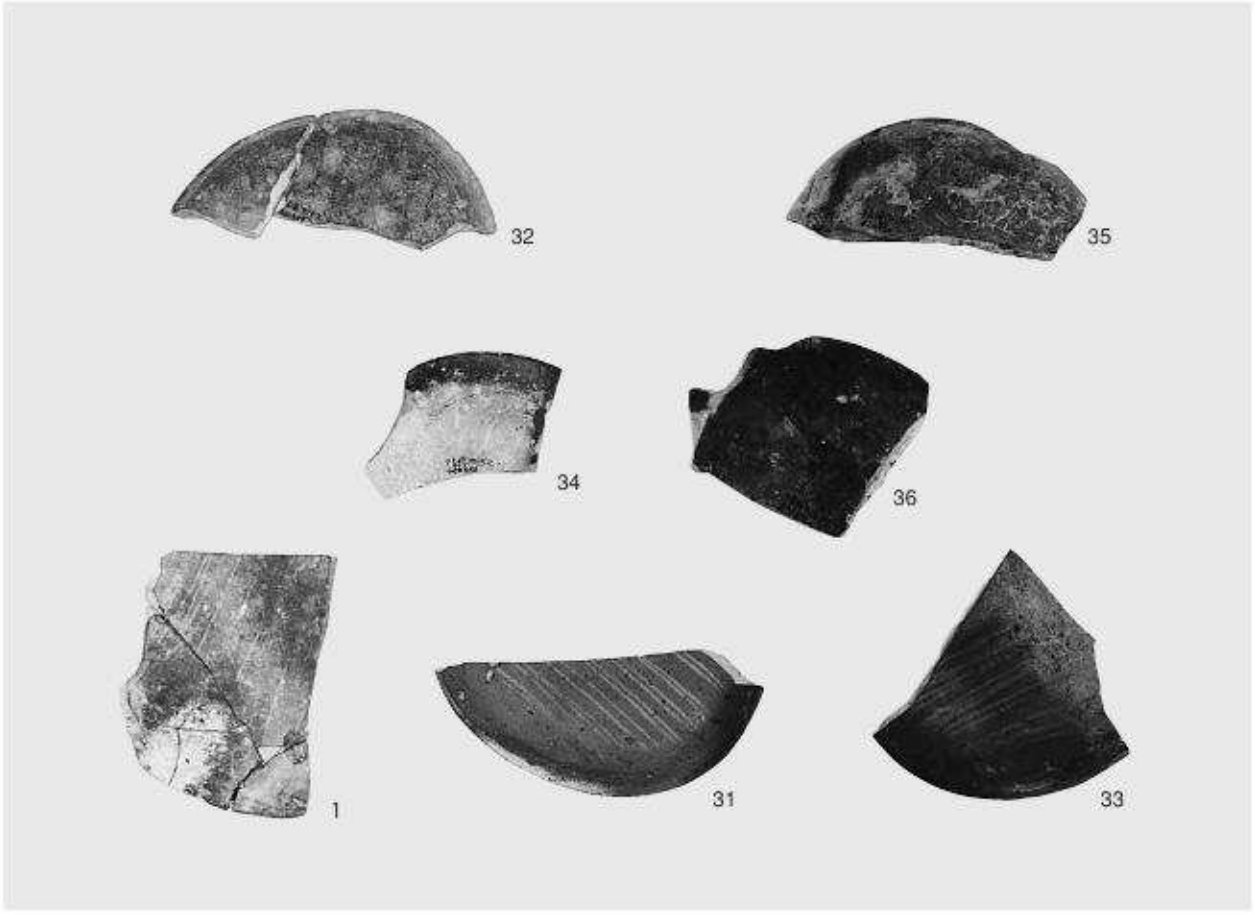
覆土出土瓦器椀



（上）土馬　46、（下）軒丸瓦　47

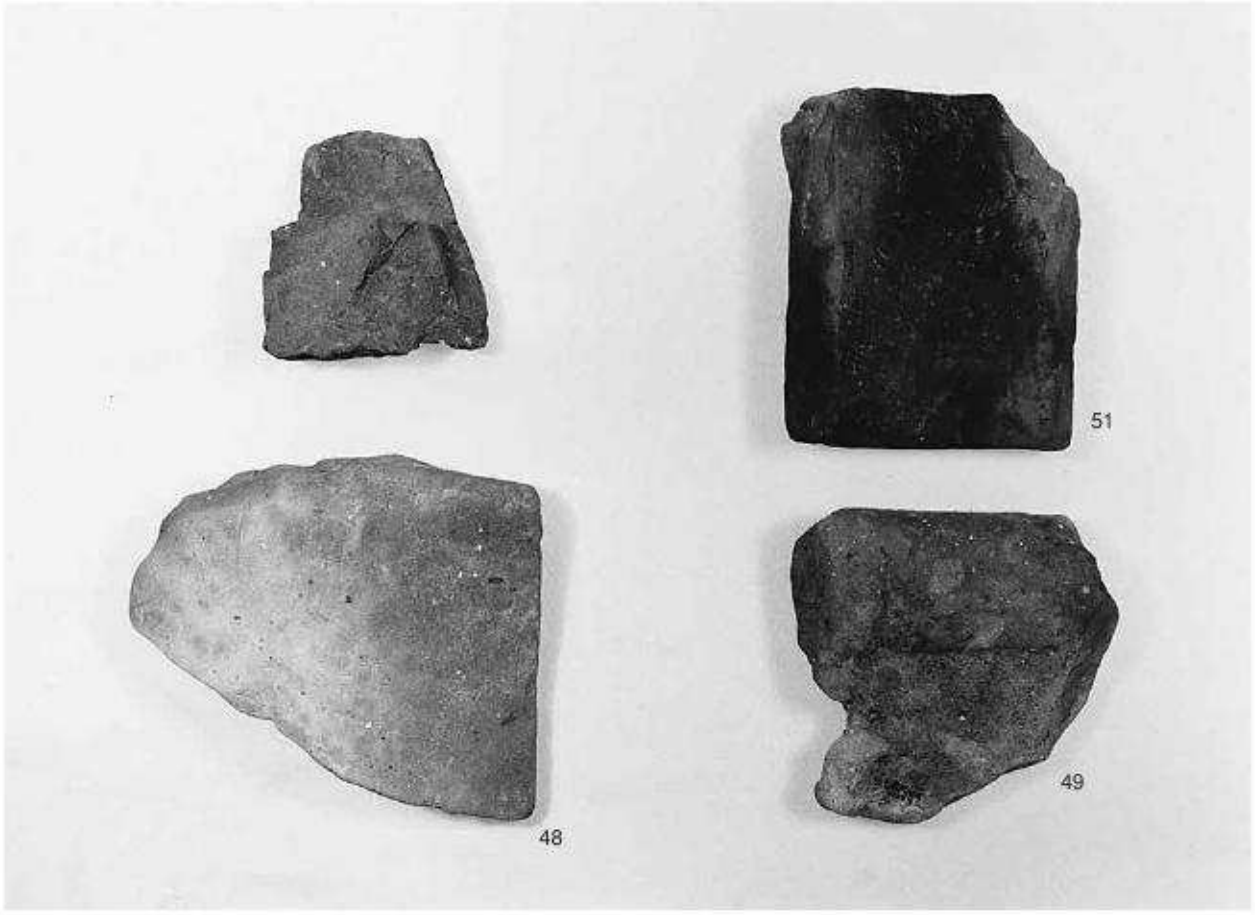
（上）羽釜　41、（下）羽釜補修痕

羽釜

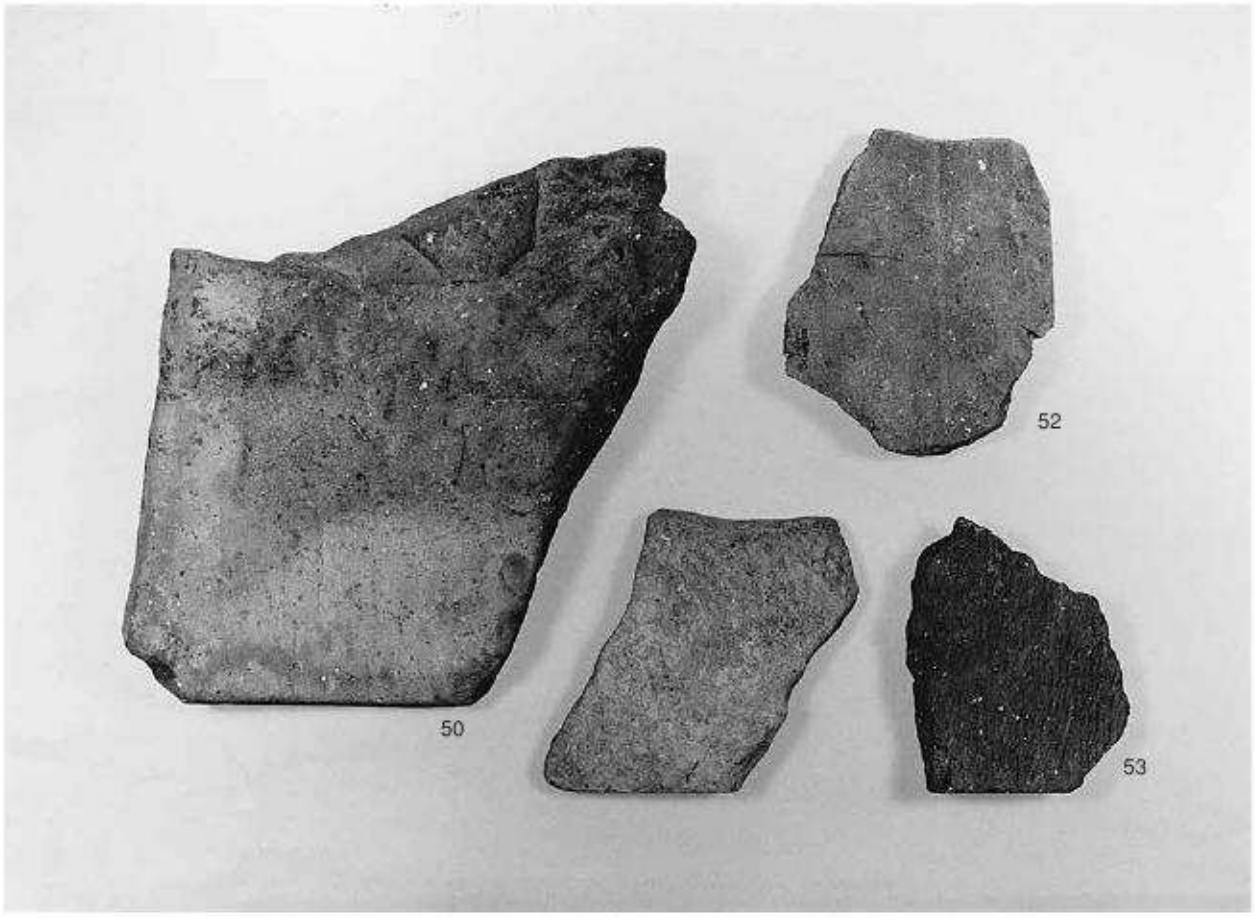



瓦器小皿

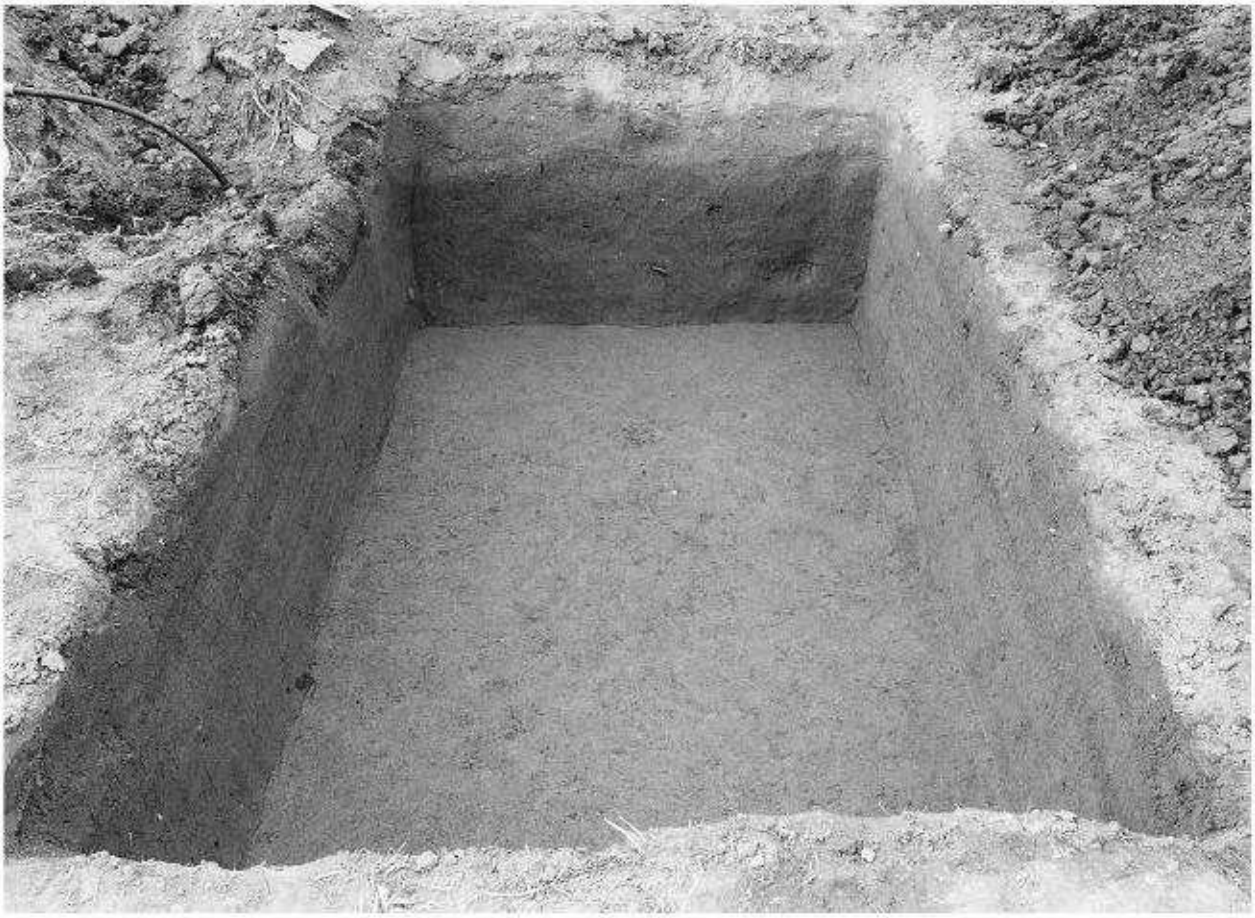
土師器小皿




丸瓦




平瓦



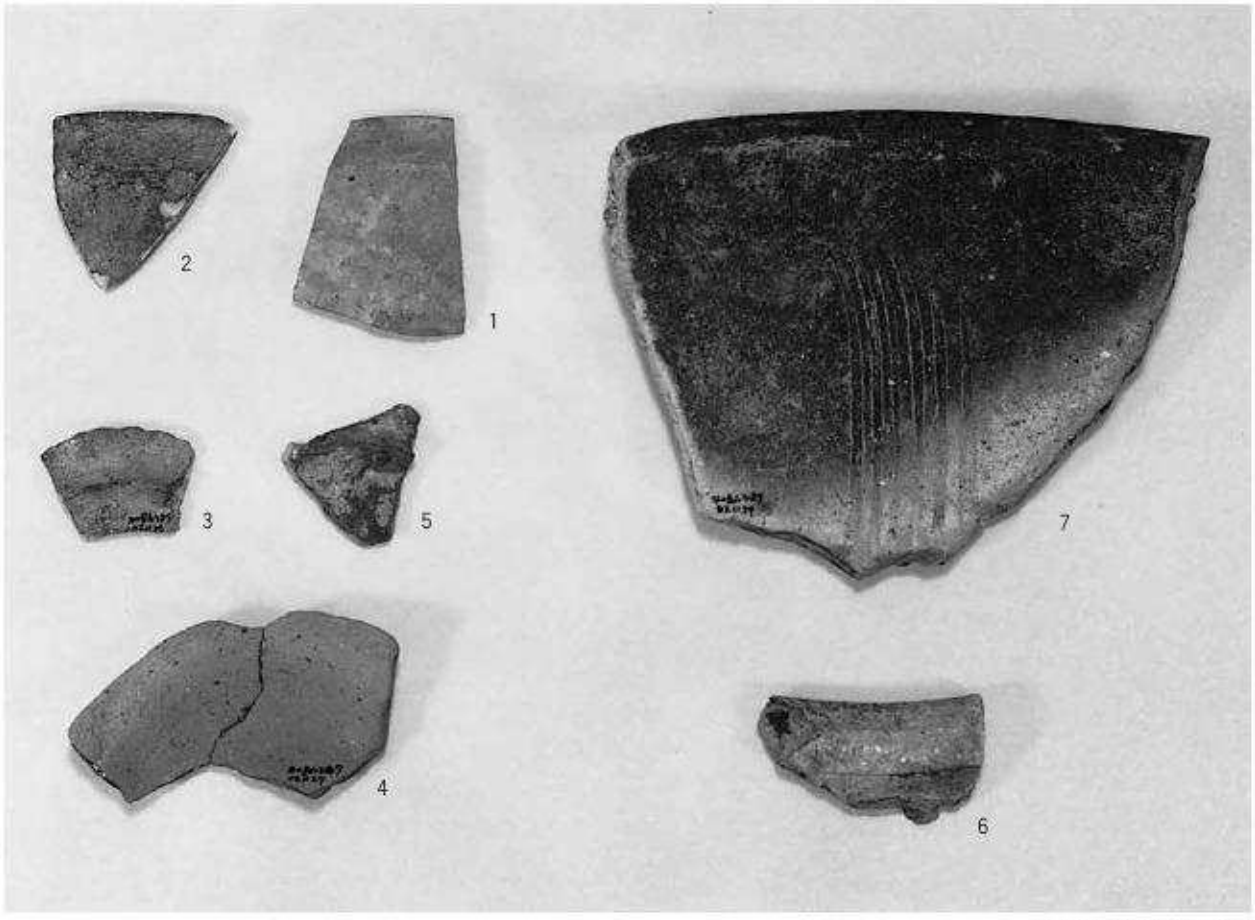
第7層下面平面（南より）

トレンチ東壁断面（西より）

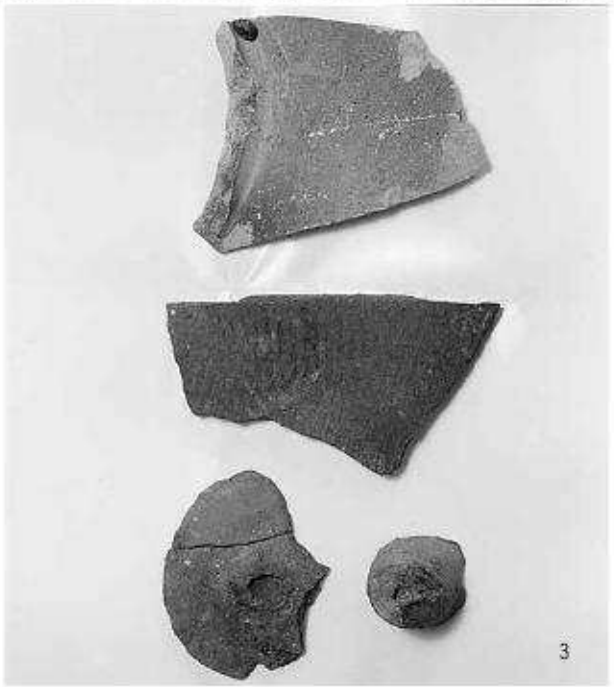
第10層上面（北より）

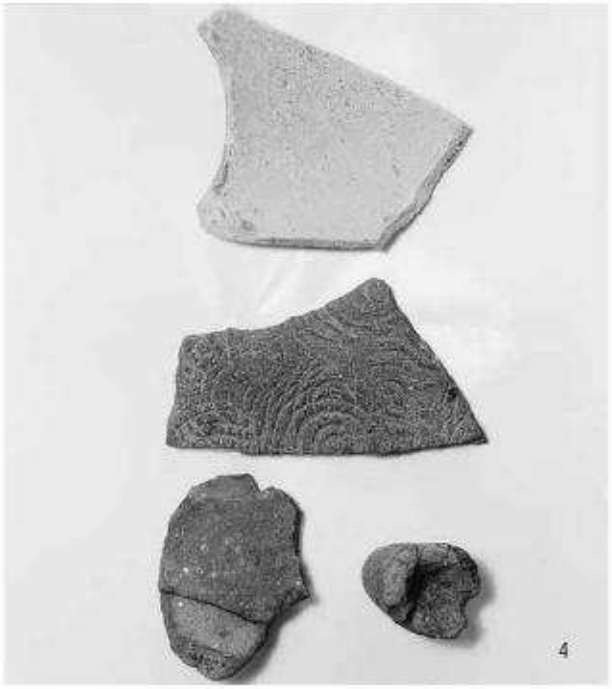
第12層上面（北より）

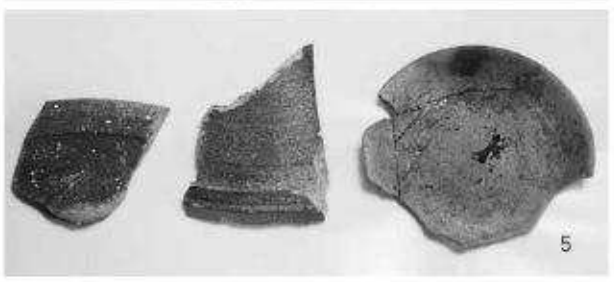
トレンチ東壁断面（西より）

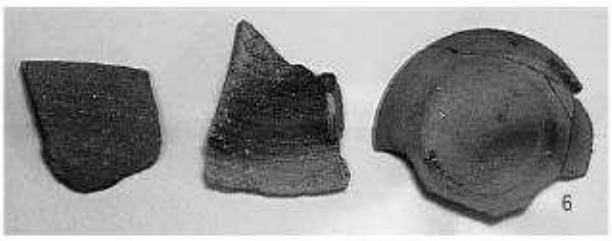



整地土層内出土遺物



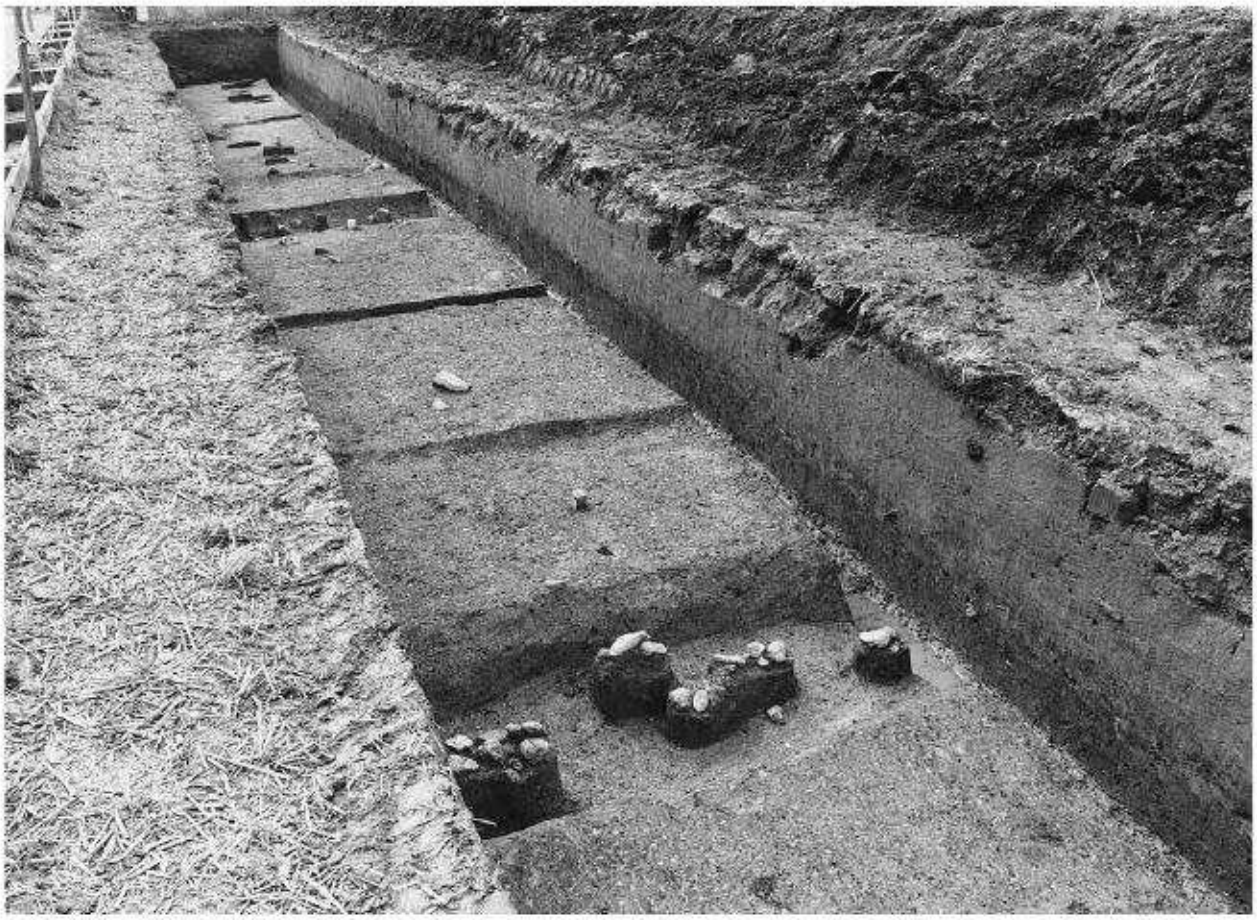




1. トレンチ全景（西より）　2. トレンチ全景（東より）　3. 出土土器①（表）　4. 同（裏）　5. 出土土器②（表）　6. 同（裏）

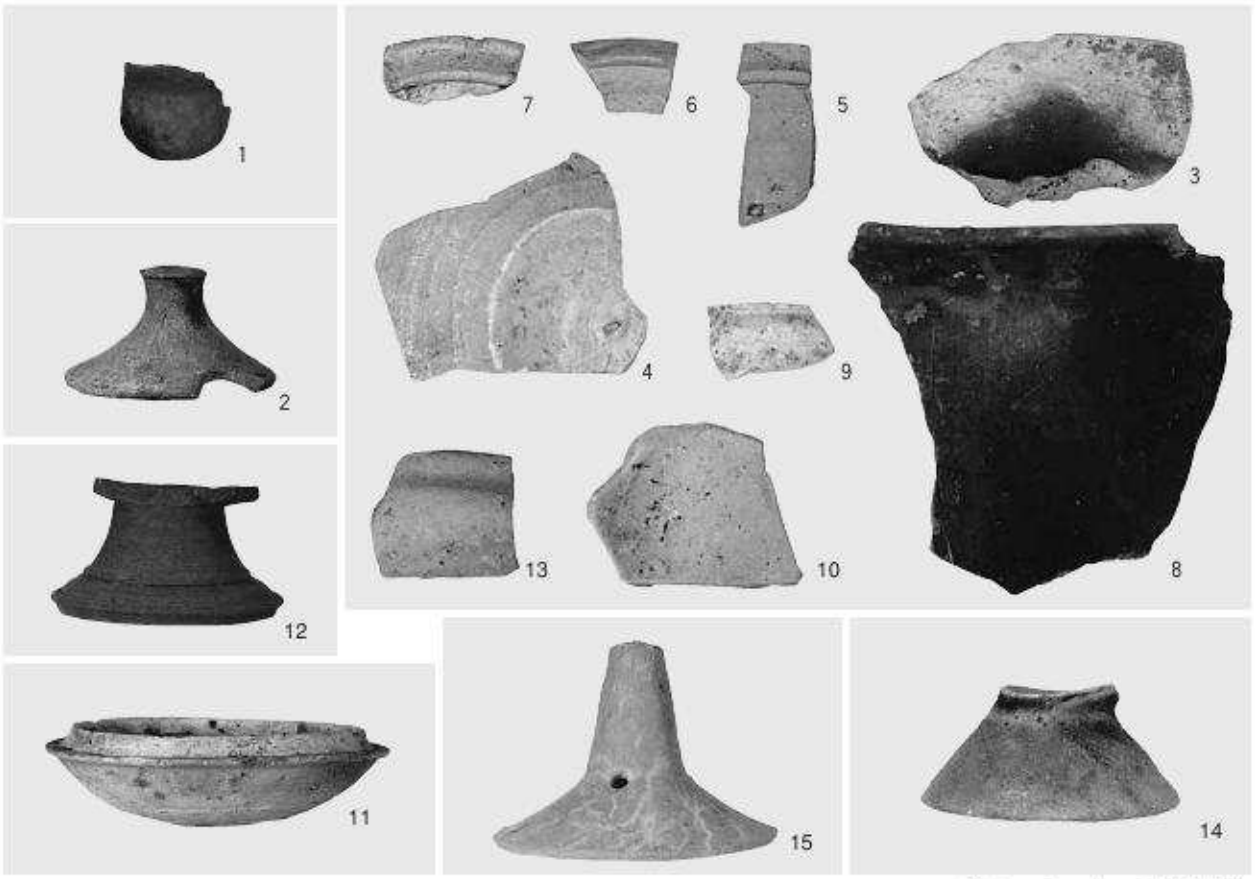
トレンチ全景（南より）



整地土層上面（北より）

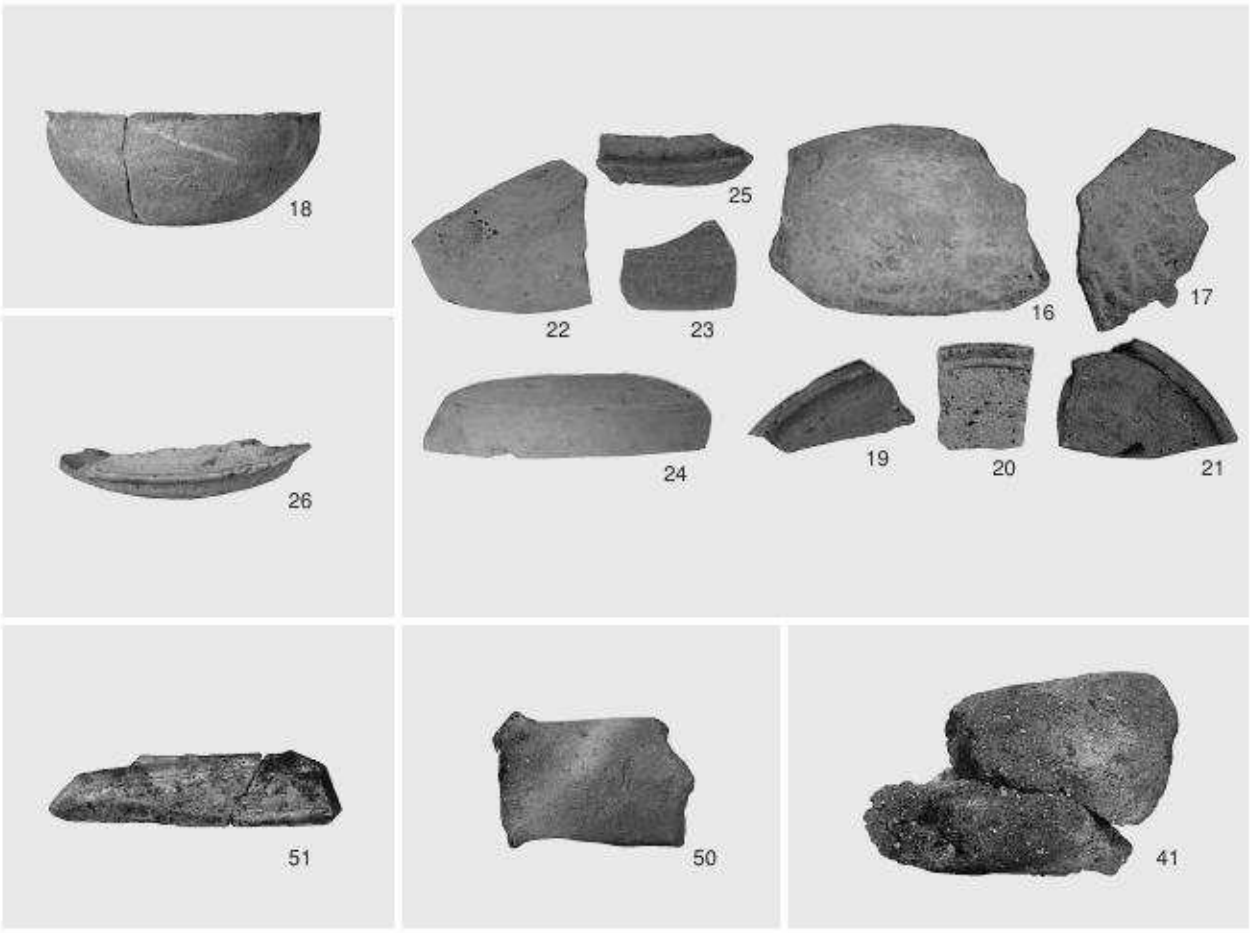
整地土層下層上面（南より）

ピット17断面（西より）

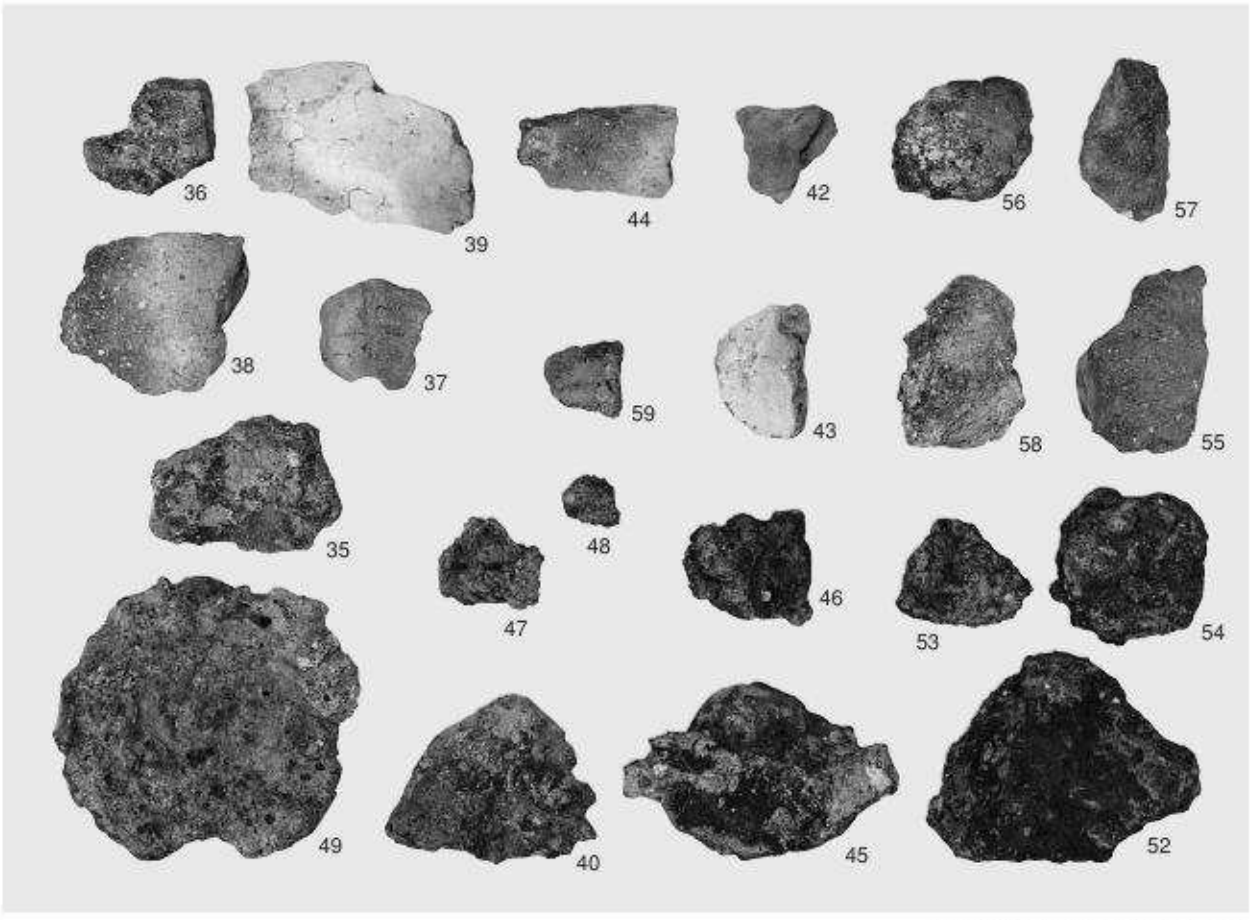



溝1・2・4・5出土遺物

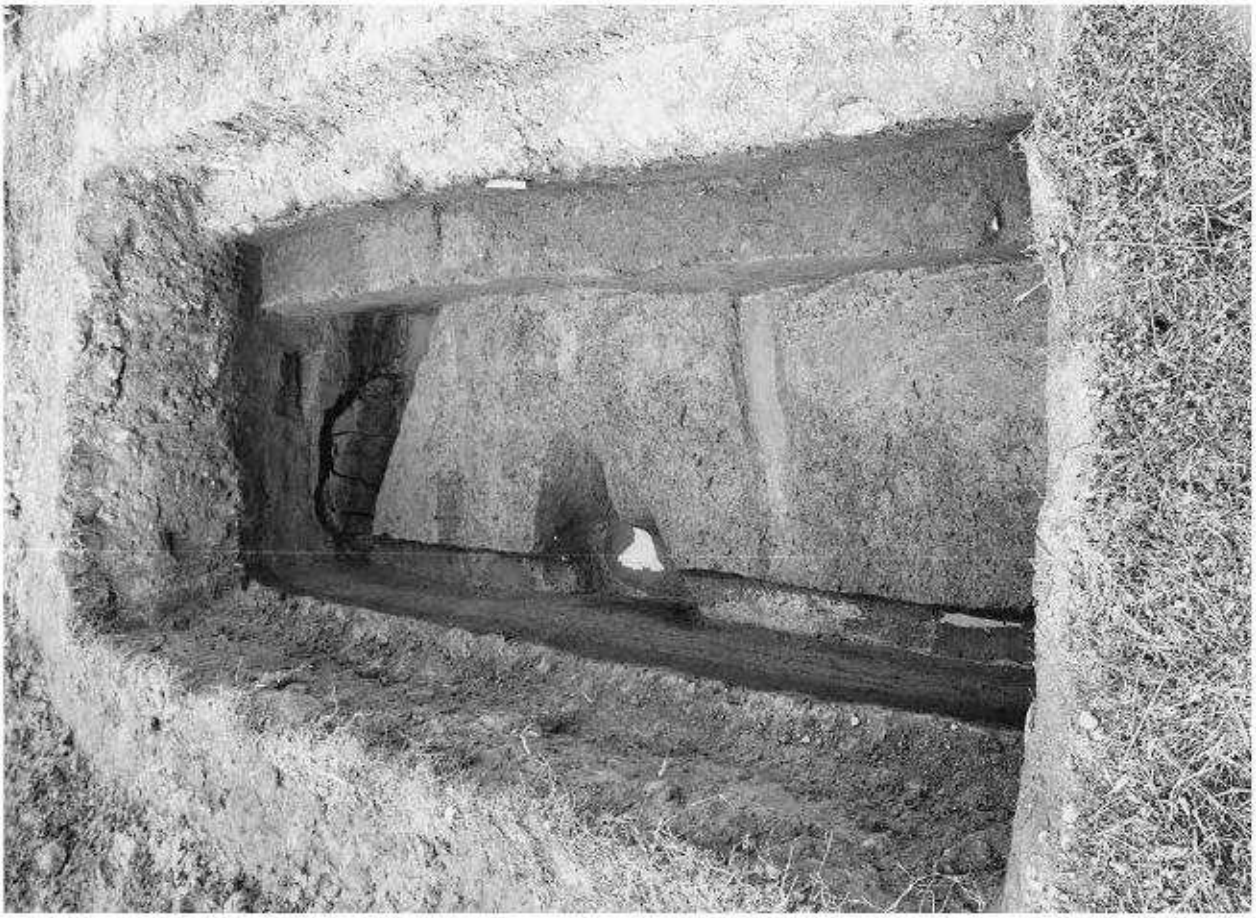
整地土層下層出土遺物




整地土層上～下層出土遺物



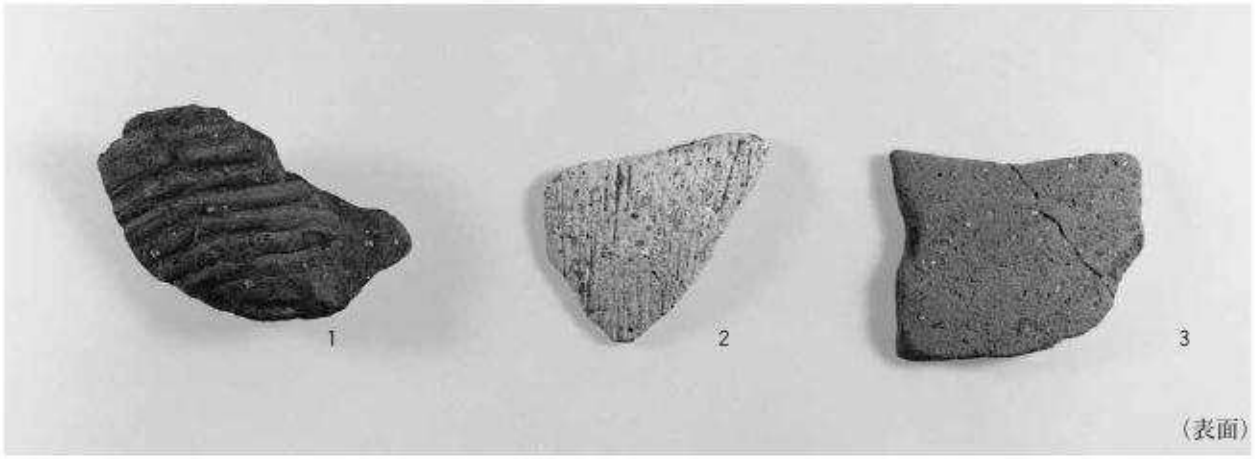

整地土層上・中及び表採遺物



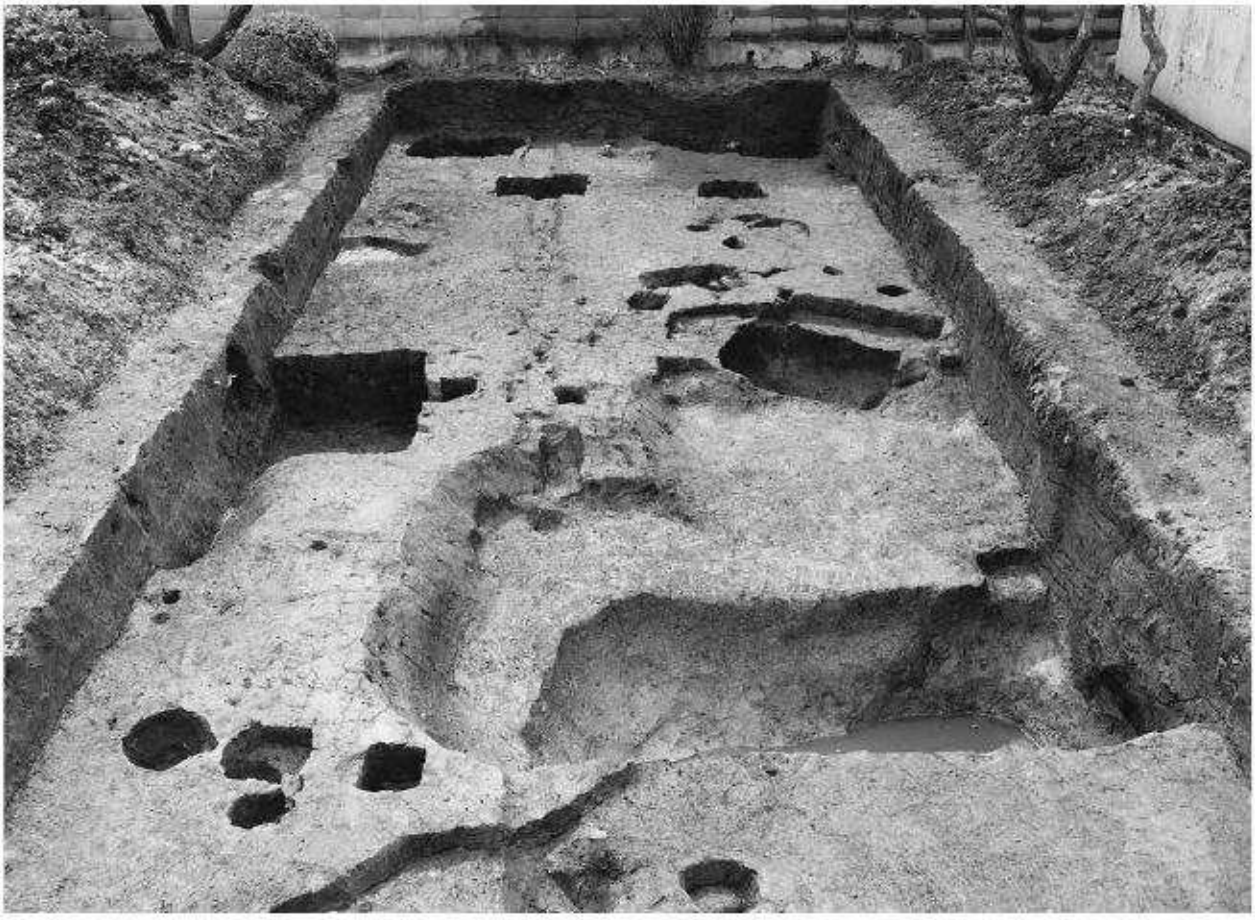
トレンチ全景（東より）

溝2完堀状況（北より）

溝１完堀状況（南東より）

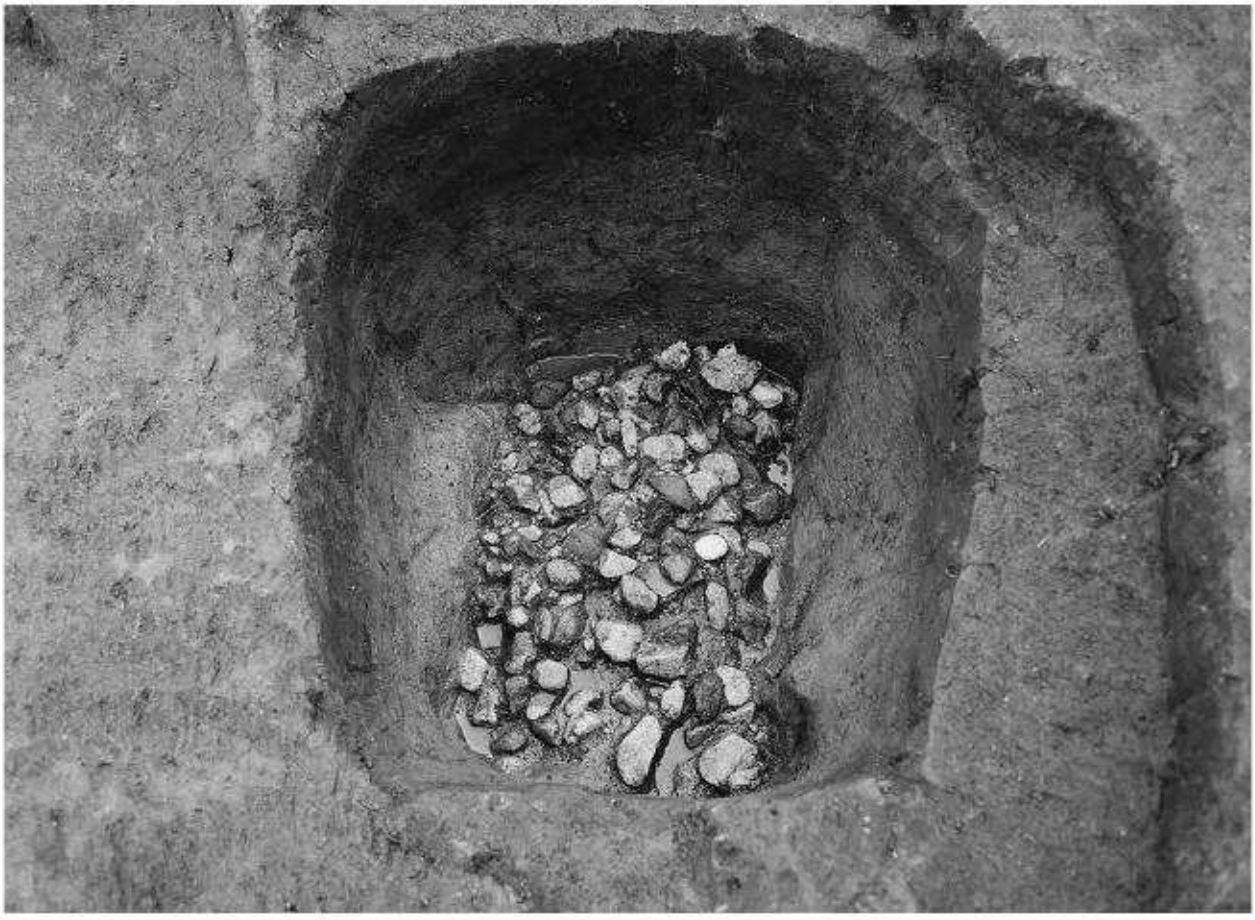


溝１出土遺物



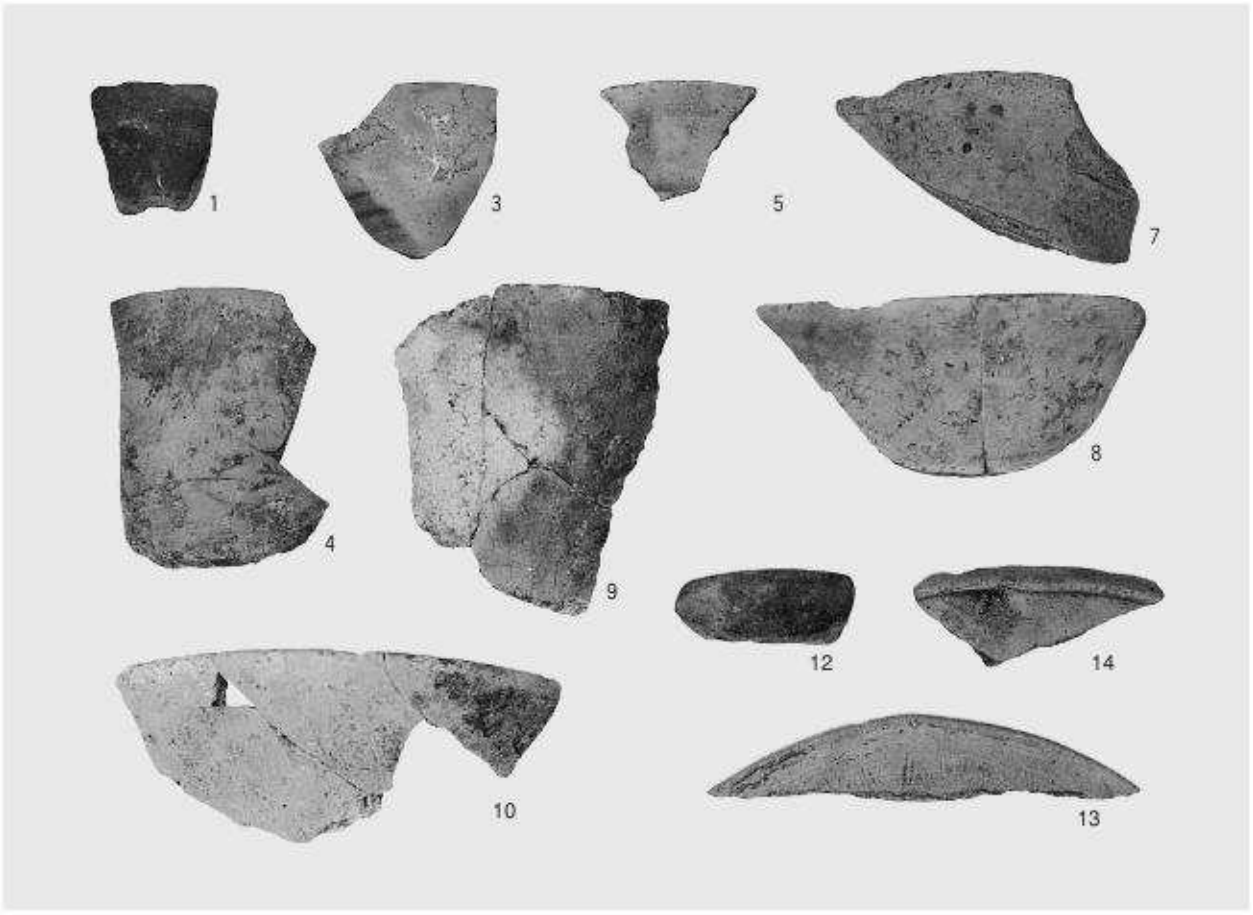
トレンチ全景（北より）

土坑３土器検出状況（西より）

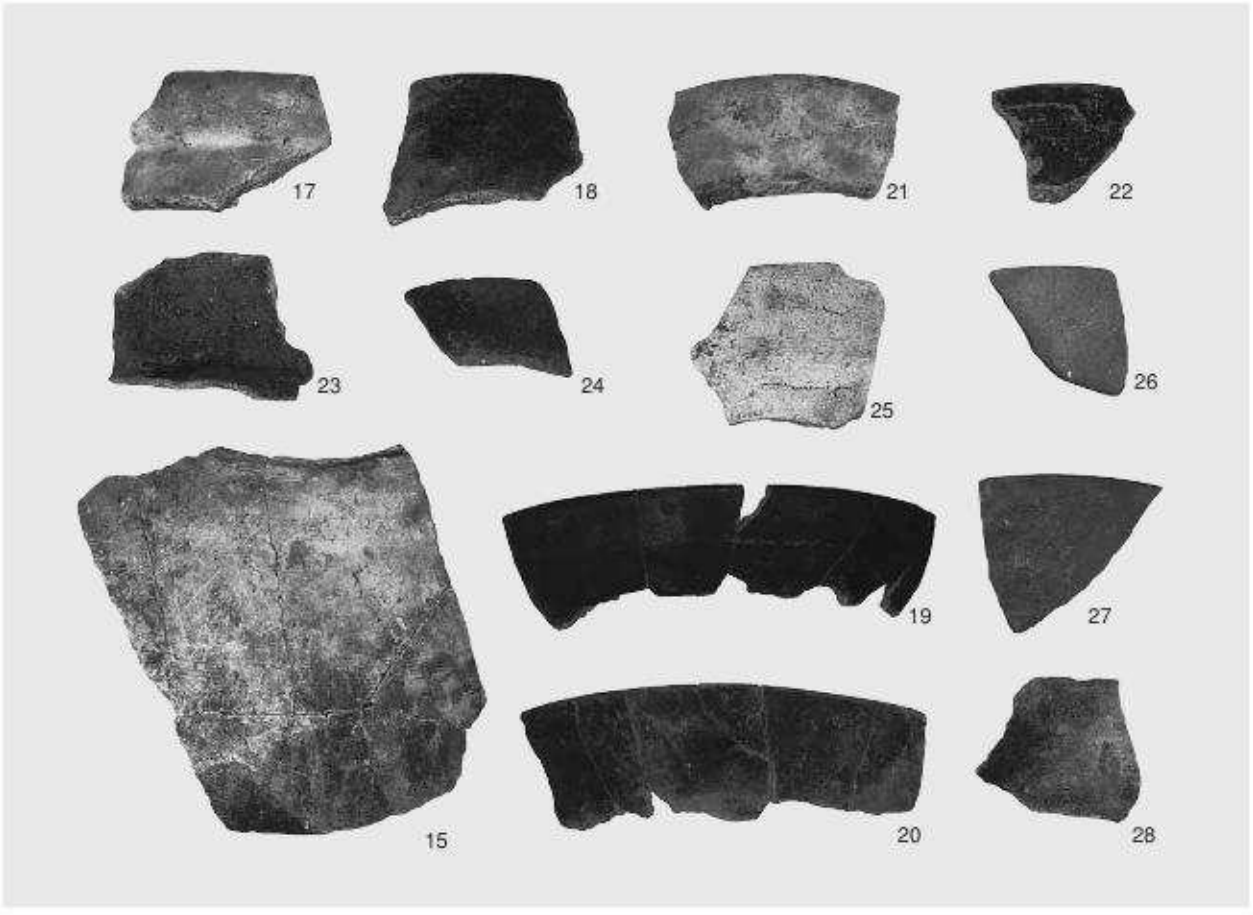


土坑3礫検出状況（西より）

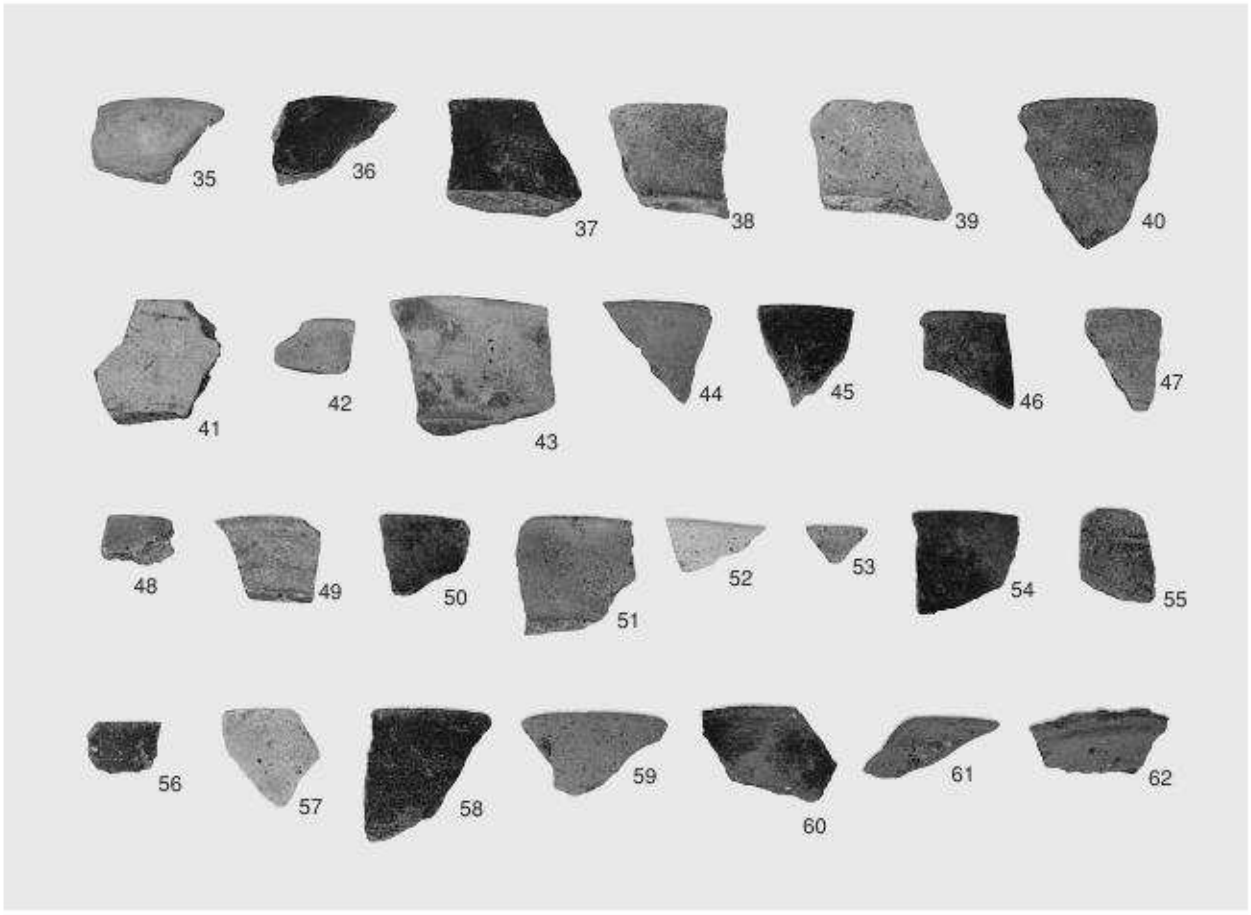
土坑3完堀状況（西より）



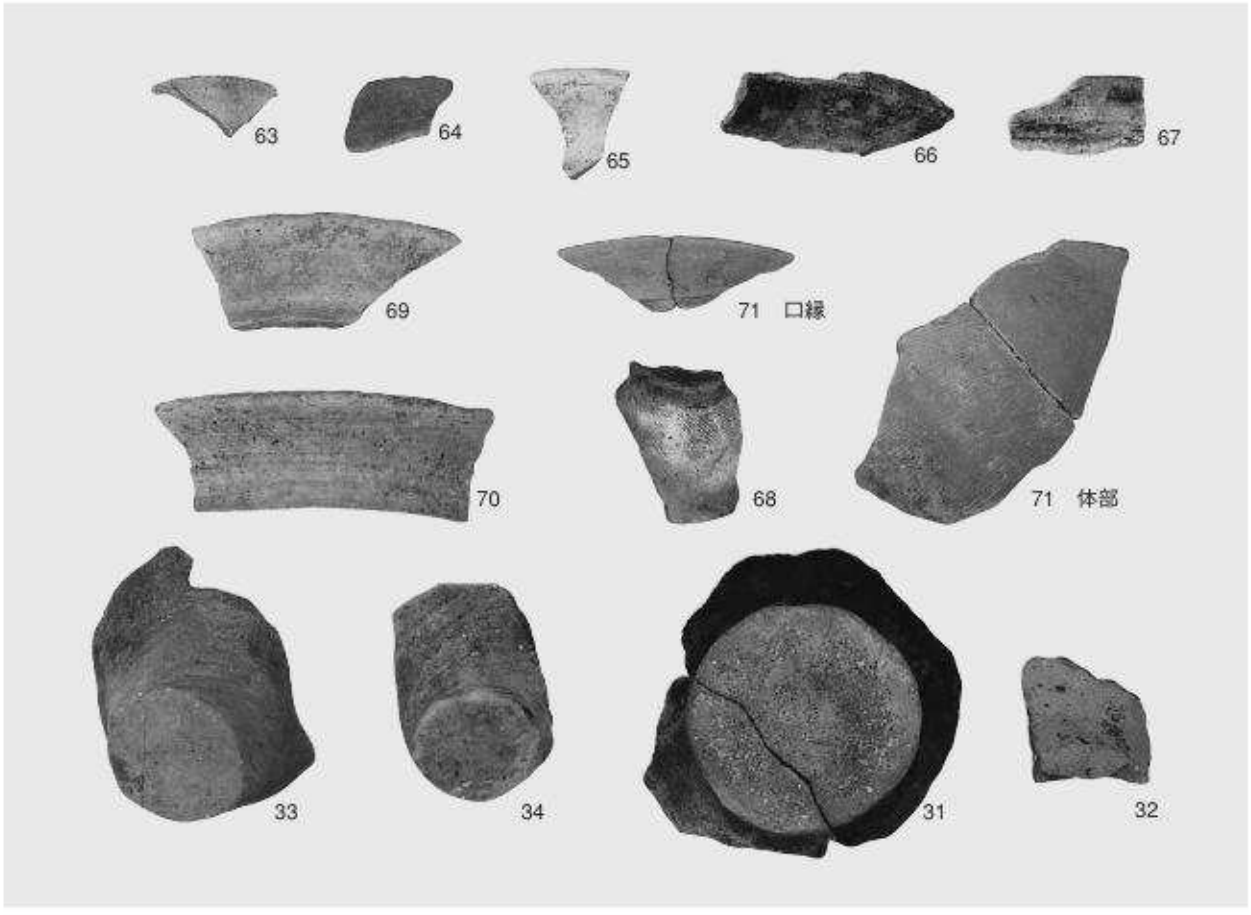

土坑3出土遺物①




土坑3出土遺物②




土坑3出土遺物③




土坑3出土遺物④

2

6

11

72　上面

72　底面

72　側面

16

29

30

桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書　24集

桜 井 市

平成14年度国庫補助による
発 掘 調 査 報 告 書

発 行　桜 井 市 教 育 委 員 会
文　化　財　課
〒633-0074　奈良県桜井市芝58－２番地
TEL　0744－42－6005
FAX　0744－42－1366

年月日　平成15年３月31日

印 刷　明 新 印 刷 株 式 会 社
〒630-8141　奈良市南京終町３－464